

日本におけるスピノザ

MIYANAGA, Takashi / 宮永, 孝

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会志林

(巻 / Volume)

61

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

304

(終了ページ / End Page)

156

(発行年 / Year)

2014-12

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00021186>

日本におけるスピノザ

宮 永 孝

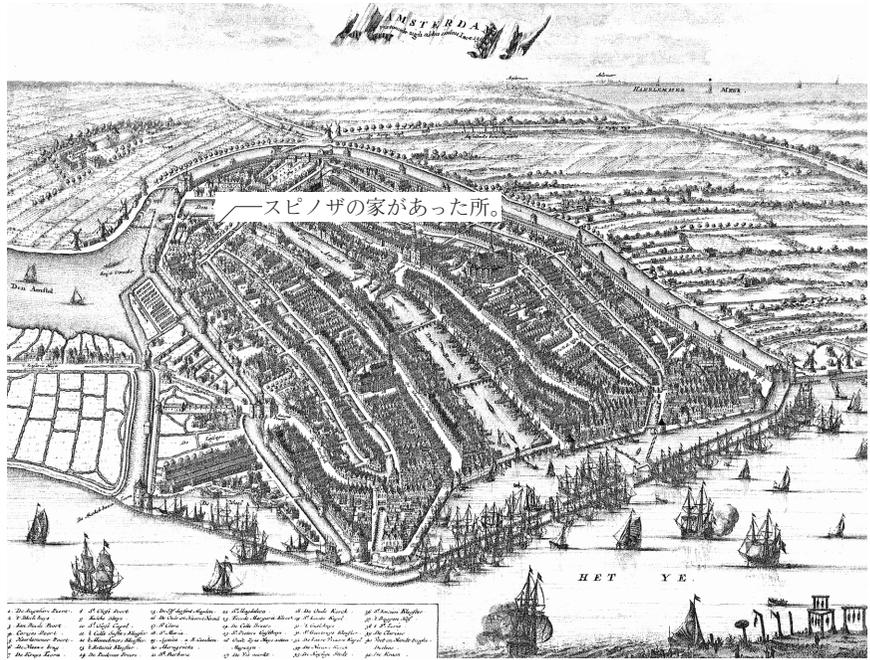
- 一 スピノザ小伝
- 一 解題 日本におけるスピノザ文献
- 一 本稿で取りあげたスピノザ関連文献資料名一覧表
- 一 スピノザと日本
- 一 日本におけるスピノザ（英文）

一 スピノザ小伝

スピノザ (Baruch [Benedictus] de Spinoza, 一六二二—一六七七) は、オランダが生んだ近世初期の著名な哲学者である。その父祖は、スペインのユダヤ人であった。父は宗教的迫害にあり、ポルトガルよりオランダに移住し、ついに自由の生活をえた。スピノザはユダヤ教の教師^{ラビ}たるべき教育をうけたが、宗教的懐疑におちいり、その無神論的傾向のためユダヤ人社会から追放された。かれはブルーノ（一五四八—一六〇〇、イタリアの自然哲学者）の汎神論的自然哲学やデカルトの唯理主義的認識説などを識^しったことが契機^きとなって、ユダヤ教の信仰に不熱心となり、以後教師やレンズミがき、知人からの年金で生計を立てながら、枯淡^{こたん}寡慾^{かよく}の一生をおえた。

スピノザの哲学の方法——その学説の特色は、近世のはじめ以来発達した自然科学や教学的方法によって⁽¹⁾哲学問題を解釈しようとしたもので、幾何学的・演繹的秩序に従って説かれる（合理主義）であった。⁽²⁾

筆者は近年、本邦における西洋哲学の受容史に関心があり、その伝来の略史や明治・大正期のヘーゲルの書誌的研究などを紀要（『社会志林』）



1580年ごろの阿姆斯特ダムの絵地図。〔著者蔵〕

に発表してきた。が、いままで未解決の問題であった「日本におけるスピノザの移入と展開」についての輪郭がようやく見えてきたので、あえて筆をおこすことにした。わが国にはまだスピノザ移植史の研究はないようなので、このような稚拙な研究でも何が資するところがあれば幸いである。

十七世紀を代表する哲学者スピノザは、陸地が海よりも低いとされるオランダの阿姆斯特ダムで生まれ、ハーグで没した。スピノザが生きた時代は、日本の江戸時代——寛永九年かんえいから延宝五年えんぼうにあたる。三代將軍家光から四代家綱、五代綱吉、六代家宣いなのぶ、七代家継いえつぐ、八代吉宗、九代家重、十代家治いえはらまでの四十五年間である。

オランダはヨーロッパ北西部に位置する王国であり、国土は北海沿岸の低地をしめている。面積は約三万七千方キロ。いまの人口はおよそ一千六百万ほどである。北と西は北海にのぞみ、東はドイツ、南はベルギーに接している。国土の四分の一は、海面下(3)にあり、堤防(3)に守られている。オランダは「自然の国境なき国」(4)ともいわれている。

領土の支配をうけた。オランダはまずフランスのブルゴーニュ公、ついでハプスブルグ家、さらにスペインのフェリペ二世（一五二七〜九八）の手に移った。オランダ人は、はやくから商業航海をさかんにし、独立心、自治の気風をつよい人種であったから、フェリペ二世の施政に反抗した。北部の五州と他の二州が同盟をむすび、一五八二年独立を宣言し、オランダ連合共和国を宣言し、オランダ家を代々の総督とした。(5)

スペインの勢力がおとろえてくると、新たにオランダが新興国として頭角をあらわし、スペインやポルトガルの植民地と密貿易をやった。一六

○二年オランダ東インド会社が創立され、一六一八年にはジャバ島（現・インドネシア）のジャカルタを取り、バタビアと改名し、総督府を置いた。オランダはその後さらに版図をひろげ、モルッカ諸島・マラッカ・セイロン島・ケープ植民地（アフリカ）におよび、台湾・中国・日本とも交易した。

低地に住むオランダ人は、自然との闘いに異常な忍耐力をしめしたが、⁽⁶⁾もともとその性質は、勤勉・質素・堅忍・温順であり、必要以上に暴力を用いず、平和的に商いをした。交易が成功したカギは、この点にあった。十七世紀には、オランダは航海・商業・製造・漁業すべての点で繁栄した。スピノザが生まれる二年前——一六三四年の商船の数は、二万四〇〇〇隻であった。これはヨーロッパ船舶の四分の三に相当した。オランダの貿易の高は、ドイツ・フランス・イギリス・ポルトガル人を圧倒し、その国富は世界第一とされた。

一六四八年アムステルダム銀行の金庫には、うなるほどの金があった。金銀塊だけでも三億フルデンあったとされる。⁽⁸⁾オランダは商業活動の分野にかぎらず、学芸においても多くの名士を輩出した。グロティウス（一五八三〜一六四五、法学家・政治家、国際法の祖）、レンブラント（一六〇六〜六九、画家）、哲学のスピノザもこのころの大家である。

オランダは、経済や学問・芸術において大いに発展はしたが、政治的には大きな弱点をかかえており、これがのちに国威が衰退する原因となった。

この国は、各州の独立を旨とし、各州から派遣される議員（いわば大使）が、議題についてじぶんの出身母体に報告し、その訓令を待つことを議したから、敏速さ、統一、秘密保持がむずかしかった。⁽⁹⁾さらに各州には、それぞれ二つの党派があった。一つは貴族的共和党、もう一つは民主的君政党（オラニエ党）である。この両派はあつれきをくり返していた。

スピノザの先祖は、ユダヤ人であり、ローマ時代にスペインでくらししていた。かれらはセファルディ人⁽¹⁰⁾（スペイン・ポルトガル・北アフリカ系のユダヤ人のこと）と呼ばれていた。イスラム教下のスペインでは、ユダヤ人は何んら強制も束縛もなしにくらししていたが、イベリア半島（ヨーロッパ南西部—スペイン・ポルトガルを包括する半島）の北部でキリスト教勢力がもとの力をはじめたとき、事情は急変した。イスラム教におとらずユダヤ教も敵視されるようになったからである。

スペインの支配下でなかったころのポルトガルは、ユダヤの移住民にとって避難所であったが、一四九八年ポルトガルとスペインが縁組をするさいに、ユダヤ人は強制的にカトリック教に改宗させられた。スピノザの先祖もまたカトリックの強制洗礼をうけ、^{スエボスクリスチアノス}“新キリスト教徒”とか“マ



オランダの地図

Espinosa は “いはら町” の住民の意であるという¹²⁾。スピノザの祖父は、イサーク・デスピノザといった。その子、すなわちスピノザの父は、ミカエル・デスピノザといい、十六世紀末に南ポルトガルの町ヴィディゲイラで生まれた。スピノザの一家がポルトガルに移住したのは、一四九二年であり、六年後の一四九八年にカトリック教に改宗したらしい。

一五九三年の春¹⁴⁾ “マラーノス” (軽べつ的にユダヤ人) の二団が、秘かにポルトガルの海岸から出帆し、ひとまずオランダをめざした。かれらは平穏な航海をへたのちエムデン (ドイツ北西部——ブレーメンの西北西一二五キロ) に上陸し、当地のユダヤ人の世話になった。が、かれらの助言にしたがって逃避者らは、アムステルダムにむかうことにした。スピノザの一家は、同年四月二十三日のことであった。

ラーネ” (フタ野郎の意) と呼ばれた。

スペインに併合されていたオランダが独立し、精神的自由とたくましい商魂の機会をあたえてくれるこの国が、こんどは新たな避難所のように思えた。ユダヤ人が目ざしたのは、商港アムステルダムであり、そこには宗教と商業活動の自由があった。じっさいオランダはヨーロッパでもっとも寛容な国であった。¹¹⁾

スピノザ一家の出所は、カンタブリア山脈 (スペインの北海岸に連なる) のふもとにあるカスティリア (スペイン中部から北部にかけての地方) の町——エスピノザ・デ・レス・モンテロスである。

Espinosa はスペイン語で “とげ” を意味し、



アムステルダムのワーテルロー広場にあるスピノザの像。
[筆者撮影]

スピノザの父は、生涯に三度結婚した。最初の妻ラヘルは、一六二七年娘レベッカをのこして死んだ。翌年ハンナ・デボーラと結婚し、長女ミリアム、長男スピノザ、次男イサーク、三男アブラハム（ガブリエル）が生まれた。

本稿の主人公スピノザ——本来の呼び方は、ポルトガル語で「ベント」といい、ヘブライ語で「バルッフ」、ラテン語で「ベネディクトゥス」といった。が、著述においても手紙でも「ベネディクトゥス・デ・スピノザ」と名乗った。ともあれこの未来の哲学者は、一六三二年十一月二十四日アムステルダムで生まれた。かれの生家は、こんにちこの地上からあとかたもなく消え、何ものこっていない。

スピノザの父ミカエルは、家をもたず、一家はオランダ人ウィレム・キック⁽¹⁵⁾という人の借家でくらしした。それは木造の一戸建て⁽¹⁶⁾であり、ハウトフラフト通りの運河のほとりにあった。あたりはユダヤ人居住区の繁華な、人の往来の多いところであり、青物市場もちかくにあった。また住居の近くにはポルトガル系ユダヤ人のためのタルムド・トラ礼拝堂⁽¹⁷⁾があった。また家があった裏手の通り——ド・ブレイ街（ユダヤ人街）には、画家レンブラントの家がいまもある。いずれにせよ、スピノザの生家は十八世紀に取りこわされたようである⁽¹⁸⁾。その跡地は、こんにちのワーテルロー広場である。

スピノザの父は、何を生活の手段とし、家族をやしなったのか。父は貿易商であり、果物・ブドウ酒・羊毛・リネン・レース・香料・タバコ・穀物・チーズ・船具など、オランダの加工貿易⁽¹⁹⁾に役立つものをあつかった。かれは商いのかたわら、ユダヤ人共同体のしごとをやった。

スピノザの幼少年時代については、ほとんど知られていない。家ではポルトガル語を話し、スペイン語も多少は理解できた。後にスピノザは、オランダ語やラテン語のほか、ヘブライ語にも通ずるようになるが、母語としたのはポルトガル語であったようだ。幼年時代のスピノザは、ユダヤ人が住む街路で、近所の子どもたちと遊ぶ平凡な男の子であったであろう。



Baruch Spinoza

スピノザの肖像

晩の祈りまで指導した。⁽²¹⁾ オランダのことからは、言語や歴史にしても、学校では教えなかった。スピノザがこのユダヤ人学校で習った教科は、つぎのようなものであった。⁽²²⁾

〔担当教師〕

〔学年（級）〕

〔教科〕

一年級……ヘブライ語。モーゼの五書（旧約聖書のはじめの五書）創世記・出エジプト記・レビ記・民数記・申命記など）

二年級……ヘブライ語。モーゼの五書

三年級……ヘブライ語。モーゼの五書

四年級……ヘブライ語修了。

サローム・ベン・ヨセフ

五年級……（旧約聖書の）預言者および聖文学（旧約聖書第三部）詩篇・箴言・ヨブ記・雅歌・ルツ記・哀歌・伝道の

書・エステル記・ダニエル書・エズラ記・ネヘミア記・歴史志上下など）。タルムード（ユダヤの律法とその解説）。

アナッセ・ベン・イスラエル

六年級……タルムード。ヘブライ語文法。⁽²³⁾

カカム・モルタイラ

七年級……タルムード。

一六三九年スピノザ（七歳）は、一六三七年に復活した「ユダヤ人学校」^{タルムード・トーラス・スクール}（Talmud Tora School）——「律法をまなぶ学校」・別名「生命樹」^{ハヤム・デス・レフエス}）に入学した。

この学校は授業料を払う必要はなかった。スピノザが通った学校は、家の目の前にあるハウトフラフト運河にかかるシュマウスイエスという橋を渡り、右に折れてしばらく行くとポルトガル系のユダヤ教会があり、そのそばにあった。クラスは七つにわかれ、それぞれ教室をもち、教師もきまっていた。授業は午前八時にはじまり、三時間ほど勉強し、午前十一時に終業の鐘がなった。生徒はいったん帰宅し、昼食をとったのち、午後二時に学校にもどり、五時まで勉強した。⁽²⁰⁾ 教師は朝の祈りから



モーゼス・マイモニデス

スピノザはユダヤ人学校 *Hebrewische School* で、ヘブライ語（セム語族に属する言語。旧約聖書の大部分は、この言語で書かれている）や聖書や聖文字、ユダヤ民族の教義についての基礎教育をうけた。十五歳になるころ、将来を嘱望される生徒のひとりとみられていたが、思想的に²⁴ませていたために内的葛藤があり、古い信仰にもとづいた聖書の解釈に疑義が²⁵あった。

スピノザがこの学校で、マナッセ・ベン・イスラエルやサウル・レヴィ・モルタイラといった教師から深い感化をうけた。²⁶前者のイスラエルは、一六〇四年リスボンで生まれ、程なくアムステルダムに²⁷来た。十八歳で教師となり、説教もうまく、ラテン語に通じていた。一六五七年に亡くなった。後者のモルタイラは、一五九六年にドイツ系のユダヤ人として北イタリアのベネチアに²⁷生まれた。ユダヤ人学校の上級クラスを担当したのは、このモルタイラであった。かれは文筆の才のほか、説教がうまかった。しかし、心がせまく、ユダヤの慣行に反することにはがまんできなかった。²⁸

一六四五年ユダヤ人学校の過程をおえたスピノザ（十三歳）が、つぎに進んだのは「律法学院」(*de hogere Meдрassim van de Talmud Torá School*, モルタイラが一六四二年に平信徒のために設立したもの)であった。かれはこの学院に入学し、聖書やユダヤの律法、ユダヤの神秘説（ユダヤ教の神秘的聖書解釈法）などについての知識を深めたとされる。²⁹

スピノザは旧約聖書の神性、予言の本質、奇蹟の可能や聖書の伝統的な説明法に疑問をもつようになった。かれは聖書の神的性質にたいして信仰をうしない、やがて聖書研究に失望するようになった。³⁰ついでかれがむかったのは、旧約聖書注釈者たちの研究、古いユダヤの宗教哲学者らの研究であった。かれが読みあさったのは、つぎのような哲学者の著述であった。

マイモニデス（本名・モーゼス・ベン・マイモン、一一三五～一二〇四）……

.....スペインのゴールドヴァ生れのユダヤ中世の哲学者。聖書をアリストテレス的世界解釈にむすびつけた。⁽³¹⁾

カスダイ・クレスカス(一三四〇〜一四一〇?) スペイン・ユダヤの哲学者。聖書と古イスラム教、スペイン文化に養われたが、ユダヤ教団のおきてと伝統のなかにとどまった。⁽³²⁾

アブラハム・イブン・エスラ(一〇九二〜一一六七) 紀元前五世紀のユダヤの律法学者。イエルサレムにモーゼの五書を導入した。⁽³³⁾体系的な思想家ではなかったが、聖書の註解にはすぐれたものがあった。かれの神学は、汎神論的であった。

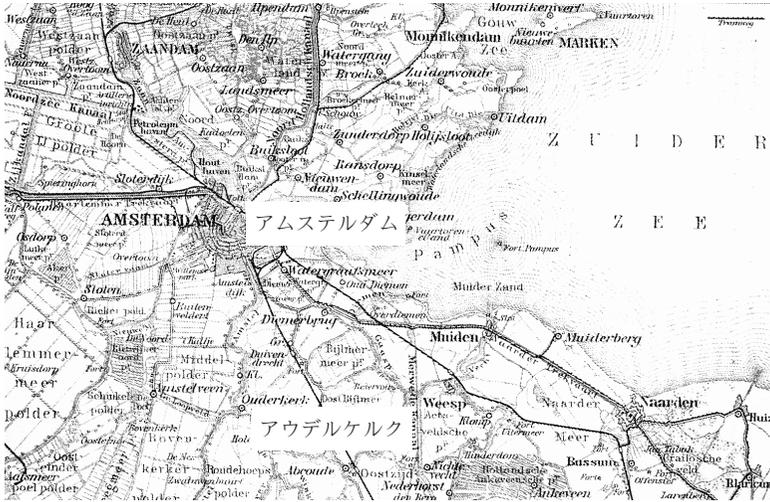
レヴィ・ベン・ゲルソニデス(一一二八〜一三四四) 南仏のパニョルに生まれ、中世の学問に通じていた。モーゼの五書の註解をかいた。

イエフダ・アルファカ(不詳)

これらの学者のうち、スピノザの思想形成にいちばん大きな役割をはたしたのは、マイモニデスとイブン・エスラだった。⁽³⁴⁾スピノザは父のしごとを手伝うかたわら、旧約聖書の注釈者やユダヤ中世の哲学者の著作にしたしんだのであるが、やがて古典と近代の文学に通じるため、学術語であるラテン語をまなぶ必要を感じた。

かれにラテン語の手ほどきをしたのは、氏名は不明だがドイツ人の学生であつたらしい。のちにスピノザはフランドルの自由思想家フランシスクス・ファン・デン・エンデン(一六〇二〜一七四)の「ラテン語学校」Latinsche Schoolに入学した。一六二年エンデンはアントウェルペン(ベルギー北部)ブリュッセルの北四七キロ、アンベルス州の港町)で生まれ、長じてルーヴァン大学で文学・哲学・法学・医学などを修めた。一六四二年に結婚し、六人の子どもの父となった。イエズス会の僧侶、医者、法律家、外交官、書籍商と、いろいろの職業を変えた。一六四五年一家をあげてアムステルダムに移り、書籍商となったが破産し、ラテン語教師に転身した。

かれはもともと自由思想家、^{リベルティアン}無神論者^{アテイスト}であった。⁽³⁵⁾学校の評判はよかったが、生徒にラテン語といっしょに「自由思想」を吹き込んでいると疑われた。⁽³⁶⁾一六五二年スピノザ(二十歳)は、エンデンのラテン語学校に入学し、西ヨーロッパの新科学、自由精神などに接した。エンデンは一六七一年学校を閉じるとパリにおもむき、それでもラテン語学校をひらいたが、長くつづかなかつた。のちにかれはルイ十四世にたいする陰謀に連座



アムステルダムとユダヤ人墓地があるアウデルケルク。

し、死刑に処せられた。
 一六五四年三月、スピノザ（二十二歳）は、父ミカエルをうしない、弟とともにその事業をひきついだ。スピノザは数年前よりユダヤ教の学者の説に異をとなえ、またユダヤの律法学者らとの交際をさけるようになっていた。が、これがやがて大きな受難としてかれの身にふりかかってくる。

一六五六年三月、スピノザ（二十四歳）は、父の事業をつづけることをやめた。スピノザはユダヤの教義に反する異端の意見をのべ（聖書の神性を否定）、あまつさえ儀式のきまり（飲食、安息日、祝日）を守らない、といったうわさがひろまっていた。³⁷かれは無神論者として告発され、同年七月二十七日多くのユダヤ教徒が居ならぶ教会のなかで、本人不在のままユダヤ教団から破門を宣告された。かれが問責されたのは、ユダヤ人から遠ざかったり、教会の礼拝に出席しなかったり、異教のあつまりなどに出席した不敬な行為のほか、神が非物質的存在であることか、靈魂の不死を否定したためである。³⁸

かれはユダヤ人社会の異分子として、寄るべない人間となったが、困苦・貧困・孤独・侮べつにたえられる強靱な精神力をもっていた。スピノザは破門されたのを機に、ヘブライ名の「バルッフ」をラテン名の「ベネディクトゥス」に変えた。

アムステルダムは、もはや安住の地とはならなかったから、かれは新たに他所に住居をみつければならなかった。かれはアムステルダム郊外の外濠——アムステル川沿いに建つとある家の屋根裏部屋に住むことになった。家主とその家内は、いくぶんこの異教徒のことを理解できたらしい。ときどきスピノザは夕方になると、階下においてきて、家主夫婦と単純な話をしたり、いっしょにタバコを吸ったりした。³⁹

新しい住居は、アムステルダムの中心から南に、七、八キロ行ったところにあるアウデルケルク（Ouderkerk）という静かな村にあった。その村にはポルトガル系ユダヤ人の教会と附属の墓地——「ポルトガル＝イスラエル墓地」de Portugesch-israëlitische

Begraafplat があつた。かれの下宿は父母や兄弟姉妹が眠っているこの墓地⁽⁴⁰⁾のちかくにあつた。かれは生活の資をファン・デン・エンデンの学校で子どもを教えたり、メガネのレンズをみがいたりして得た。ヘブライの法典は、学生はだれでも何か手工的技術を修得するよう命じていた⁽⁴¹⁾。スピノザが破門されてから一六六〇年⁽⁴²⁾までの四カ年間についての伝記は、よくわかっていない。いずれにせよ、ユダヤ教会から破門後のスピノザが、ギリシャ・ローマの西洋古典の本を本格的によんだのはこのころのことらしい。かれの蔵書のなかには、左記の作家のものがあつた⁽⁴³⁾。

〔ラテンの古典作家〕

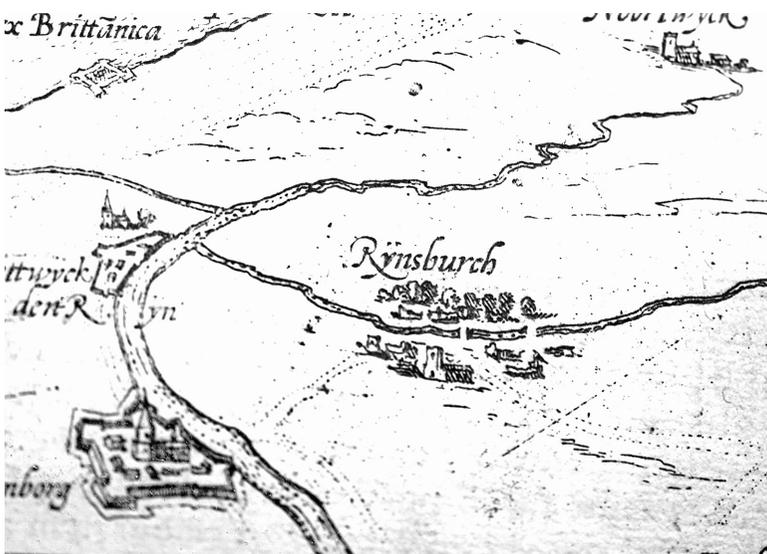
- タキトゥス (五五?・C・一二〇、ローマの歴史家・雄弁家・政治家)
- リヴィウス (五九B・C・A・D・一七、ローマの歴史家)
- ウィルギリウス (七〇?・一九B・C、ローマの詩人)
- ペトロニウス (?・六六、ローマの諷刺作家)
- カエサル (二〇〇?・四四、ローマの将軍・政治家)
- セネカ (四B・C?・六五A・D、ローマのストア派の哲学者・政治家)
- サルステイウス (八六B・C・三四ころ、ローマの歴史家・政治家)
- マルティアリス (四〇?・一〇四ころ、ローマの諷刺詩人)
- プリニウス (二三または二四?・七九、ローマの博物学者)
- キケロ (二〇六?・四三B・C、ローマの政治家・雄弁家・哲学者)

これらの作家の作品を原典によって読むことができたが、ギリシャ語は堪能ではなかったようである。しかし、それでもギリシャの古典作家のものとしては、——ディオファントス、ヨセフス、アリストテレス、ヒポクラテス、エピクテトス、アリアノス、ルキアノス、ホメロス、エウクレデスなどの著作をもっていた⁽⁴⁴⁾。ほかに自然科学のうち、医学・教学の書もあつたようである。

一六六〇年の春——スピノザ(二十八歳)は、ライデン(オランダ西部——ハーグの北東に位置する大学町)の西六キロほどの所にあるレインスブルフ村に移つた。かれがアウデルケルクを離れ、レインスブルフに移動した理由のひとつは、哲学的思索のために必要な静寂や孤独が、とき



レインスブルフ村の図。(R. Univ, Biblioteek, Leyden 蔵)



レインスブルフ村の地図。1674年の銅版画より。[筆者蔵]

どき人々の訪問によってじゃまされたからであった。そこでかれはアムステルダム近傍を立ちのき、静かなコレギアントの村に移ることにした。当時のオランダには、さまざまなキリスト教宗派が存在したが、スピノザが好んでその会合に出席し、そこで知り合った人びとと交きをむすんだ。コレギアント派は、種々の宗派から構成されており、信仰の自由がみとめられていた。自由に聖書を解釈し、研究する信者のあつまりであった。

スピノザはコレギアント派の一人——外科医のヘルマン・ホーマン宅に下宿した。かれの新たな住居は、カトウェイク（オランダ西部——北海沿岸の漁村）に通じる水路と小川の中間——小さな横町（こんにちの「スピノザ通り」*spinozalaan*）にあった。それはオランダの家屋によくみら



ライデン郊外レインスブルフにある「スピノザの家」。[筆者撮影]



「スピノザの家」の居間。
修復したものであり、当時のままではない。

れるレンガの家——切妻造り（屋根の切棟きりむねの下が山形やまがたになっている）のこじんまりとした家だった。家の周辺には牧場がひろがり、やや先に教会（一六一八年に造られた大教会「フロローテ・ケルク」）もみられた。この家は一六六一年に建てられたもので、屋敷内の小屋（物置き）から発見された半壊の礎石には、「一六六一年」と刻んである。

スピノザが住んだ当時は、新築間もない家であったが、時の経過とともに家は荒廃し、約三三〇年後の一八九六年（明治二十九年）売られた。スピノザが数年くらしたこの家屋が破壊をまぬがれ、保存できたのは、スピノザ協会（Societas Spinozana）のおかげである。この協会は一八九七年にスピノザゆかりのこの家を保存する目的で組織され、会員の寄附金によって家を購入し、それを修復してもとの状態にもどした。こ



ウィレム・メイエル博士

「人々に「スピノザの家」(Het Spinozahuis)と呼ばれ、博物館(記念館)となっている。

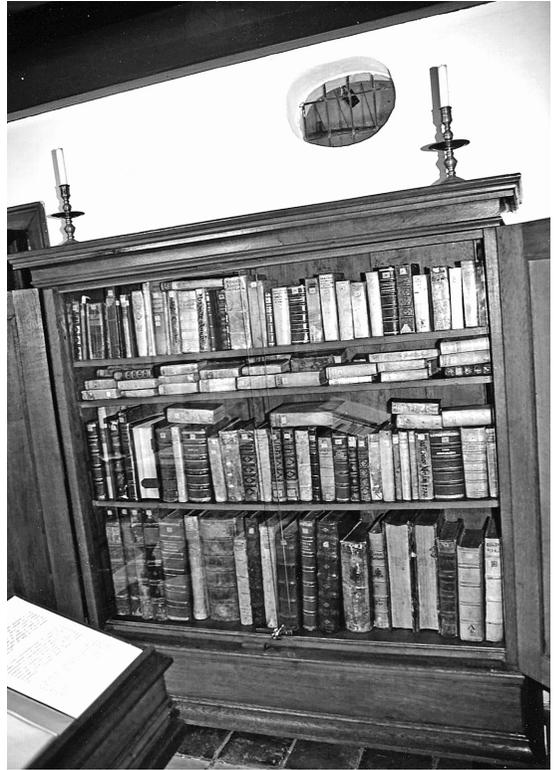
日本人観光客やわが国のスピノザ研究家のなかには、この博物館を訪れたものが数多いかもしれない。筆者は平成二十六年(二〇一四)の春——二度ばかり訪れ、感慨にふけた。わが国の名の知られたスピノザ研究者のひとり小尾範治(一八八五〜一九六四、一高をへて東大哲学科でケーベルに師事、スピノザを研究。小樽高等商業学校教授をへて、文部省の社会教育政策にたずさわる)は、大正十年(一九二二)から倫理学研究のため二カ年間欧米に留学したが、同十一年(一九二二)八月中旬に「スピノザの家」を訪れている。かれはスピノザの故跡を探った体験談を、のちに「スピノザ・ハウスを訪ふ」と題して『思想』(第十六号、大正12・1)に発表した。

かれはスカンディナヴィアからオランダに入国すると、スピノザの生地アムステルダムを訪れ、当時をしのんだが、スピノザの故跡をさぐる時間はなく、また手引してくれる人もみつからなかったので、再遊を期してハーグにおもむいた。ハーグは「スピノザ協会」の本部があるところである。当時、協会の会長をつとめていたのは、ウィレム・メイエル博士(Dr. Willem Meijer, 一八四二〜一九二六)であった。そのころ八十歳台であり、体もだいたいぶおとろえ、ハーグ郊外——北海に面した保養地スヘベニンゲンの方向にあたるところに暮らしていた。話はドイツ語でなされたが、若い学者である協会の幹事でスピノザ研究家のファン・デル・タックと娘さん(四十歳台)がとりついでくれた。

小尾は八月十二日——ハーグから汽車でライデンにむかった。こんにち「スピノザの家」を訪れるには、ライデンの駅前からカトウェイク行の³⁷番のバスにのり、「スピノザ通り」で下車し、あとはしばらく歩けばよいのである。が、当時はライデンからレインスブルフのちかくまで電車が通っていたようである。

「そこから(ライデン)からすぐ電車に乗り換え、畑つぎの田舎を眺めながら、スピノザ・ハウスのある Rijnsburg に通ずる停車場で下りた」

陽気は夏というより、晩春のようであった。小雨が静かにふっていた。あちこちに点々と低い平屋がみえる。田舎の道を何度もたずねているうちに、幅五、六メートルもあるような溝(小川)のはしに出た。そこがレインスブルフ村であった。溝のうえには小舟が浮かんでいた。附近には茶店や農家



スピノザの旧蔵書と同じものをあつめたもの。〔筆者撮影〕

や調度品は、スピノザのころのものではない。この部屋で注意をひかれるのは、書棚におさまっている革装やベラム製（子牛や子羊などの革からつくる）の古書である。

生前、スピノザは一六一冊ほど書物をもっていたというが、著名なスピノザ研究家のJ・フロイデンタール（ポーランド南西部の市——プレスラウ＝現ヴロツクフ大学の哲学教授）は、スピノザの家財目録に記してある同版、同型のを苦勞して蒐集し、それを当時の配列によってならべたものである。家の端——三番目の部屋には、「一六六一年」と刻んだ礎石や十七世紀にレンズをみがくために用いた古い施盤、スピノザが物理の実験に使ったかんたんな機械がある。屋根うら部屋にあるのは、ガラスケースに収まった手紙や書物などである。

また庭には、スピノザの胸像がある。思索や書きものをするとき用いた部屋は、どこかはっきりしない。屋根裏べやが、おそらく仕事部屋兼寝室であつたらうか。小尾は一階の書斎兼居間のような部屋の窓から外をみると、畑がひろがっていた（いまみえるのは新興住宅地）。物音はなにひとつ聞こえない。かれは案内の少女から蔵書の記録、スピノザの家の絵葉書などを求め、名残りをおしみつつ外に出た。小雨にきよめられた並木通りは、緑かがやき、小村は静まりかえっていた。村はずれまで来たとき、野良しごと中の少年が、この東洋人のことをいぶかしげに見てい

のようなものがあつたが、どれもみすぼらしかった。農民はみな木靴をはいていた。みなぼくり／＼と、重たげに歩いていた。

雨はこやみになった。溝にそって二百メートルほど行って右へまがると、「スピノザの家」の前へでた。

こんにちこの家は、火曜日から日曜日まで、午後一時から五時まで開いており、入場料（二ユーロ？）を払えば、だれでも見学できる。平屋造りのこの家は、一階に三部屋あり、せまい急な階段をのぼると、広々とした屋根うら部屋（dakkeretje）に出る。

一階の左側にあるのは管理人の部屋。そのとなりは書斎兼居間である。この部屋に入って左側に暖炉があり、古いすやテーブル、書棚、デカルトやスピノザの肖像などがみられる。しかし、暖炉

た。……

スピノザはライデン近郊のレインスブルフ村に三カ年ほど滞在した。アムステルダムにいたころ、訪問者が多く、研究をまとめるのに支障が多かった。が、ここはそれほど来客が多くなかった。それでもスピノザを敬愛し、その哲学を信奉する人たちがときどき訪ねてきた。訪問者のなかには、生活や出版面でかれを支える後ろだてもいた。パトロンは、つぎのような人々であった。

ヤーリヒ・イエレス……アムステルダムの食料品商であり、かつ熱心なデカルト学徒。スピノザに年金を提供し、生計のうれないようにし、その著作の出版を可能にした。

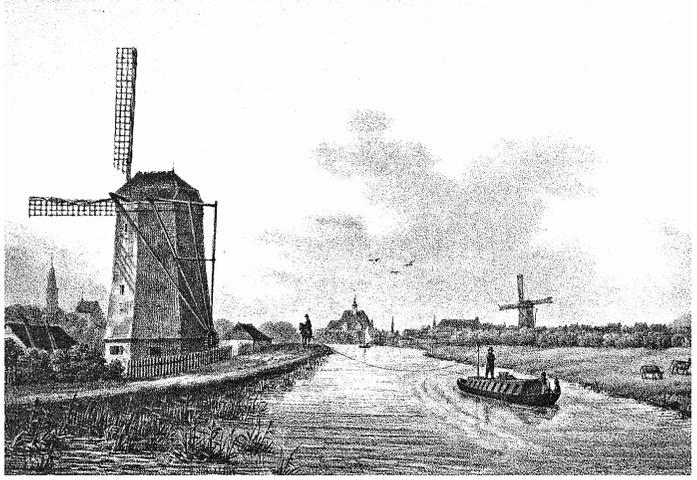
ピーテル・バリング……商人。コレギアント。古典語に通じ、ラテン語で書かれたスピノザの処女作（『デカルト哲学の諸原理。附録 形而上学的思想』一六六三年刊）をオランダ語に訳した。

シモン・ド・フリース……裕福な商人のむすこ。コレギアント。スピノザが去ったアムステルダムで読書会をつくり、スピノザの作品のすべてを読み研究した。亡くなるまえ、スピノザに年金二〇〇フルデン贈ろうとしたが、謝絶された。のちかれの弟より三〇〇フルデンのみもらうことを承知した。⁴⁶

ヤン・リユーウエルツ……アムステルダムの出版者。スピノザの全作品を出版した。当時、オランダで出版された異教ならびに自由思想の書は、リユーウエルツ親子のもとで刊行された。⁴⁷

かくしてスピノザは、コレギアントの村——レインスブルフにおいて、飾り気のない、温和な住民から愛され、品行方正に生きた。一六六一年の夏のはじめ、スピノザはドイツ系イギリス人のハインリヒ・オルデンブルク（一六二〇〜？、イギリス王立科学協会の書記）の訪問をうけ、以後文通をつづけた。またレインスブルフ滞在中、かれの身边におこった特記すべき出来事は、ライデン大学神学科の学生ヨハンネス・カセアリウス（一六四二年アムステルダム生まれ）とおなじ屋根の下でくらしながら、デカルトの哲学を講義してやったことである。

孤独と質素な暮らしのなかで、スピノザの最初の著書が生まれようとしていた。それは『神・人間および人間の幸福に関する短論文』と題する処女作であった。それは哲学の精神に眼をひらいた⁴⁸、わずかの友人らのために、じぶんの哲学体系をまとめた⁴⁹はじめての試みであった。この論文は、はじめラテン語で書かれたものらしい。のちに十七世紀の古オランダ語に訳され、スピノザの死後、十九世紀後半になってオランダ文の写本



ハーグ郊外の図 (19c.) [筆者蔵]

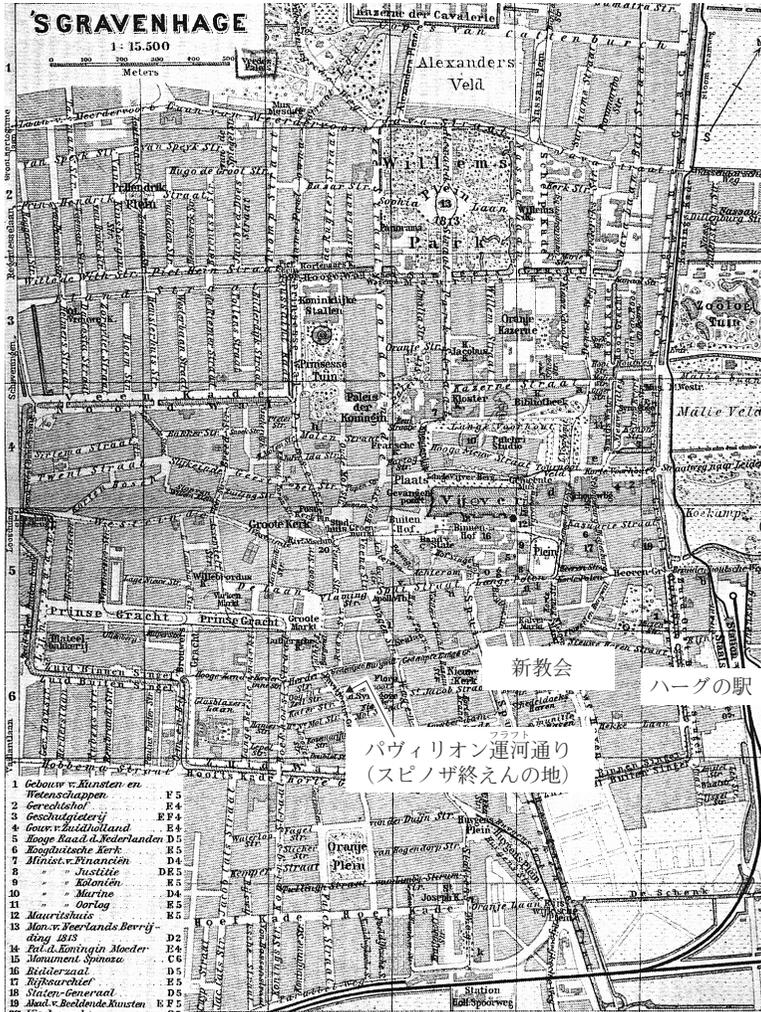
が発見された。これは因縁の書であった。

前者とおなじくレインスブルフ滞在中の述作は、『デカルト哲学の諸原理。附録 形而上学的思想』である。この小冊子はラテン語で書かれ、一六六三年アムステルダムของヤン・リユーウエルツから刊行され、翌年には友人のピーテル・バリングによるオランダ語訳が出版された。この本は一種の哲学入門書であると同時に、デカルトを幾何学の形式で講述したものである。また扉にスピノザの名前 (Benedictum de Spinosas) をのせた唯一の書物であった。⁽⁵⁰⁾

スピノザにとってレインスブルフ村は、かならずしも研究生生活にとって理想郷ではなかった。哲学の思索にとって必要な静寂が、かれの名が知られるについて、友人たちの訪問によって破られたからである。そこでスピノザはレインスブルフ滞在にみきりをつけて、一六六三年の春(三十一歳)——ハーグ近郊の小さな村フォルブルフに移った。新たな転居先は、コレギアント派の支持者で画家のダニエル・ティデマン宅(ケルク街)⁽⁵¹⁾であった。こんどの村は、冬の天候がわるいとき、外出にも支障があるところで、何かと不便なところであった。しかし、ハーグはなんといってもオランダの政治の中心であり、じぶんの著作を出版すると

き便宜をはかってくれそうな有力者がいそうであった。スピノザは、アムステルダムにいる友人たちのつてによって、ハーグの政界の有力者たちとも面識があった。⁽⁵²⁾ そのうちの一人に、ヤン・デ・ウィット(一六二五〜七二、ホラント州の國務長官、一六七二年にフランス軍がオランダに侵入後失脚し、のち反対派の民衆によって殺された)がいた。

ともあれ、スピノザは一六七〇年までフォルブルフ村に滞在した。一六六五年(三十四歳)、スピノザはフォルブルフにおける大部分の時間を主著『エティカ(倫理学、一六七七年遺稿集に入る)』と『神学・政治論』(政治哲学書、一六七〇年刊)を書くことに費やされた。が、やがてかれは前者の『エティカ』の執筆を中断して、後者の『神学・政治論』を書くことに専念した。しごとを中断してまで後者の完成をいそいだのは、理由があつたことだった。当時オランダの思想界は混とん状態に陥っており、新旧思想がぶつかりあい、国家と教会と宗派がそれぞれその

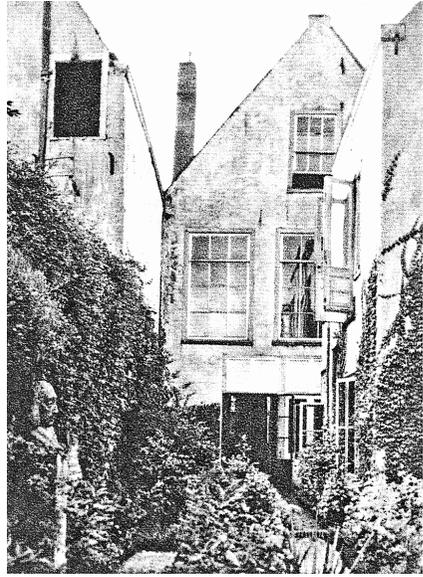


ハーグの地図

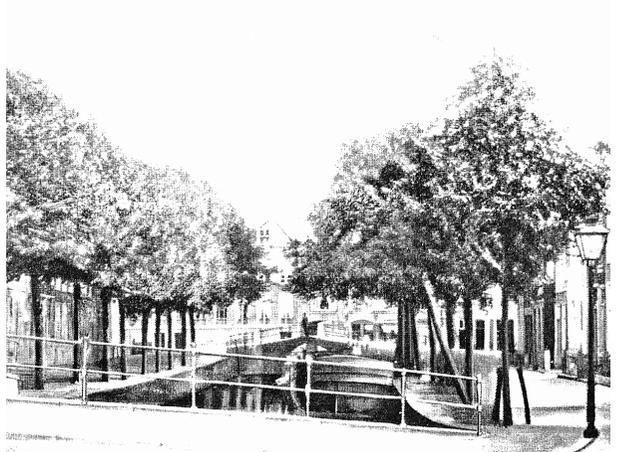
権力を主張しあらそっていた。スピノザはそのような混乱状態のなかで、みずからの態度をあきらかにするために、またひとつにはじぶんにたいする無神論者の非難をのぞくために執筆した。⁽⁵⁴⁾

このころスピノザの健康状態はすぐれなかった。かれの母は死病をのこして逝った。熱が出たり、汗がにじみでた。レンズをみがぐため、かれの部屋で飛びちるガラスの粉末もかれの肺をそこねたようだ。

一六七〇年(三十八歳)、『神学・政治論』を匿名で出版後、スピノザはハーグに移住した。移動の正確な日はあきらかでないが、一六六九年から一六七〇年にかけての冬ではないかという。⁽⁵⁵⁾こんどの住居は、田舎の家というよりハーグの町中にある家であった。かれは当時、芸術家や学者



ハーグの「スピノザの家」の裏庭。
Rudolf Kayser の *Spinoza* (1932) より。



パヴィリオン運河通りの写真。いまは運河なく、道路になっている。
A. Wolf の *The Oldest Biography of Spinoza* (1927) より。

がすくなくらず住んでいた、いちばん静かな市域に住んだ。こんんどかれの住居となった所は、いまあるハーグ駅から東に一キロほど行った閑静なところである。

はじめはフェーアカーデ街三十二番地のファン・ヴェーレン未亡人宅の後方の二階に下宿した。この家はほぼ当時のままであり、こんにちに至っている。⁽⁵⁶⁾そこはまかない付の下宿であり、ときには著述に没頭するあまり、家人と会わず、何日も食事をこぼせた。⁽⁵⁷⁾しかし、その下宿は費用がかかりすぎたので、一六七一年の春(三十九歳)——フェーアカーデ街とパヴィリオン運河^{フラフト}通りとが交差する所——女子養老院(「聖霊院」)の筋むかいにある家——装飾画家ヘンドリック・ファン・デル・スペイクの屋根裏部屋を、年八〇フルデンで借りることにした。⁽⁵⁸⁾この家は有名な風景画家ヤン・ファン・ホイエン(一五九六〜一六五六)の持物であったが、かれの孫の代にファン・デル・スペイク一家に売り渡した。この家は一九二六年(大正十五年)「スピノザ協会」の本部として買いとられ、こんにちに至っている。

一八七七年(明治十年)二月二十一日——ハーグにおいてスピノザ没後約二五〇年の記念講演会が、会員エルネスト・ルナンによっておこなわ



正面の建物——スピノザ終えんの地。[筆者撮影]



フラット
パヴィリオン運河通りにあるスピノザの銅像。

れたし、一九二七年（昭和二年）と一九三二年（昭和七年）には、スピノザ記念のための哲学会議がひらかれた。⁵⁹
一六七三年（四十一歳）、二月ハイデルベルク大学から教授就任の話があったが、考えたすえ三月に辞退した。翌一六七四年、かれの『神学・政治論』が禁書となった。

一六七五年（四十歳）、『エティカ』は完成したが、出版を断念。のち小論文（「ヘブライ語の文法」「国家論」など）の執筆に従事した。翌年、パリからドイツにもどる途中のライプニッツ（一六四六〜一七一六、ドイツの哲学者・数学者）は、ハーグのスピノザを訪れた。ともあれヘンドリック・ファン・デル・スベイク方がスピノザの終えんの地となるのだが、かれの暮しぶりについてふれておこう。

かれの主なる生活の糧は、友人たちからの合力（年金五〇〇フルデン）とレンズミがきから上る収入だけであった。かれはぜいたくをせず、簡素にくらした。食事はバターかレーズン入りのかゆなどを口にし、ときどき少量のブドウ酒やビールをのんだ⁽⁶⁰⁾。たのしみとしてタバコをたしなんだ。質素な食事は、大きな支出ではなかった。年金五〇〇フルデンは、アムステルダム⁽⁶¹⁾の律法学院の恩師モルテイラよりも一〇〇フルデン少なく、ライデン大学のゲーリンクスという教授の年俸とおなじであった。

しかし、その質素なくらしのわりには貯えがなかった。なぜか。なぜなら収入があったにもかかわらず、高価な書物を惜しみなく買ったからである。希書（古刊本、古写本、限定本、珍本）をあさるようになる、金はいくらあっても足りないが、かれは生活に必要な以外の金——残った金をすべて本代に使ったようである。

スピノザがもっていた書物は、つぎのようなものであった。とくに豊富なのは、古いユダヤの学問についての本であった。

ヨハネス・ブクストルフ (Johannes Buxtorf, 一五六四……同人の著としては、*Lexicon Hebraicum et Chaldaicum* (一六〇七刊) や *Biblia Hebraica* (一六二九、ドイツのヘブライ学者)

Rabbinica (四巻、一六一八〜一九年刊) などがあるが、スピノザがもっていたのは、後者のユダヤの律法学者に関する本か。

アブラハム・イブン・エズラ (Abraham ibn Ezra, 紀元……モーゼの五書の注釈書?)

前五世紀のユダヤ律法学者

レヴィン・ベン・ガーンソン (Levi ben Gerson, 一二八……聖書やタルムード *Talmud* (ユダヤの律法・習俗・説話・教訓などを記したもの) の注釈書。八?〜一三四四?、フランスのユダヤ人数学者、宗教哲学者)

マイモニデス (本名・モーゼン・ベン・マイモン、……エジプトのカイロに移住し、サルタンの侍医となる。倫理、数学、医学、法律、神学など *Maimonides, Moseh ben Maimon*, 一二三五〜一二〇四) を著わした。ヘブライ語の著述としては *Mishneh Torah* (『第二の律法』) があるが、スペインのゴールドバ生れのユダヤの哲学者) ノザがもっていた書名は、マイモニデスの主著『迷える者の導き』という。

その他、かつての師マナッセ・ベン・イスラエルの『イスラエルの希望』 (*Esperança de Israel*)、ユダヤの祭式の書 *Passak-Hagah*, スペイン

の詩集、天文・解剖・物理学・光学・レンズみがきの本などのほか、デカルト、アリストテレス、ベーコンなどの書が、松の木製の小さな書棚のなかに入っていた。⁽⁶²⁾

スピノザの身なりは質素であり、みすばらしいものであったが、外出するときはずっとした衣服に変えた。幅広の帽子をかぶり、モヘアのマントを着て出かけた。⁽⁶³⁾ かれの風貌はどうか。黒い髪はちぢれており、皮膚はあざぐるく、まゆ毛や眼は黒かった。その容姿からいかにもポルトガル系ユダヤ人の印象をあたえたようである。

しかし、このころのかれは消耗性肺病を病んでいて、顔は青白く、ひじょうにやせ細っていた。⁽⁶⁴⁾ かれはあまりじぶんの病気について語るのを好まなかった。死を恐れることはなかったが、やりかけのしごとを中途にして死にたくはなかった。かれはししとして研究にはげみ、執筆は夜の十時から朝の三時ごろまでつづいた。気晴らしといえば、階下に降りて行って、家主やその子どもたちとすこしばかり話をするくらいであった。

家主のヘンドリック・ファン・デル・スベイク家には、子どもが四人とお手伝いが一人いた。⁽⁶⁵⁾ 死の前日——二月二十二日（土曜日）——夕方、かれは階下においてきて、家主の家族らとよもやま話をし、スベイクが教会で聞いてきたルーテル派の牧師の説教について聞いたりした。翌日は日曜日である。スピノザは、家主夫婦が出かけるまえに朝早く階下において、かれらと話をした。そうこうするうちに、アムステルダムから来てもらっていた医師ゲオルグ・ヘルマン・シュラー（一六五一—？、ライデン大学で医学を学び、アムステルダムで開業）⁽⁶⁶⁾ は、女中にひねた鶏を一羽買いとめ、それを料理し、昼になったらスピノザに食べさせるようにいった。家主の家族らが帰宅したとき、かれは鶏料理をうまそうに食べていた。

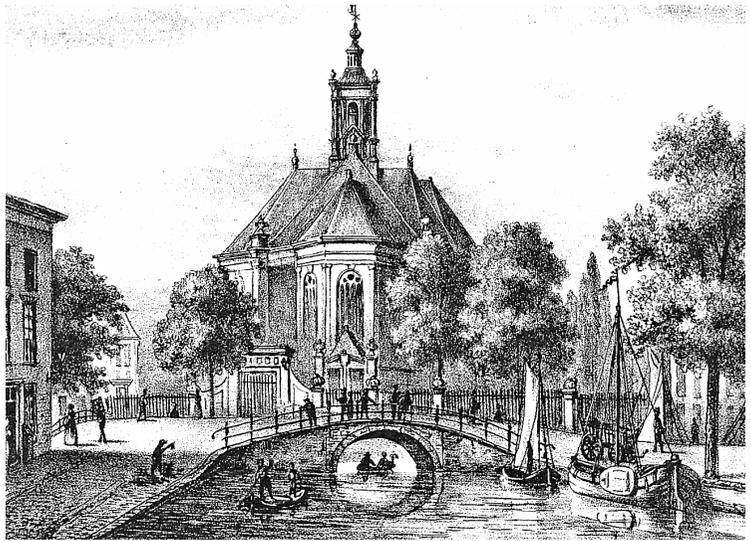
午後、家主らは教会に出かけた。医師のシュラーだけがスピノザのそばに残った。ところがかれらが教会から帰ると、スピノザが午後三時ごろ死んだことを知らされた。この医者、机のうえにあった若干の小銭の何枚かをポケットに入れると、夜の船でアムステルダムに帰って行った。

スピノザは、一六七七年二月二十一日——家主の屋根裏部屋で波瀾に富んだ四十四年の生涯をとじた。

葬儀のことは、生前依頼されていた家主のスベイクが世話をした。その費用は、アムステルダムの友人シモン・ド・フリースの弟が負担した。⁽⁶⁸⁾ 埋葬式は四日後——二月二十五日にとりおこなわれた。葬儀には六台の馬車がつらなり、かれの遺骸はスポイ街の新教会の説教壇の右手の床——⁽⁶⁹⁾ 国務長官ヤン・デ・ウィットの墓から遠くない所——に葬られた。のちにそこに⁽⁷⁰⁾ B¹⁶²の印が刻まれた。⁽⁶⁹⁾ 教会の内陣は仮墓地になっていて、十二年たつと遺骨を掘りおこし、他所に埋めることになっていた。

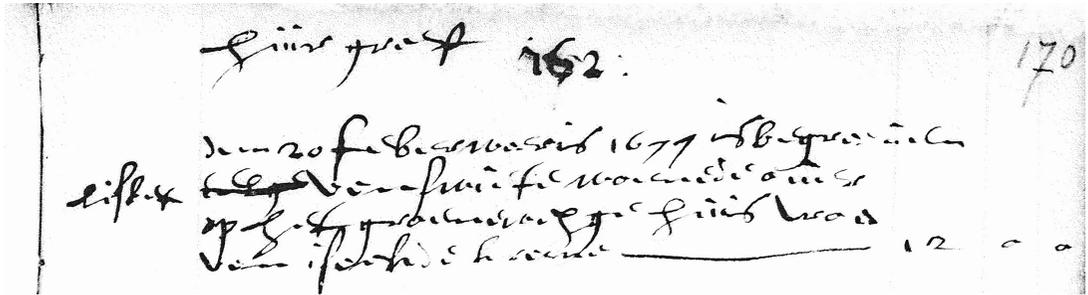


スピノザの居室（ハーグの「スピノザの家」）。
Rudolf Kayser の *Spinoza* (1932) より。



スピノザが埋葬されたハーグの「新教会」の図 (19c)。[筆者蔵]

筆者はオランダ滞在中、ハーグの文書館において、職員の協力をえて、スピノザの埋葬記録のマイクロフィルムを見ることができた。それは Grafboek 1656〜1720（墓所簿一六五六年〜一七二〇）にあるもので、つぎのようなことが記されている。文書係によると、原文（十七世紀のオランダ文）は、判読できないという。しかし、原簿を検索するときに必要な *Inventaris* ⁽¹¹⁾（目録）のオランダ文から判ずると、おそらくつぎのよ
うな文章が記されていたと思われる。



Nieuwe Kerk (新教会) におけるスピノザの埋葬記録。(Den Haag City Archives蔵)

Spinoza benedictus 1677 ... begraven in de Nieuwe kerk huurgraf 162, wonende over de Heilige Geesthuis...
betaald — 12⁰⁰

賃貸墓地 一六二号

スピノザ・ベネディクトゥスは、一六七七年新教会の一六二に埋葬。聖霊院の筋むかいに居住。一二ギルダ
ー支払う。

新教会（一六四九年の創建？）は、上流社会の教会であった。かれが亡くなったスベイク方から北のほうに
数百メートルほど行った所にある。没後二五〇年の記念祭⁽⁷²⁾がおこなわれた一九二七年（昭和三年）二月二十一
日——新教会うらのスピノザの墓所に、一基の墓標が置かれた。それにはラテン語で——

TERRA HIC
BENEDICTI DE SPINOZA
IN ECCLESIA NOVA OLM SEPULTI
OSSA TEGIT

（新教会のこの地は、かってベネディクトゥス・デ・スピノザの遺骨をおおひかくした所である）

とある。が、ここにはスピノザの骨が埋められていなく、^{からほか}空墓であるらしい。

スピノザの没後、ファン・デル・スベイクはかれの遺品などを整理し、未払いのものがなにか調べた。スベ
イクの意をうけて、公証人がスピノザの財産目録をつくった。スピノザのかたみは、つぎのようなものであ



「新教会」の裏手にあるスピノザの墓所。[筆者撮影]

た。(73)

- | | | |
|------------|---------------------------|--------|
| ベッドとカバー | 椅子 | ズボン |
| マント(トルコ羊毛) | ベッド用シート四枚 | シャツ七枚 |
| カラー十九本 | ハンカチ五枚 | 赤いカーテン |
| ざぶとん | 毛布 | 帽子二つ |
| くつ二足 | 下着類 | 旅行カバン |
| チェスの道具 | カーテン | レンズ数枚 |
| 銀製のとめ金二つ | 銅版画 | |
| 研磨道具 | 銀の印形 <small>いんぎょう</small> | |
| 蔵書一六一冊 | | |

現金はほとんどなかった。友人からの年金は、ほとんど高価な書物を求めるために使われていた。遺品のうち、マント・ズボン・ベッドのシート・シャツ・ベッド・椅子・ハンカチ・銀製のとめ金などは、売って金にかえられた。全遺品の売却総額は、約四三〇ギルダであった。スピノザは、あちこちに借金をしていた。家主のファン・デル・スベイクには、部屋代・食事代が未払いとなっており、葬儀代まで払ってもらった。ほかにも借りがあった。

薬屋ヨハン・シュレーデル……薬代一六ギルダ

床屋アブラハム・ケルフェル……三ヵ月分のひげそり代金一ギルダ一八ストイフェル⁽⁷⁴⁾

のちにかれの家具や蔵書なども競売にかけられ、そのあがりには債務の返済にあてられた。原稿は売却されず、遺稿集のかたちで世に出すことにした。

注

- (1) 『世界文芸大辞典 第四卷』(中央公論社、昭和11・12)、二六八頁。
- (2) 『世界歴史辞典 第十一卷』(平凡社、昭和27・8)、七頁。
- (3) 『コンサイス地名辞典——外国編』(三省堂、昭和52・7)、一七二頁。
- (4) Nouvelle Géographie Universelle, IV, L'Europe du Nord-Ouest, Librairie Hachette et C^{ie}, Paris, 1870, p. 172
- (5) 箕作元八著『西洋史講話』(開成館 大正2・6)、四五四頁。
- (6) 注(4) La Nèderlande, p. 117
- (7) 注(5)の四八〇頁。
- (8) 注(5)の四八一頁。
- (9) 注(5)の四八三頁。
- (10) ゲブハルト著
豊川登誠訳『スピノザ概説』(創元社、昭和23・10)、一三頁。この訳書の原本は Carl Gebhardt: *Spinoza*, Verlag von Philipp Reclam, Leipzig, 1932 である。
- (11) Frederik Pollock: *Spinoza, his life and philosophy*, C. Kegan Paul & Co, London, 1880, p. 3
- (12) 注(10)の二七頁。
- (13) 同右。
- (14) 注(11)におなじ。
- (15) 注(10)の三〇頁。
- (16) R. Willis, M. D.: *Benedict de Spinoza, his life, correspondence, and Ethics*, Tibner & Co, London, 1870, p. 19
- (17) ステイブリン・ナドラー著
有木宏二訳『スピノザ ある哲学者の人生』(人文書館、平成24・3)、六七頁。
- (18) 注(15)におなじ。
- (19) 工藤喜作著『スピノザ』(清水書院、昭和55・10)、四四頁。
- (20) 稲富栄次郎著『スピノザの哲学』(理想社出版部、昭和14・11)、一三四頁。Rudolf Kayser: *Spinoza, Portrait of a Spiritual Hero*, Philosophical Library, New York, 1946, p. 47

- (21) Steven Nadler: *Spinoza. A Life*. Cambridge University Press, 1999, p. 63 ㉞た W. G. Van der Tak: *Bento de Spinoza, Zijn leven en gedach ten over de wereld, den mensch en den staat*, Martinus Nijhoff, 's-Gravenhage, 1928, p. 12 こも授業時間についての記述がみられ㉞。
- (22) 小尾範治訳『スピノザ哲学体系(エチカ)』(岩波書店、大正7・4)、『七頁。』
- (23) Dr. Antoon Vloemans: *Spinoza, de mensch het leven en het werk*, N. V. H. P. Leopold's Uitgevers-maatschappij, 's-Gravenhage, 1931, p. 45
- (24) 注(11)の一一頁。
- (25) 注(22)の八頁。
- (26) 同右。
- (27) 注(20)の二三五頁。
- (28) 注(16)の二二頁。
- (29) 注(19)の四六〜四七頁。
- (30) 注(20)の一九〜二〇頁。
- (31) 注(10)の三三頁。
- (32) 注(10)の一八九頁。
- (33) 注(10)の一八八頁。
- (34) 注(11)の一一頁。
- (35) 注(23)の八一頁。
- (36) 注(11)の一一頁。
- (37) 注(20)の二四二頁。
- (38) 工藤喜作著『スピノザ』(講談社、昭和54・10)、一一二頁。
- (39) ウィル・デュラント『哲学夜話』(第一書房、昭和15・5)、一一一頁。
陶山務訳
- (40) これはオランダでも最古のユダヤ人墓地である。一六一四年にアムステルダムユダヤ人社会が埋葬用に購入したものである。はじめユダヤ人は遺体をアルクマール(アムステルダムの北北西にある町)に近いGroet(不詳)の砂丘に埋めていたが、アウデルケルクに墓地を手に入れた。当時、アムステルダムから死体をはしけにのせ、アムステル川をさかのぼって当地まで運んだ。ここにはスピノザの家族の墓とかれの師ベン・イスラエルの墓もあ㉞。

母は一六三八年十一月五日に亡くなり、その碑文はつぎのようなものである。

S^r DHANA DEBORA D'ESPINOZA MULHER
D MIKAEL D'ESPINOZA QUE A LEYOU
EL DIO P^oSY EN 28 D HESVAN
5399 A^{os}

父は一六五四年三月二十八日に亡くなり、その碑文はつぎのようなものである。

S^r DO BEMAVENTURADO MICHAEL D ESPINOZA QUE F^o EM 10 D NISAN A^o 5414

注・A. M. VAZ DIAS 及び W. G. VAN DER TAK による共編および刊行——*Spinoza Mercator & Autodidactus*, Martinus Nijhoff, s-Gravenhage, 1932 465°。

- (41) 注(11)の二二頁。
- (42) 下村寅太郎編『世界の名著 スピノザ ライプニッツ』(中央公論社、昭和44・8)、五一七頁。
- (43) 注(10)の五九頁。ゲブハルトが参考にした資料は、J. Freudenthal が編んだ *Die Lebensgeschichte Spinoza's in quellenchriften, urkunden und michtamlichen nachrichten...* Verlag von veit & comp. Leipzig, 1899, p. 160~p. 164 である。
- (44) 注(38)の一一三頁。
- (45) 注(43)の J. Freudenthal の *Die Lebensgeschichte*……の一六〇~一六四頁を参照。
- (46) 注(23)の二九六頁。
- (47) 注(42)の二六~二七頁。注(10)の六七頁にも、おなじ記述がある。
- (48) 注(20)の二五二~二五三頁。
- (49) スピノザ
島中高志訳 『神・人間及び人間の幸福に関する短論文』(岩波書店、昭和30・1)、九頁。
- (50) 注(10)七八頁。
- (51) 注(20)二五八頁。なお、Karl Baedeker の *Belgium and Holland* (1910)の三四〇頁にも、この転居先のことが出ている。

- (52) 注(19)の七二頁。
- (53) 注(20)二六四頁。
- (54) 注(19)の一四〇頁。
- (55) Wiep van Bunge: *Filosof van vrede. De Haagse Spinoza*, Uitgave gemeente Den Haag, Albani Drukkers, Den Haag, 2008, p. 24
- (56) Karl Baedeker, 三三四頁。
- (57) ルカス、コレルス 『スピノザの生涯』(弘文堂、昭和24・6)、四九頁。
山本一郎訳編
- (58) 注(10)の九三頁。
- (59) 右におなじ。
- (60) 注(20)の二六八頁。
- (61) 注(38)の一五七頁。
- (62) 注(20)におなじ。
- (63) 注(19)の七八頁。
- (64) 注(57)の五八頁。
- (65) M. F. A. G. Campbell: *Het sterfuis van Spinoza*, De Nederlandsche Spectator (26 Juni 1880)
- (66) 注(23)の五二五頁。
- (67) 注(57)の五九頁。
- (68) 注(38)の一六三頁。
- (69) Karl Baedeker の三三四頁。
- (70) 注(10)の一〇九頁。
- (71) BNR. 377, 321 en 323, Inventaris doop-trouwen begrafregisters 279 Grafboek, 1656-1780, I deel.
- (72) 注(23)の五八〇頁。
- (73) 注(19)の九四頁および注(57)の六二頁を参照。
- (74) Steven Nadler: *Spinoza, A Life*, Cambridge University Press, 1999, p.350

追記——この小伝を書くにあたって内外の諸書を参考にした。スピノザの伝記として古いところでは、ルカス、コレルス、コルトルト、ペールなどのものがあるが、誤りもあるためここに注意をもって用いねばならぬものであろう。これらの伝記から生れたのはフロイデンタール、フローテン、ボルコウスキー、ゲプハルトなどの伝記的研究である。日本の研究者のなかには、スピノザの生涯をかくとき、祖述と創見の区別がつかず、先達の文章を丸のみし、あたかもじぶんの説のごとく発表し、平然としている者もいる。かれらはじぶんの博学をてらうかのように、参考文献すらしめぎぬのである。かつてわが国のスピノザ研究者によって比較的多く用いられた伝記的資料は、おそらくつぎのようなものであろう。

Kuno Fischer: *Spinozas Leben, Werke und Lehre*, Carl Winter Universitätsverlag, Heiderberg, Freudenthal (J.) & Gebhardt (C.): *Spinozas Leben und Lehre*. Erster Teil: Das Leben Spinoza's von J. Freudenthal. 2 Auflage Herausgegeben von Carl Gebhardt. Zweiter Teil: *die Lehre Spinozas auf Grund des Nachlasse* von J. Freudenthal. Bearbeitet von Carl Gebhardt. Heidelberg: C. Winter, 1927. 2 Bde in 1. 350, 270 pp. 1ar. 8vo.

Carl Gebhardt: *Spinoza*, Verlag von Philipp Reclam, Leipzig, 1932

Rudolf Kayser: *Spinoza, Bildnis eines geistigen Helden*, Phaidon-Verlag, Wien, Leipzig, 1932

注・同書の英訳 *Spinoza*, Portrait of a Spiritual Hero は一九四六年にニューヨークの The Philosophical Library から刊行された。

筆者のこの小伝の記述の多くは、ルカス、コレルス、F・ポロック、R・ウィリス、ゲプハルト、ウィル・デュラント、稲富、小尾、下村、工藤などの研究に依拠し、また適宜 A・ウルフ編 *The Oldest Biography of Spinoza* (1927), W・G・ファン・デル・タックの *Bento de Spinoza* (1998), A・M・ヴァス・ディアスと W・G・ファン・デル・タックとの共編になる *Spinoza, Mercator & Autodidactus* (1932), A・フロエムスの *Spinoza, de mensch het leven en het werk* (1931), ステイブリン・ナドラーの *Spinoza, A Life* (1999), ウィープ・ファン・ブレンの *Filosof van vrede* (2008) などを利用した。

一 解題 日本におけるスピノザ文献

わが国のスピノザ研究家のひとり小尾範治（一八八五〜一九六四、小樽高等商業学校教授）が、いまから九十年以上もまえの大正十一年（一九

二二)の盛夏——オランダにおいてスピノザの故跡をさぐったとき、一日ハーグの「スピノザ協会」の会長ウィレム・メイエル博士(当時八十歳台)宅を訪問した。その折数年前に『エティカ』を日本語に訳したと語ると、

——それほどスピノザの哲学は、日本人の興味をひくのか。いったいいつからかれの哲学は、日本に知られているのか。日本にはこれに関してどんな研究があるのか。

と、この老先生は、矢継ばやに質問した。

小尾はそれに対して、日本人の思想は、その固有性に加えて、仏教の影響によって、汎神論的(万物は神の現われである。万物に神が宿っている。万物は神そのものである、といった説)である。だからわたしの考えでは、手探り的な思想に養はれてきたヨーロッパ人よりも、日本人のほうがスピノザの哲学に接近することが容易である、と答えた。

会話はドイツ語でなされ、協会の若い幹事W・G・ファン・タックや中年の娘さんが通訳した。

——スピノザの名は、ずっと以前から日本の思想界に知られているが、遺憾ながらまだ目ぼしい研究が発表されていません。ただわずかに波多野博士の『スピノザ研究』という、かれの汎神論に関する論理的分析的研究があるだけです。

というと、メイエル博士はつぎのようにいった。

——スピノザの汎神論がその成立のはじめから、ヨーロッパの思想界では大きな反感や憎悪を招いて、その本質はよくわかってもらえなかった。日本はその点において少なからず趣をことにしているのであろう。わたしがスピノザに惹かれるのは、その汎神論のせいである。

訪問者は、こんにち日本では西洋哲学がかなり広く研究されている、と語ったけれど、いったいわが国において哲学がどれほど生長しているかについて考えたとき、いい知れぬさみしさを感じたという。

筆者はこの文にふれたとき、異端の哲学者スピノザについて少なからず興味をかき立てられた。筆者のスピノザ研究は、まず邦人がかいた古文獻をあつめ、それをよむことから始まり、ついで欧文の伝記や研究書をすこしずつあつめ、それらに目を通すようになった。

もっとも筆者は、スピノザの特定のテーマについて、何かを書くこととするとき、西洋の研究者が書いたものを手引としながら、深奥な哲理を究めたいといった気はなかった。筆者の関心は、日本におけるスピノザの受容史——文献史にあり、それがまだない現状にかんがみて、その前駆をつとめたいとおもったにすぎない。したがって以下の叙述は、資料的にも不完全なものであるが、筆者の志の発現でもある。

いったいスピノザは、いつごろいかなる径路をへて日本に伝わったのか、はっきりしたことはわかっていない。そしてスピノザの輸入元はだれであり、いつごろかれの名が知られるようになったのかも明らかでない。これらの点に関する研究は、これまであまり人の注意を引かなかったようである。

幕末から明治初期にかけて、数多の啓蒙学者が生まれたが、中でも特異なる着眼と広範囲におよび知識の伝達によって、無知のひとびとを啓発したひとり、西 周（一八二九〜一八九八、明治初期の啓蒙的官僚学者）であった。

わが国において、スピノザの人と思想について、断片的にせよ、はじめて言及したのは西 周であったように思われる。西は幕末から明治初年にかけて、京都時代につづいて東京においても私塾をひらき、啓蒙活動をおこなった。明治三年十一月（一八七〇〜七一・一二）ごろ、——西は私邸にほどこかい浅草鳥越三筋町の借家（長屋）において、「育英舎」を設け、英語・数学・国漢のほか特別講義（「百学連還」別名「學術提綱」）をおこなった。この私塾は長つづきせず、明治六年（一八七三）ごろ、塾生がへったのを機に解消した。

「百学連還」は、総論（諸學術の系統をくわしく論じたもの）と本論から成っている。その「百学連還 第二篇」中に、哲学の歴史にふれた箇所があるが、そこにスピノザが登場するのである。それは短い記事であるが、西はつぎのように講じた。

次に蘭人の Spinoza⁺¹⁶³²⁻¹⁶⁷⁷ にて、デカルトの眞の弟子にあらずといへとも、その道を通じて学ひしものなり。元來は猶太の人なりしか、猶太宗の教を奉ずることを嫌ひ、和蘭に赴きけるか、猶太にては己ノか人民の外国に住居せるを深く恥なりと思ひ、頻りに呼ひ返すと雖も帰らず、その後甚た貧しくなりたるに乗じて、猶太より再び使を遣りて金は若干にても遣すへきに依て、住居のことは兎も角も表向は猶太宗の人なりと相唱へるよふ言ひ遣ハしけると雖も、更に肯することなく益々と哲学を治め、僅かに望遠鏡の如きものを造りて生活の科に供しけるといふ。

此人の著はす所は 神理上政学略説 (Tractatus theologico-politicus etc. 一六七〇年にハンブルクの Henricum kunrath より刊行)、政学略説、名教説、養智論、等の書あり。此時代より欧羅巴中四方に豪傑（才知のすぐれた人）起るに及へり。

注・この文章は、西の弟子・永見裕（一八三九〜一九〇二、元福井藩士）の筆録本（永見本『百学連還』——『西 周全集 第一巻』

所収、日本評論社、昭和20・2）より引用。またルビおよび注（ ）は、引用者による。



西 周



中央の建物、ライデンにおける西の二度目の下宿。[筆者撮影]

西は塾生にスピノザについて語るとき、いかなる文献を用いたものか明らかでない。おそらく、永見の履歴にいう「エンサイコロヘシア」（育英舎にあったと考えられる英米の百科辞典のたぐい）か、*Encyclopaedia of Political Science*、あるいは *George Henry Lewes* が著わした『列伝哲学史』（*A Biographical History of Philosophy*、——西は一八五七年版をもっていた）か、*Albert Schweigler* が著わした『哲学史』の英訳『簡約哲学史』（*A History of Philosophy in Epitome*, D. Appleton and Co., New York, 1856）などを参考にしたものであろう。

西にはほかに西洋哲学の講義案をつくったときのメモ（「草稿」（百学連選覚書）——「西 周全集 第一卷」所収、日本評論社、昭和20・2）

西には明治四年（一八七二）ごろに稿をおこし、同六年（一八七三）六月ごろ脱稿したと考えられる「生性発蘊 第一巻」と題する稿本があり、その「第一篇 源二浜リ宗ヲ開ク」（本源を知る意）に、スピノザのことが出てくる。

ルネ・デカルト（一五九六～一六五〇、フランスの哲学者）は、新しい科学的な世界認識方法を考えたし、それには知識と理性によるべきとした判断の方法として、万象を「うたがえ」といったことはよく知られている。西によるとかれの「性理ノ学」（心理学）は、精緻をきわめているという。万物をうたがうのはじぶんの意識や自覚である。西はいう――

蘭人士比瑠薩（十紀後一六三二―一六七七、猶太種俺特坦ノ人）此説ヲ演繹シテ（説明して）、性中固有（性中自然ニ理想ノ備ハルト云フ説、程子ていし）（北宋の大学者・程顥や程頤の兄弟をいう）の性（本質）ハ理也ノ説 是ニ近シノ觀念ト云フコトヨリ説ヲ立テタリ。

注・麻生義輝編『西 周哲学著作集』（岩波書店、昭8・10）、二四頁。

明治十六年（一八八三）五月のことか、西村茂樹（一八二八～一九〇二、明治期の啓蒙的官僚学者）は、「心学畧伝 上」（『東京学士会院雑誌 第五編』所収、明治16・4）のなかで、「心ノ学」（形而上学、心理学の意）にふれたのち、ヨーロッパにおける哲学の沿革に言及しているが、そこにスピノザの名がみられる。

論者・西村によると、ヨーロッパの哲学はギリシャに起り、ローマに伝わり、西ローマの滅亡とともに消滅したという。その後文学が晦じゅうの時代となったが、一五〇〇年ごろより文学が再興し、こんにちに至っている。ギリシャの哲学に関してはじめに記すべきは、ターレスである。その後、ソクラテス、プラトン、アリストテレスなどの賢人が輩出した。ローマにはセネカやキケロなどの大家がいる。文学が新紀元をむかえてからは、

培根、徳加爾多、士畢諾撒……（後略）

などの諸名家がある。かれらが人心を論じるとき、みな「心ノ学」をもって、一個独立の学として、これを研究する者である、と。

西の愛読書のひとつに、ジョージ・ヘンリー・ルイス著『列伝哲学史』（一八五七年）があるが、これは徳島県土族・和田瀧次郎によって訳され、明治十七年（一八八四）一月『哲学通鑑』（石川書房）と題して刊行された。同書は大きくわけて、「第一編 古代哲学」と「第二編 近代哲学」から成るが、後者の章節に「スピノザノ伝 スピノザノ教理」がみられる。未見。

明治十七年（一八八四）四月——加藤弘之（一八三六—一九一六、明治期の啓蒙的官僚学者、東大初代総理、帝国学士院院長）は、「自由史草稿 第四」（『加藤弘之文書 第一巻』所収、同朋舎出版、平成2・8）のなかで、スピノザの天賦人權説に言及している。それは同人が直接スピノザの著作をよんで、じぶんの意見をのべたものでなく、ブリュンティエール（一八四九—一九〇六、フランスの文学史家、批評家）の独訳をよみ、それを祖述したものであろう。

「七条」 碩学スピノサ氏テゴザル「ブルンチリ歴史第百二、〇二（四丁以下） 蓋シ此碩学「ハ」（……ノ説ニヨレハ）天賦ノ権利ヘ人類ト動物ト通シテ云フ」ト云フモノハ天賦（自然）ノ能力ト云ヘルモノト 同物テアルカ故ニ 能力カアル丈ケニ権利モアル

「八条」 右スピノサ氏カ天賦ノ（自然（天賦））権利ト云ヘルモノハ 前条ニ於テ明カナルカ如ク 大魚ノ小魚ヲ嚙殺（こうさつ）カミ殺ス）スノ権利、強者カ弱者ヲ制スル（従わせる）ノ権利、弱者カ強者ヲ欺ク等ノ権利（性法学者カ 吾人各人カ異同ナク（ちがひなく） 固有セリト認メタル天賦權利トハ違テ各人）ヲ云フモノテ 即能力ト同シキモノナレハ……

加藤は翌明治十八年（一八八五）六月——ブリュンティエールの『自由と権力』（*Der Freiheit und Gewalt*）の独訳によって、その摘要をつくっている。加藤によれば、われわれが天より自由平等の権利を等しくあたえられている、と考えるのはまちがいであるという。われわれ相互の間には、かならず強弱の差がある。強いものには自由があるが、弱いものに自由はけっしてない。加藤は「強者ノ権利」のことをはじめて考えたのは、スピノザではないかと思った。

「第廿五条」 ソコテ此強者ノ權利ノ主義ヲ唱へ出シタハ 僕カ考ル所テハ 碩学スピノサ氏杯ヨリ始マリタコトテアラフト考フルテコサル

スピノザの論に、つぎのようなものがあるという。

——およそ宇宙に生じる出来事のなかで、道理にあわぬことや、悪があったりする。これはわれわれに物ごとの理非・善悪をみわけける力がないために、このように見えるのである。天地間の出来事のぜんたいを通観してみると、秩序はととのっており、乱れがない。天地万物がもつ権力は、ことごとく神の権力であることを知らねばならぬ。

明治十七年（一八八四）五月、『改訂増補 哲学字彙 全』（東洋館発行）に、「Spinozism（「スピノザ哲学説」「スピノザ主義」「スピノザ説」の意）の語がのせてある。しかし、訳語は「士邊撤学派」となっている（二一九頁）。

明治十九年（一八八六）二月から四月にかけて、『理学沿革史 上冊、下冊』（文部省編輯局）が刊行された。「理学」は哲学の意である。「翻訳凡例」によると、「本書ハ法国理学ノ教官アルフレット、フイーエー氏ノ著ニシテ『イストアル、ド、ラ、フィロゾフィー』という。

すなわち、アルフレッド・ジュール・エミール・フイエ（Alfred Jule Emile Fouille, 一八七二〜七九、フランスの哲学者・社会学者。エコールノルマル講師）が著わした *Histoire de la Philosophie, 1879* の反訳である。訳者名は明記されていないが、中江兆民が文部省の囑託によって訳したようだ（三宅雪嶺『大学今昔譚』我観社、昭和21・11）。この訳書の下冊（巻）は、明治十九年四月に刊行されている。「第四篇 近代ノ理学」の第四章は、スピノザの章である。このなかに、

緒論……二二六頁

本論……二二六頁

第一 スピノザノ議論ノ方法……二二六頁

第二 スピノザノ理学（哲学）ノ大旨

第三 庶物（万物）及ビ人類

第四 スピノザノ道学（道德論）……二二七頁

などの章節が収められている。

スピノザの章は、二二六〜二八七頁まで、六一頁もある長編である。

「緒論」において、著者スピノザの生涯の大略と主なる著作の特徴にふれている。

バロック・スピノサーハ 一千六百三十二年ヲ以テ 荷蘭アムステルダムニ生ル 其族ハ本ト葡萄牙ノ猶太人ナリトス

スピノザがいちばんはじめに著わした本は、「政教論ト曰フ」とある。そして最大の作品は、「道德論ノ一書」という。かれの議論の方法とは、――

幾何学ノ方法ニ由リ 若干ノ原則、解釈及ヒ証徴ヲ挙ケ（証拠をあげる意か）以テ体裁（ものの形）ト為ス

そしてその理学（哲学）の主旨（あらまし）は、――

其理学ノ語ヲ解釈スル文中ニ著見セリ（あらわれている）という。

たとえば、本質（シユブスタンス）とは何か。徳（アトリビユ）とは何か。影象（モード）とは何か、といったように。

庶物及び人数についていえば、――

庶民ノ本質ハ同一ニシテ 分離ス可ラス

といている。人類は「世界万物ノ中ニ在リ」という。世界は全体であり、万物や人類は、世界の支節（わかれたもの）にすぎないという。かれの道学はどうか、――

スピノーザーノ道学ハ 事理（ものごとの道理）一定ノ説ヲ以テ 本旨ト為シテ 少シモ意欲ノ自由ヲ叙次スルヲ無ク

とある。

明治期の著名な自由民権思想家・中江兆民は、『理学鉤玄 全』（集成社、明治19・6）を刊行した。これは一種の哲学概論である。ヨーロッパの諸書を参考にしながら本書を著わしたようであるが、参考文献はしめされていない。第一巻から第三巻まで合本になっている。第二巻の第五章と第六章は、スピノーザについての章節（全一五頁）である。

第五章 神仏一体説（汎神論の意）……二三〇頁

スピノーザーの神説……二三二頁

第六章 スピノーザーの道徳……二四一～二四五頁

神仏一体説（万物は神の現われである。万物のうちに神が宿っている。万物は神そのものといった説）を兆民は、つぎのようにいっている。

神仏一体説ハ 以為へらく（思われる）神は世界万物ノ外ニ在リテ占ムルニ非スシテ 正サニ万物ノ中ニ在リ 是レ世界ノ大精神ナリ（二三〇頁）

と。この説はギリシャから中世にいたるまで諸家が唱えてきたが、

荷蘭オランダバリユック、スピノザスピノザニ至いたリテ 其極そのきわみ(おわり)ニ到いたレリ 後世こうせい日耳曼ドイツフイックテ、ヘーゲルノ意説いせつ 皆神仏みな一体説りゆうごうニ流入りゅうにゅうセシモ 竟ついにニスピノザ
 一象かきゅうノ窠かきゅう白はく(鳥の巢)ヲ脱スルヲ能あたハス 故ゆえニ此一説このいっせつニ在ありテハ スピノザスピノザヲ以テ集大成しゅうたいせいト為なサ、ルヲ得えス (二三〇〜二三二頁)
 スピノザの神説とはいかなるものか——

スピノザスピノザ以おもヘラク 神かみハ世界万物ノ精神ニシテ 即すなわチ其本質そのしんたすしんすナリ 而しこうしテ其著そのあハレテ外そとニ見みハル、ヤ 二個ノ性有あリ 一ハ虚靈れいノ思念はんせい心しんナリ 一ハ
 実体エグデチユノ面積めんせきナリ (二三二頁)

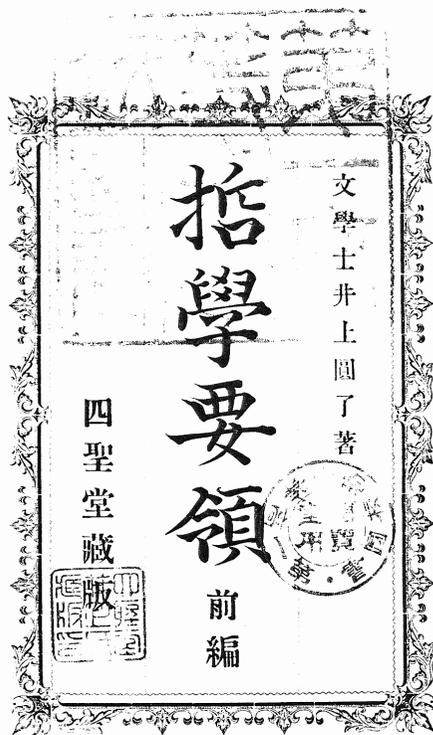
という。

そしてかれの道徳とは何か——

スピノザスピノザノ道徳ハ 利益りえきヲ以もつテ本旨ほんしト為なス者ナリ 善ぜんトハ何ソヤ 曰いわク利りナリ 利トハ何ソヤ 曰いわク凡おほソ以もつテ欣悦きんえつ(よろこび)ノ情しやうヲ生しょうシテ 悲哀ひあい
 ノ情しやうヲ去さル可べキ者もの 皆是みなこレナリ (二四一〜二四二頁)。

井上円了えんりやう(一八五八〜一九一九)は、明治期を代表する仏教哲学者のひとりであるが、同人が著わした『哲学要領 前編』(四聖堂蔵版・明治
 19・9)の「第十段 近世哲学第貳組織 第四十三節」に、スピノザについての小記事がみられる(八四〜八五頁)。その記事にいわく——

斯比諾薩氏スピノザハ 度加多氏デカウノ哲学ヲ研究シテ 其説そのノ物心ぶつしん二者ノ契合けいごう(びつたりと合う)ヲ明示スル能あたハサルヲ見テ 其難点そのヲ会釈かいしゃくセント欲シ 爰こゝニ本
 質しつニ至いたル 凡おほソ我人がじん(われわれ)ノ視聽しとん、感覺かんかくスル所ノモノハ 表象びやうきやう外形ニ過あキズシテ 其本質そのニ至いたテハ 唯ただ一いつ体アルノミ 且かつツ事物ノ
 外象がいしやうハ 本質ほんしつト其体そのていヲ同一ニスルヲ以もつテ 能造のうぞうノ天帝てんていモ 所造しよぞうノ万物モ亦同一体ナリト云フ(八四頁)。



井上円了著『哲学要領 前編』（明治19・9）。
〔東京大学付属図書館蔵〕

『中央学術雑誌』（四六号、明治20・2）の「近世哲学（接前々号）」（三宅雄次郎^{（音讀）}）に、スピノザの人と思想の大略をしるした記事がみられる（八〜一四頁）。

老仏ニ彷彿タルモノアリ、バルク、スピノザオト云フ、和蘭アムステルダム府ノ人ガ、幼ニシテ父母ト共に猶太教ニ属シ、孜々トシテ經典ノ類ヲ講究シタリシモ、変シテ専ラデカルトノ著書ヲ研究スルコトナリシニ（？）、同宗ノ徒輩ノ為メニ又以テ目セラレ（つらい目にあう）、将ニ大ニ窮迫セラレントセシカ^{不明}、去テリンスブルグ（レインスブルグ）ニ赴キ、稍静定ス

ルニ及テ（ようやく静かになる）更ニハーグニ住居シ、眼鏡ヲ磨キテ衣食ノ料ヲ取り、

只一学理ノ推考ニ従事シ居リシナリ、身体虚弱ニシテ遂ニ肺病ニテ没セリ、氏ハ温シテ情欲ニ薄ク、淡泊ニシテ名利ヲ嫌ヒ、居常（ふだん）優々トシテ（ゆったりと気らくにする）一仙人ノ風アリシト千六百三十二年ニ生レ、千六百七十七年に死セリ

そしてスピノザの哲学の大略については、つぎのように述べている。

宇宙万物ハ無数ニ現ハル、模様（形状）ニ過キスシテ模様ハ思想延長ノニ属性（本質）ニ入り、属性ハ絶待ノ本体ニ帰スルナリ

『哲学会雑誌』（第八号、明治20・9）の「論説 有神哲学」（小崎弘道）に、スピノザのことが出てくる。論者によると、「有神哲学」というのは、宇宙の原因は知恵があり、また徳があるという説を主張するものという。古今の哲学の方向は、哲学だけにとどまらず、神学上の問題となり、神の有無、神の性質にわたるといふ。

彼ノスピノザハ 凡神論ノ父トモ呼バル、程ノ人テ御座リマスカ 其説ノ帰着スル処カラ見レハ、成ルホト凡神論デナケレバナラスト思ヒマス

『国民之友』（第二二号、明治21・5）の「批評論」（西堂居士）に、スピノザの名がみられる。論者によると、西洋思想がわが国に伝わり、感化をあたえてまだ時があまりたっていないが、また成就した結果があらわれていない。日本の思想界をながめると、西洋思想を論じたものに誤りが多いことがわかる。仁田桂次郎という人の『哲学管見』（小冊子）をみて、管見とはいえ、それがあまりも狭い見識をもって書かれているにおどろいたという。

近世哲学史を論じる段になって、――

唯だベーコンとプラトンを奇怪に比較するに止まりて、ブルーノ（ルネサンス期のイタリアの哲学者―引用者）又デカルトの名も無ければ、スピノザ、ライプニッツの名もあらず、カント、ヘーゲルの名だに見えず……

『日本人』（第八号、明治21・8）の「雑報」に、「理学宗の駁撃」（おもな哲学者の意見を非難する意）といった文章があり、このなかにスピノザが出てくる。

●理学宗の駁撃

頃日（ちかごろ） 独逸人ドクトル、ヘーリング氏なる者は 社友杉浦重剛氏並びに社員菊池が唱道する処の所謂「理学宗」なる者の哲理を駁撃したり、氏は末段に到りて曰く「蓋し新に一派の教系を造り出すはカント、フィヒテ、ヘーゲルの如き大家にして初めて彼のスピノザ、プラトの糟糠を嘗めず、一派の論を唱へ得ると雖も、他の尋常一様の学者に在ては、世人は之れに自己の意見を述ぶるを許さず」と、咄々（いやはや）奇怪なる言辞なる哉、

明治二十二年（一八八九年）三月――静岡県士族・尺振八（一八三九〜八六、幕末・明治前期の英学者）は、Webster's National Pictorial

Dictionaryその他の英語辞典を参酌して編んだ、学生むけの英和辞書を刊行した。

尺振八訳

明治
英和辞典

六合館蔵版

がそれである。この辞書に、Spinozism（「スピノザの哲学説、スピノザ主義」の意）とSpinozist（「スピノザ哲学信奉」「研究」者」の意）の二語が出てくるが、尺振八訳では、

Spinozism (名) 一物論いちぶつろん (Benedict Spinoza ノ立論スル所ナリ 此語之二基ス)。

Spinozist (名) 一物論者

となっている。「一物論」の「一物」とは、one substance を訳したものであろう。

『学林』(第二号、明治22・11)の「職工ノ保護」(和田維四郎)に、スピノザの名がみられる。論者によると、この地球でくらす者は、みな平等であり、お互い助けあい、幸福をわかち、すべての人を広く平等に愛さなければならぬという。社会主義については上古じょうこ(おおむかし)より、哲学者が論じ、近世においては、――

マチヤペリ(マキヤペリ) スピノツァ ルソー モンデスキュー カント及ヒアダム・スミス等ノ主張セシ社会改良あひん按(案―かんがえ)

は、欧米文明国で実行されたにしても、まだその目的を達していない、という。

三宅雄二郎（一八六〇～一九四五、雪嶺はペンネーム。明治から昭和期にかけての評論家）の『哲学涓滴 全』（文海堂、明治22・11）は、哲学史風にかかれた哲学入門書である。内容は、第一部 結論、第二部 独断法の哲学、第三部 懐疑法の哲学、第四部 批判法の哲学である。「第二部 独断法の哲学」のなかに、「スピノザの学説」（八一～八八頁）と題する一章がある。この章節は、スピノザの生涯を瞥見し、その哲学大系の特徴を略記したものと見える。

スピノザの哲学の大系は、三種の総念そうねんに本ける者ものにして、第一を本体とし、第二を属性とし、第三を模様（形状）とするなり。

という。

著者はスピノザのことばとして、こんなことをのべている。人間は一種の形状にすぎないと。どんなに威厳がそなわっていようと、どんなに富や地位があっても高がしれている。善とは人間にとって利益があることであり、悪とはそれはばむものである。善をうるには、神を認識し、神を敬愛することである。神を知れば、心が清浄になる。栄光にめぐまれても、これをよるこばず、侮辱にあっても怒らず、平然としていふことである。

『文学評論』 志からみ草紙』（第一〇号、明治23・7）の「アリストオテレスと忍月居士にんげつこじ」（石橋忍月一八六五～一九二六、明治期の評論家、小説家）と」（山口虎太郎）に、スピノザのことが出てくる。論者によると、近世の哲学者はむかしの哲学者の用語が不明であるため、誤解に陥ることをなげき、そのため用語を説明するようにいっている、という。

知言ちげん（よく道理にかなったことば）と謂ふべしスピノザは用語にいちいち々々註解を加えしも猶なほ（やはり）カント等の明めい（学問）に及ばず……

『城南評論』（第一号、明治25・3）の「莊学発蘊」に、スピノザの名がみられる。論者によると、ヨーロッパ哲学のやり方をみると、主に宇宙万物の原理をふかく研究することを先に行っているという。——有神、無神、一神、凡神はんしん、物質、虚靈きよれい（心の神秘性の意か）、相対、絶対などについての議論がさかんであるが、——世間、出世間、道德、仁義などについての論弁となると、大まかで、しまりが無い。

されはテガルト、ライプニッツ、フヒフテ、セーリング、カント、ヘーゲル、シヨッペンハウエル、ロツク、ヒューム、スピノサ、ミル、スペンサー等多くは形而上の理学（哲学）を唱導して、其他を軽忽（ふかく考えない）にす、……

『東洋学芸雑誌』（第一一七号、明治24・5）の「欧州哲学の近況（前号の続）」（井上哲次郎）に、スピノザの名が引かれている。論者によると、哲学者のなかに独身者が多という。カント、ヒューム、ライプニッツも独身であった。

スピノツア、デカルト等皆独り者デシタガ……

『教育時論』（第二五四号、明治25・5）の「理学 哲学——一元論ト二元論」（藤村居士）に、スピノザの名が何度も出てくる。論者によると、近代哲学の祖デカルトは一元論者（ただ一つの原理で、宇宙の問題のすべてを説明しようとする人）であったが、二元論に陥ることもあったという。デカルト哲学の系譜につらなるスピノザはどうであったのか。

スピノザハ之（二元論）ヲ避ケテ、本体（思惟によってのみとらえることができる実体）と属性（本質）トノ二ツニ立テ、宇宙万有ヲ以テ属性トナシ、神ヲ以テ本体トナシ、本体ハ属性ヲ造ルトナス。

『反省会雑誌』（第七年・第五号、明治25・6）の「学淵 比軽宗教学 講義第五回」（藤島了穩）に、スピノザの名がみられる。

仏教には真如（宇宙万物の本体であり、永久不変の真理）を説いて 一草一木に之を具すると説いて 別に宇宙創造の神を立たされば 亦た汎神教と云ふを得べく スピノザの如きは 普遍神なるものを立て、云何なる物にも存すると説くを仏教の真如に似たり

『哲学雑誌』（第六八号、明治25・10）の「自由意志ト必至論」（中島力造）に、必至論者としてのスピノザのことが出てくる。意志は何ものによっても制約されず、自由である。これに対立する考え方は、意志の自由は存在しない。存在するのは絶対的必然性だけである、と主張する。論者によると、スピノザは「必至論者」であったという。

スピノザー (Spinoza, 1632-1677) ハ必至論者ナリ 何トナレハ スピノザーノ哲学ニヨレハ 天地万有ハ単ニ実体ノ變形ナリ 而シテ此実体ニハ 永遠一定ノ法則具ハリテ 之ヲ支配ス 吾人々類モ之実体ノ變形ナレハ 其法則ノ支配ヲ免ル、能ハス 乃チ意志モ亦必然ノ法則ニ従フモノニシテ 自由ナルモノニアラス

『六合雑誌』（第一三二号、明治25・？）の「先哲（むかしのすぐれた人）スピノザの性行（性質とおこない）」（大西祝）は、「本郷会堂」においておこなった講演を活字にしたものである。

人と生れては、偉大なる人物となるか、但し又偉大なる人物を慕ひ度いものと思ひます。偉大なる人物とならずとも、若し偉大なる人物を慕へば、その慕ふことに 亦自ら幾分の偉大なる所があると云ツて宜しからうと存じます。今夕は先哲スピノザの性行を御話致して、諸君と共に暫く此偉大なる哲人を記念し度いと思ひます。

と語ったのち、スピノザの略伝やその人物や品性、おもなる著述などについてのべている。一般の聴衆にもわかるように説いていて、スピノザの一代記をひじょうにおもしろく伝えたものとして出色のできばえである。

『六合雑誌』（第一四四号、明治25・？）の「哲学史上カントの位置」（中島力造）は、明治二十五年（一八九二）十一月二十六日に「本郷会堂」でおこなった講演を活字にしたものである。演題としてカントを選んでみたが、カントは一般聴衆にとってなかなかむずかしいから テーマとしては不適當の気がしたという。

カントについて語るにしても、ヨーロッパ近世の哲学の起源から話をせねばならぬと考え、デカルトから説いた。論者によると、デカルトは人

問の知恵でわからぬことが三つあると思ったという。

- 一 じぶんが存在すること。
- 二 神が世のなかにあること。
- 三 世のなかに物体があること。

デカルトのあとに出た哲学者としてスピノザをあげ、つぎのように語った。

スピノザの説は 物質と思想と云ふものは、デカルトの言ふやうに全く種類の違ったものではない、一つの実体 (Substance) が思想として又物体として世の中に現はれ、一方には人間の精神として現はれ、一方に於ては物質として現はれて居るのである。夫れで同じ物が二つの属性即ち Attribute を持つて居るのである故に、此二者は互に結び附く事が出来るのであると説きました。……

『国友之友』(第一八五号。第二二卷、明治26・3)の「雑録 テーンの死去(仏国文学界復一明星を失ふ)」は、イポリート・アドルフ・テーヌ(一八二八〜九三、フランスの批評家・哲学者・文学史家)の死を報じたものであるが、このなかにスピノザのことが出てくる。

蓋し(おもうに)「リヴィ論」の一篇、題を羅馬の歴史家に仮つて却つてスピノザの哲学を論ぜしものなりき。

北村透谷(一八六八〜九四、明治期の評論家・詩人)は、人間のほかに人間を研究する者はいないという。人生を真に理解したければ、哲学や宗教、および諸科学によってこれを研究したらよい、という。

『文学界』(第五号、明治26・5)の「人生の意義」(透谷)のなかに、スピノザが出てくる。論者によると、キリスト教のなかにも唯心論(世界の本体、現象の本質は、精神にあるという論)や唯物論(精神は物質に規定されるとする説)に傾いたものがあるはずである。もし唯心論がぜ

つたいに悪いというのであれば、

カントでもヘーゲルでも、スピノザでも御相手に成なされて、主観的アイデアリズム（観念論、唯心論の意―引用者）でも客観的アイデアリズムでも、絶対的アイデアリズムでも何でも彼かでも彼かでも撃ち平なげられたが宜よろしからふと存ぞんずるなり。

『文学評論』 志からみ草紙』（第四五号、明治26・6）の「和蘭オランダの美学」（新井虎南訳）に、スピノザ全集と美学に関する自著を刊行したJ・ファン・フルーテン Voeten のことが出てくる。

和蘭審美学に於おける近年の最大著作はスピノツア全集を出版せしファン、フロッテンの *Nederlandsche Aesthetik*（和蘭美学）なり。此書は感覚、思想、意志等の如き人類の諸能力に対する一般の分解を以て始まり。

『教育時論』（第二九三号、明治26・6）の「理科 哲学 庶シヨウ遍ヘン波ハ哲学大ダイ概ガイ（あらまし）」（高島平三郎）に、スピノザが登場する。シヨールペンハウアー（一七八八―一八五〇、ドイツの哲学者）は、プラトンとカントの学派を攻究し、兩人を手本にしたという。

（かれは）常に此この二氏を以て、己おのが師表となし、当時独人の好んで研究せるアリストートル及びスピノザ等の学派を軽視したりき。

『教育時論』（第三一〇号、明治26・11）の「理科 哲学 ヘーゲル後ノ哲学」（久津見藤村、藤村は「わらび」の意）は、十九世紀初頭から哲学界に君臨したヘーゲル哲学の凋落した原因や、その後哲学者が建てた学説を略述したものである。が、このなかにスピノザが二度ばかり顔をだし
ている。

論者によると、デカルト以来ヘーゲルにいたるまで養ってきた唯心論は信用をうしない、地におち、学者はそれぞれじぶんの考えによって独自の論をたてている。

或ハプラトールニ歸スルモノ、或ハライブニツツニ依レルモノ、或ハスピノザヲ呼び起サントスルモノ……

スピノザニアリテハ、宇宙万有ノ本体ト云フハ、唯其ノ全体ヲ指シタルモノノ如クニシテ、否定ニ終ルモノナラザルヲ得ズ、……

『天則』（第六編・第六号、明治26・12）の「論説 哲学祭演説「カント略伝」（井上円了述）は、いうまでもなくカントの生涯と思想を略述したものであるが、このなかにスピノザが出てくる。カントの両親はむすこを神父にしたかったのであるが、本人は神学をまなんで僧になることを好まず、哲学の方面にむかったとのべている。

恰もデカルト スピノザが最初僧侶の手に教育せられ、後遂に哲学者となりて 其主義に反対したると異ならず、……

『教育時論』（第三一五号、明治27・1）の「ヘーゲル後ノ哲学（第三シヨペンハワーノ統）」（久津見息忠）に、スピノザの万有神教（有神論）神の存在をみとめる立場の説が出てくる。

シヨペンハワーノ哲学ハ、カントノ超絶哲学、ヒヒテノ主観的唯心哲学、ロックノ経験論、スピノザトセルリングノ万有神教、プラトールノ理想論、及ヒ仏教ノ厭世主義ヲ統合シタルモノニシテ、……

『同志社文学』（第七四号、明治27・2）の「論説 哲学の勧め」（森田久万人）に、スピノザの名をみる。論者によると、古今の哲学者の伝記をよんでわかることは、富裕のものや身分の高いものはまれであり、多くは逆境のなかをさまよい、真理や美や神を友としている。ちなみに第一流の哲学者の寿命を計算してみたところ、つぎのようになったという。

ソクラテス……70歳 アリストテレス……63歳 ライブニッツ……70歳 カント……80歳 ヘーゲル……61歳

そして、――

ロツチエは六十四、デカートは五十四、スピノザは四十五にして世を逝れり、……

『早稲田文学』(第六一號、明治27・4)の「カント前の美論の大勢」(U・K)に、スピノザの名がみられる。論者によると、近世哲学は唯理派と経験派の二つの潮流にわかれるという。一方は理性を、またもう一方は経験を基礎とし、それぞれ系統を立てているという。いわゆるイギリス派は、ベーコンをはじめとし、ロックやヒュームにいたるまで、かれらは重きを感覚に歸し、

(四) スピノザ派
スピノザ 一六三二年生、一六七七年死。和蘭ノ人ナリ
デカート派ニ屬ス

『六合雜誌』(第一六一号、明治27・5)の「雜記 歴史の価値と厭世思想」のなかで、論者はこんなことをいっている。哲学思想は、進化発達

大陸派はデカルトを初としてスピノザ、ライブニッツ、ヴォルフに至るまで、専ら重きを理性に歸せり、……

といった観念と親密な関係をもっていない。

仏教の進化てふ觀念に親しからぬは恰もスピノザの哲学の之に親しからぬが如し

『六合雜誌』(第一六二号、明治27・6)の「フ井ヒテ(Fichte) 〓学者の天職」(高橋五郎)は、スピノザの「宿命論・決定論」Determinismusを信奉したフィヒテ(二七六二―一八一四、ドイツ觀念論の代表的哲学者)についての小論である。

哲学者としてフ井ヒテは 最初スピノザの定数説(Determinismus)を信じたりしが、^(純粹理性批判)Kritik der reinen Vernunftを讀むに及んで豹変してカントの弟子となれり

『心海』(第一〇号、明治27・6)の「論說 有神哲学上の三大觀念(第七号の続)」(石川喜三郎)に、スピノザの名が何度か引かれている。この論文は、有神哲学上のもっとも漠然とした汎神論^{パンテイスム}について論評したものである。

ヘーゲルの哲学とスピノザの哲学とは同じくこれ万有一如^{ばんゆういちにょ}(万物の本質はただひとつ、違いはない)の凡神教なれども其性質を異にせり。

という。論者によると、神はこの万物の世界となって現われている。神の実体は、われわれの思想上に、あるいは有形無形の思想に反射している。靈も物もみな神の実体——すなわち神である。いっさいのものは、神実在者の屬性(本質)だという。そして――、

この説はスピノザの唱導したる哲学にして スピノザは実にこの説の代表者なり。

『青山評論』(第四八号、明治27・6)の「学海 東洋哲学研究の必要を論ず(承前)」(浅井豊久)は、東西哲学を対照し、その異同を論じたものである。東洋に老子や釈迦や易經^{イキョウ}(五經のひとつ)。万物の変化と人間の關係なども説く)の天地同根——万物一体の説があるように、

ジヨルダノ、ブルノー（二五四八？～一六〇〇）、イタリアのルネサンス期の哲学者。汎神論的モナド論をとなえ火刑にされた、スピノザ等スピノザ等の万有哲学…

があるという。『六合雑誌』（第一七〇号、明治28・2）の「宗教の定義を論ず」（原田 助）は、宗教をめぐる諸説を紹介したのだが、このなかにスピノザのことが出てくる。

スピノサは云ふ、宗教とは 神性の完全なるを知りて神を愛するとなりと、……

『六合雑誌』（第一八四号、明治29・4）の「経験論者と『カント』との関係」（中島徳蔵）に、スピノザの名がちらほらみられる。近代哲学の勃興期——ヘーゲルに満足できない者のなかに、プラトンを祖述したり、アリストテレスを継承する者がいたり、

或は「ブルノー」「スピノザ」「ライブニッツ」等を唱和するものありて、哲字界は拳あひて彼の謂いはゆる英の連想論経験者論者のみに非あらざりしと雖いえども…

という。

『太陽』（第一八号、明治29・8）の「文学 第六——進化学の哲学に及せる影響」に、スピノザのことが出てくる。記者によると、偉大な哲学者、卓見せきある碩学せきといえども、こんにちからみると誤りを犯している。

ホツプス、スピノザ、ライブニッツ、ヘーゲル等 其他その諸しよ大家たいかに至りても 多少此の如き迷見めいけんを免れざりき……

『反省会雑誌』（第一一年・第九号、明治29・10）の「厭世家としての『シヨッペンハウエル』」（広田一乗）に、汎神論者としてのスピノザが登

場する。

是彼が「スピノザ」万有神教の先駆者と認めらるゝ、所以にして、罪悪は一種の迷妄に過ぎざるなりと見らるゝに至れり
「スピノザ」は此の世界を以て、善なるか又は悪なるかの疑問を起して、世界の価値を尋ねんとするものを叱して曰く、……

『反省会雑誌』（第一一年・第一〇号、明治29・11）の「厭世家としての『シヨツペンハウエル本論』（広田一乗）においても、スピノザが言及されている。

曰く「ブルノー」、「スピノザ」、「シエリング」等の諸哲学者等出でて、其所説を發表して以来、宇宙の万物、其根唯一なることは、充分世人に了解せらるゝに至れり

『帝国文学』（第三卷・第一号、明治30・1）の「カリエールが美学の立脚地」（蟹江義丸）に、スピノザの名がみられる。ベーコンやロックといったイギリスの実験派は、――

デカルト スピノザ ライブニッツの理性論と近世の前半期に相對壘（對抗）し、カント出で、先天唯心論を唱導し一たび之を調和せし観ありしかど、……

文科大學哲学教師ドクトル
フォン・ケーベル講 『哲学要領 全』（南江堂書店・明治30・6）は、ラファエル・ケーベル（一八四八―一九二三、ロシアの哲学者）が、明治二十六年（一八九三）の秋から冬にかけて東大において講じた「哲学入門」（哲学概論、哲学史）の前半部分（原文は英語）を、その原稿から日本語に訳したものである。

本書は、一 哲学の概念 二 哲学の分類 三 哲学の方法 四 哲学の系統などから成っている。ケーベルは講義のなかで、たびたびスピノ

ザに言及した。著者によると、数学の結論は、ぜったいに正確である。数学は演繹的（一般的な原理からとくべつな事実を説明する）科学である。しかし、これはひじょうに誤った議論である。この誤った数学的方法によって、哲学的真実を論証しようとした哲学者がいた。それはスピノザであった。

世界が嘗て生したる最大思想家の一なるスピノザすらも、此不幸なる誤謬に陥り、彼れの奥妙なる観念を、恰も幾何学者か彼の定理を論証する如く、論証せり（二三 哲学の方法」、六一頁）

ケーベルによると、スピノザは世界最大級の哲学者のひとりなのである。スピノザの主著『エティカ』については、哲学史の特別講義においてくわしく話をしたいという。この書はむずかしいものであるが、哲学の研究にまじめに従事したければ、一生にいちどはこの本をよむ義務があるという。ケーベルはさらにライプニッツ（一六四六―一七一六、ドイツの数学者・哲学者）について語ったとき、スピノザにふれている。

諸君はスピノザに於て、而して一層多くライプニッツに於て 唯心論的章句を発見するを得へし。

『百種
新撰』
哲学問答 全編
第壹』（普及舎、明治30・7）は、一種の哲学入門書であるが、同書の「第七章 近代の哲学」に、スピノザが出てくる。

問 デカルトに次で出でたる名高き哲学者は誰なりや、

答 スピノザ、マルブランシの二人なり、

問 この二人の哲学は如何、（中略）

問 今云はれたる万有神教とは何ぞや、

答 この世界万物を唯一無限の本体、即ち一の神の現示なりと見るとは、スピノザの哲学なり、

『反省雑誌』（第一二年・第八号、明治30・8）の「見真似天才修業」（シエゲ太郎）において、論者は、天才のつくり方を講述するつもりであったが、代わって天才修業について書くことにしたという。この戯作げさくのなかにスピノザの名が、ちらほらみられる。

小男であったのは、アリストテレスやプラトン、スピノザ、モンテーニュもみな体がちいさかったという。

論者によると、トーマス・ホップス（一五八八〜一六七九、イギリスの哲学者）は、勉強するために妻帯しなかったが、未熟なものが政略結婚をするのを見るつど、学問のために暗涙をもよおすという。カントもデカルトもロックもスピノザもみな独身であった。

『月刊世界之日本』（第一九号、明治30・9）の小記事「天才と人種及階級」おび「米国学士会報告クリー氏」は、社会階級を上等・上・下等・下等の上・下等の四階級にわけているが、下等の上階級に属するものとして、エラスムス、モリエール、ラシーヌとならんでスピノザの名を掲げている。

これと似た記事は、『女学雑誌』（第四五〇号、明治30・9）に掲載された小記事「天才に就て」である。今古の天才を身長によって類別し、身長が五尺九寸（約一八〇センチ）以上もあった哲学者は、――

スピノザ。ルナン。ミル。ベーコン。

という。

『日本人』（第六一号、明治31・2）の「妄想録（其二）」（在米 鈴木大拙稿）に、スピノザが引きあいに出されている。論者にみるところ、スピノザは哲学者であった。論者によると、こうせん洪川老師（いまきたうせん今北洪川）「二八一六〜一八九二」、幕末・明治初期の臨済宗の僧）の語録に「きと悟りて後の善悪は（迷いを去って真理を知ったのちのよいことと悪いこと）、善悪共に善なり、悟らざる前の善悪は善悪共に悪なり」とあるという。このことばに接したとき、悟りというもの（迷いがさめること）は、げんかい幻怪なもの（あやしいものの意か――引用者）のように思えたらしい。世間の人よ、どうか眼を高くつけて先のことばの理由を見抜いてほしい、といっている。

この考えからすると、――



網島栄一郎（梁川）

スピノザが子一口一王（ローマ皇帝ネロ〔三七〜六八〕）の古今絶無の凶悪を犯したるを悪にあらず、善にあらずと断し去りたるは、亦一段と見識ありと謂はざるべからず。

という。さらに天台宗の三観（真理を観察するための三つの方法——空観・仮観・中観）や華嚴宗の四法界（四つの世界——天界・地界・水界・陽界の意か）などは、——

独逸現代の唯心論系統、スピノザの一元両性論などに酷似す。

という。

『帝国文学』（第四卷・第二号、明治31・2）の「論説——湖上詩人を憶ふ」（藤井健治郎）に、スピノザの名がみられる。論者は万有神論（万有ことごとく神、もしくは神の化現）にふれ、神の性格に関しては、哲学者のあいだでも意見が一致していないという。

スピノザの物質、ヘーゲルの理体（万有の本体、実体）
シヨッペン
ハウエルの意志、ハルトマンの無意識……

これらみな唯一神と立てられた者という。

網島栄一郎（一八七三〜一九〇七、ペンネームは「梁川」）は、岡山のひとである。東京専門学校専修英語科を卒業後、学友（島村抱月、金子馬治、後藤宙外、朝河貫一ら）と哲学会を組織し、哲学および思潮問題を研究した。かたわら『早稲田文学』や専門学校の講義録編輯のしごと

とに従事した。西洋の思想書も好んだが、パスカルやスピノザの書にしたしんだ（「余の愛読書」）。肺結核をわずらい、病中にあった最晩年にも、スピノザの本をよんでいた（「病間日誌」明治38・2〜3）。

『倫理問題の発達』（明治31〜32ごろの稿？ 東京専門学校文学科講義録）の「第三章 近世倫理学」に、「スピノザの倫理説」の章節（四六二〜四六五頁）がある。

（二）スピノザの倫理説

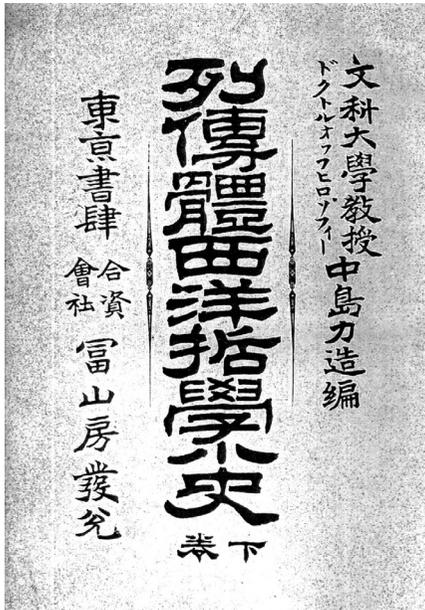
スピノザは其の倫理説を哲学系の礎上に築きたり。スピノザの哲学は一言すればデカルトの二元論を一元論に帰したるもの也。デカルトは没交渉なる心、物二元を設けて二者を独立の実体となせり。延長（空間）は物の本質にして意識は心の本質なり、彼れが心と物とを没交渉の独立体と見たるは即ち其の自由意志を主張せる根柢なりき。

同書は、当時コロンビア大学の講師であったヒスロップ James H. Hyslop が著わした『倫理学原論』“*The Elements of Ethics*” (1895) の第二章「倫理問題の起源ならびに発達」(The Origin and Development of Ethical Problems, p. 18〜188) によって書いたものらしい（『梁川全集 第三巻』春秋社、大正11・7）。

『日本人』（第六四号、明治31・4）の「病中囁語（たわごと）」——◎スピノザの気魄（気性）は、スピノザが暴漢におそわれた事件についてのべている。

スピノザの哲学は、異端を説くゆえにかれは命をねらわれたという。一日スピノザがブラッセルの劇場（これは誤り—引用者）を出て家に帰ろうとしたとき、かれを狙撃する者があり、銃弾は衣をつらぬいたという。

若しスピノザをして海舟翁（勝海舟「二八三〜九九」、幕末・明治期の政治家）たらしめば、彼は鶏肋（じぶんの文集）を公刊して、其奇禍（思いがけない災難）を誇りたりしなるべし。



中島力造編『列伝西洋哲学史 下巻』
(富山房、明治31・6)

中島力造著『列伝西洋哲学小史 下巻』(富山房、明治31・6)は、六六六頁もある大著である。同書の「第四編 デーカルト学派の反対者」の章節において、その学説のことが論じられている。まず伝記がつづられ(二六五〜三三六頁)、そのあと学説——本体論、属性論、変状論などが説かれている。

著者のスピノザ伝は、三十ページほどもあり、この時代のものとしてはくわしい方である。伝記の劈頭スピノザは「近代哲学の大家」とまで絶賛している。

氏は初め猶太教の法教師モルタイラてふ人より教育を受け、猶太教及び猶太文学を学び、特に中世に於ける猶太人の著したる哲学を主として究めたり、という。そして伝記をつぎの一節をもってしめくくっている。

氏の近世哲学に及ぼせし影響は極めて切要なもの(きわめて大切なもの)なり、或人は氏の説を誤解して、過酷なる攻撃を加ふとへども、未だ氏の説を充分に了解せしにあらざるが如く見え、故に今日も哲学史家は力を尽して、氏の説を研究し居れり、氏は性質温厚の人にして、殆んど聖人とも目すべく、一生校職にも公務にも携はらず、たゞ己が手芸(レンズみがき)に依て生活せり、其心の清廉潔白なるは古今稀に見る好人物なり。

スピノザの学説については、つぎのように要約している。それは倫理学において明らかだという。論究方法は、幾何学にならない数学的であるから、読者にとってももしろいものではない。倫理問題の研究は、形而上学説を基礎にしたものである。かれはデカルトが唱えた数学的研究法を哲学と倫理の研究に応用したにすぎない。

スピノザの思想は、すくなくならず中世のユダヤ人哲学者に由来している。か

れの汎神論の淵源は、中世のユダヤ人哲学者にあるといっても過言ではない。

著者によると、スピノザ哲学の三大概念は、――

本体 (Substance) …… 独立の実在にして (意識または主観から独立に存在する意)、これを思考するに他の実在を必要としないもの。

属性 (Attribute) …… 知力が本体の本質を構成すと認知するものをいう。

変状 (Mode) …… 自体以外の実在によって存在し、また思考せらるゝ本体の変状をいう。

の三つであるという。

『哲学雑誌』(第一三卷・第一三七号、明治31・7)の「論説 韓圖の哲学」(蟹江義丸)に、デカルト哲学をうけついだスピノザが登場する。

(スピノザ、ライブニッツ、ヴォルフの諸家ハデカルトの学説を継承……)

『太陽』(第四卷・第一八号、明治31・9)の「海外彙報―風景と文学」は、近刊の『スペクテートル』誌に掲載された記事を紹介したものである。論者によると、風景や自然界が知的生産物に影響をあたえることは真理だという。このなかにスピノザが出てくる。純理哲学者――たとえば、

プラトン、スピノザの如き、好く(しばしば)無限に接近したるならん。

井上円了講述『通俗講談 哲学早わかり』(開発社、明治32・2)は、哲学館拡張のために、府県を巡回し、一夕の茶話を口述したものを本にしたものである。本書は一般むけの哲学入門書である。「第九回 哲学諸家の学説」のなかに、スピノザの名が出てくる。

次に大陸哲学は 仏国の「デカルト」氏一たび独断の学風を開き、思想を起点として哲学を講ぜしより、和蘭の「スピノザ」氏之を継ぎて一元論を

唱へ、……(六六頁)

なお、同書の附録「西洋哲学者年表」に、スピノザの略伝がしるされている。いわく――

スピノザ氏 (Spinoza) は一千六百三十二年に生れ、一千六百七十七年に死す、和蘭国アムステルダムの人にして、猶太人種に属す、故ありて改宗して耶蘇教に入る、晩年肺患にかゝり、遂に之れに死す、氏の論は万有皆神教 (Pantheism) に属す、即ち (Monism) なり。

蟹江義丸著『西洋哲学史』(博文館、明治32・8)は、もとより学者の閲読に供するために書いたものではなく、ただ哲学思想を普及させるために著わしたものである(「序」)。これは三三二頁もある大著であるが、「近世哲学 第一期 カント以前」にスピノザの章節がある(一八七―一九三頁)。

このなかでスピノザの簡単な生いたち、その哲学的傾向、一元的世界観、実体、思惟と延長、倫理説などについて説いている。『教育時論』(第五四〇号、明治33・4)の「問答」に、スピノザの汎神論のことが出てくる。論者によると、汎神説すなわち有神教は、天地万有みなこれ神と考えるものという。仏教にも山川草木みなこれ仏性(仏の本性、性質)といった説があるが、

スピノザが「神は万有(あらゆるもの)の中に存す、神は即ち万有なり、万有を離れて神あるにあらず、神と万有とは異名同言なり」と言ひたるが如きは是なり、

という。

『教育時論』(第五五九号、明治33・10)の「問答」に、実体(不変の本質的存在としての神)のことが論じられているが、そこにスピノザの名がみられる。

儒教の天（神）、仏教の真如（絶対不変の真理）、基督教の神、老荘（老子と荘子）の道、神道の造化神（宇宙万物を創造する神）、アリストテレスの最高の理想、スピノザの無限実体……（中略）皆この実物を指して命名したるものなり

『哲学雑誌』（第一五巻・第一六四号、明治33・10）の「雑録 スピノザに関する一新著」（波多野精一）は、フレデリック・パロック卿が著わした『スピノザ——かれの生涯と哲学』（C・ケガン・ポール社、ロンドン、一八九九年）〔Frederick Pollock: Spinoza His Life and Philosophy, C. Kegan Paul & Co., London, 1899〕の内容を紹介したものである。評者は、本書はすべておもしろいという。評者は翌月同誌（第一五巻・第一六五号、明治33・11）の「雑録 スピノザに関する一新書（承前）」を発表し、「スピノザ学説の起源」について論じた。スピノザ学説のみなもとの疑問に関して、パロック卿が取った態度を理解するために、これまで提出された解答を知っておく必要があるという。スピノザの学説の起源は、デカルトだけに置くべきでなく、中世のユダヤ人哲学者——モセス・ベン、レヴィ・ベン・ゲルソン、あるいはカバラ学者に求める者もいるという。評者はこれまでに提出された諸家の説を紹介している。

『哲学叢書』（第一巻・第一集、明治33・11）の「倫理法の必然的基礎（一）哲学的証明」に、包有的二元論者としてのスピノザの名が引かれている。

近世に於けるスピノザ、カント、シエリング、ヘーゲル等の諸家は 皆此説を認容せざるはなし、……（二二五―二二六頁）

三宅雪嶺述『近世哲学史』（哲学館第十二学年度 高等教育学科講義録、明治33・？）に、スピノザの章節がある。講述者は、このなかでスピノザの略伝をかたり、ついでその哲学の体系について語った（二〇七―二一四頁）。

スピノザ

バルク、スピノザは和蘭アムステルダム府の人なるが、幼にして父母と共に猶太教に属し、孜孜として經典の類を講究したりしも、中頃變じて、専らデカルトの著書を研究することとなりしより、同宗の徒輩の爲めに、破門を以て目せられ、將に大に窘迫せられんとせしかは、去てリンズブルグに赴き事

稍々(だんだん) 静定するに及て 更にハーゲー(ハーグ)に住居し 眼鏡を磨きて衣食の料を取り 只一心に学理の推考に従事し居りしなり 身体
虚弱にして 遂に肺病にて没せり 氏は温和にして情慾に薄く 淡泊にして 名利を厭ひ居常悠々として一仙人の風ありしと云ふ (千六百三十二年
に生れ 千六百七十八年に死せり) ……

……………

スピノザの哲学の体系は 三種の総念に本けるものにして 第一を本体とし 第二を属性とし 第三を模様とするなり

『教育時論』(第五六五号、明治34・1)の「カントの教育説(上)」(成富正義述)に、スピノザの名がみられる。論者によると、カントはじつに空前の大人物であるという。カント以前にカントにまさる思想家はいない。かれの偉大なところは名著『純粹理性批判』を書いたことであり、同書に比すべきものは、カント以前にほとんど見当らぬという。あえて他に求めると、――

プラトンの「共和政治」、アリストテレスの「形而上学」、スピノツアの「倫理学」、及びデカルトの「哲学原理」などの如き著作

があるという。またカント以前における哲学界の大勢は、主としてイギリス派と大陸派に二分できるという。大陸派には、――

デカルトよりスピノツア、ライブニツクなどの人物出で、其所説は概ね合理派に属し遂に独断に流る、

という。

波多野精一著『西洋哲学史要』(大日本図書株式会社、明治34・11)は、大西祝の『西洋哲学史』とおなじように、西洋哲学史ぜんたいを見わたすときの必読文献とされ、名著のひとつである。本書は、初学者のために内外の諸書をひろく読みあさり、西洋哲学発達のようすを叙述したも

のという（「序」）。

この書物は、古代哲学史と近代哲学史から成るのだが、近代哲学史の第四章は、スピノザの章節である（二九二～二〇六頁）。このなかでスピノザの哲学の出発点、スピノザの世界観と幾何学、神すなわち自然、思惟と延長、神の状態とその出没変化、精神と物体、道徳論、人間の真の自由などについて説かれている。

そしてスピノザ哲学を約言して、つぎのようにのべている。

是の如くスピノザの哲学は、冷かなる数学的究理心と温かなる神秘的宗教心とを奇異にも結合せりしなり。

『太陽』（第八巻・第二号、明治35・1）の「無神無靈魂説の是非如何」（井上哲次郎）に、スピノザが登場する。論者によると、われわれの耳目にふれるものは現象であるという。現象以外に不変的実在というものがあり、哲学はその解明のために在るといふ。東西の哲学者はみなこの不変的実在の観念を基礎として、その哲学を建設した。

プラトンの観念の如き、スピノツアの万有本体の如き、……

『太陽』（第八巻・第四号、明治35・4）の「海外通信 高山君に贈る（承前）」（在キール 姉崎正治）に、スピノザが登場する。この一文は宗教学者である論者・姉崎正治（一八七三～一九四九、東大教授）が、評論家・高山樗牛（一八七一～一九〇二）に宛てたものである。

論者によると、由来大学教授は腐儒（考えが古く、役にたためず）になりやすく、取るに足らぬ、大学の片々たる論文をみると、あわれまずにはおれぬという。高山君、君はみずから称して「敗亡の身」（敗北した人間）といっているが、そうだとすると、ニーチェも敗亡の人ということになる。

シヨペンハウエルやスピノザも世には屈辱の人なり……



姉崎正治



元良勇次郎

『東洋哲学』（第九編・第七号、明治35・7）の「論説」に、元良勇次郎（一八五八〜一九二一、同志社にまなびのちボストン大学とジョンズ・ホプキンス大学で心理学、哲学をおさめる。後年、東大教授）の「哲学の変遷と新系統」（五月十八日におこなわれた「哲学館同窓会」における講演筆記）が掲載された。このなかで講演者は、たびたびヘーゲルにふれた。が、このなかにスピノザが登場する。ギリシャや近世における哲学者にしても、みな立脚地を「概念」にとり、概念といったメガネを通して人生や社会をみたもので、じっさい生活と遊離したものであった。

希臘の古賢にも、又スピノザ、ヘーゲル、カント等にも、実際の方面を疎せるにあらざといへども、実際の方面に遠かる傾向を免る、能はざりき。また論者によると、西洋哲学は概念のみを抽象して、人生を論じ、じっさい方面と相はなれて発達してきた。西洋の哲学者は、人生と宇宙とをたくみに説明して、ここに論理的に完全なる哲学系統をつくらうとしてきたようである。

而して（すなわち）スピノザの哲学は、宇宙の説明に於いて殆ど其の極（ものごとの最高）に達せり、昔時（むかし）のプラトーン、今のスピノザは、尤も（とりわけ）勢力ある、又た最もコンシステントなるものなるべし、……

朝永三十郎編『哲学綱要』（宝文館、明治35・11）は、初学者むきに著わした哲学入門書である。哲学上の一般概念とその歴史的発展を概観し、

読者をして将来、哲学史の研究にむかわせることを意図している。本書の骨格の多くは、欧米の諸家の哲学概論を参考にしたという（「序言」）。同書の「第二編 形而上学 第一章 本体論」に、スピノザの平行的一元論のことが出てくる。

論者によると、物質と精神のあいだには、相制（互いに因果の関係をなす）の作用はなく、平行の作用があるだけだという。このような立脚地によって、

スピノザは、相制論を取らず、従て物理学の根本原理に矛盾せずして、巧みに身心相関の事実を説明し、併せて一元的の本体論（根本問題を研究する学問）を立つるに至れり。

これをスピノザの平行的一元論という。

『新小説』（第七年・第一巻、明治35・11）の「答 梁川兄書」に、スピノザの名が散見する。これは後藤宙外（一八六六～一九三八、明治期の小説家・評論家、『早稲田文学』の編集者）が、綱島梁川に宛てた返書である。綱島が病床にありながら、スピノザ研究に力をつくし、スピノザを同胞に紹介する意図があることを伝えている。

後藤によると、スピノザは日本に因縁ある哲学だという。じぶんの貧弱な知識をもってみると、スピノザという哲学者は、――

自足円満、差別即平等の本体を神とする、万有神説の根本思想と云ひ、煩惱を拭払して（ぬぐい去る）心の寧静境に至るを理想とせる、寂静教（世俗をはなれて静かな境地をおしえる宗教）の如き、極めて我が大乘仏説（大乘仏教）の或点に酷肖（似）するところある亦奇縁にあらざや。

スピノザの哲学は、わが国においてははなはだ紹介の急を要するものだという。大兄はこの偉人の紹介者となるべく使命をおびて生れてきたように思われる。何よりも性格がよく似ている。「その温雅、高邁、堅忍、不拔のところ、宗教上の浅からざるところ、甚太相似し」。

綱島梁川著『西洋倫理学史』（『早稲田叢書』ちゅうの一篇、明治35年末刊行？）の「第二章 純粹哲学倫理説」に、「スピノーザ」の章節がみられる（三二八〜三三七頁）。冒頭はスピノーザの一元論について説いたものである。いわく――

スピノーザ (Benedict Spinoza, 1632-1677)

スピノーザの哲学は、一言にて掩へば、デカルトの二元論を一元論に築きかへたるものなり。前きに見たりし如く、デカルトは、没交渉の心物二元を設け、二者おのおの独立の実体を有して、相交錯干与する所あらずと説きにき。デカルトは延長（空間）を以て物の本質となし、意識（思惟）を以て心の本質となし、而して二者は、おのおの自己の方面にのみ於ける独立の因果的連鎖を有して、限りなく延びゆき、かくして竟に相交渉するの点なきものと観じき。

高橋五郎著『最近一元哲学』（前川文栄閣、明治36・9）の「第六章 問題承前」に、「スピノーザの一元主義」という章節がある（九七〜一二二頁）。

著者によると、一元哲学はユダヤ人スピノーザの筆によって、再び天下に花を咲かすしあわせとなったという。かれの一元論は、物体と想念との関係をなおいっそう満足に説明しようとした論であることを知る必要があるという。

スピノーザ教、或はスピノーザ哲学には、種々喩を容るべき処ありとは雖も、我が爾後の哲学上に影響を及ぼせることも莫大なる者あるは亦掩ふ可らず、フキヒテ、シエリング等 皆スピノーザの為に動かされたる也、嗚呼スピノーザも亦偉丈夫（すぐれた人物）なる哉、

『東洋哲学』（第一〇編・第一二号、明治36・12）の「彙報 時評——独断主義」に、スピノーザの名が何度か出てくる。論者によると、知識とは経験の統一せられたるものという。また一個人の知識体系は、そのひとの人格より自然に生じるものという。

スピノウザーの哲学は、スピノウザーの人格を離れて何等の意義なく、ライブニッツの哲学は ライブニッツを去りて何等の根底にあらざ、カント然



大西祝

り（カントもそうである）、ヘーゲル然り、吾人に於けるも亦然り。

大西祝（一八六四～一九〇〇）、明治後期の哲学者。東京専門学校「早大」や東京高師で教鞭をとったり、『六号雑誌』の編纂にたずさわったの遺稿をあつめて編纂したものは、『大西博士全集』である。『西洋哲学史』（上下）は、大西の口述を筆写した門下生のノートに、さらに大西が加筆したものである。『西洋哲学史（下巻）』（警醒社書店、明治37・1）の第三十三章は、「スピノザ」（九七～一四一頁）である。

論者はこの章節において、スピノザの人と思想の要綱をのべている。たとえば、スピノザの生涯・著書・性行——スピノザ哲学の淵源——その数学的研究法——本体——心物の関係——国家論——知性と意志との関係——スピノザ哲学の三要素などを。

『時代思潮』（第一号、明治37・2）の「時評 輓近の思想界を論じて、吾人の態度を明かにす」（犁牛＝悪人から生れたりっぱな子の意）に、スピノザの名がみられる。論者によると、われわれの心霊（魂）の活動は、つねに個性の発展を第一義とすべきという。われわれの心霊は、倫理的活動とともに他のものを求めているという。すなわち、美的活動の発現——芸術がそれである。

ゲーテは故にスピノザの靈妙的信仰を愛し、シエリングの神秘的哲理に近きたり。

『東洋哲学』（第一編・第四号、明治37・4）の「応問——哲学と倫理学との関係」に、スピノザの名が出てくる。論者によると、哲学と倫理学との関係については、古来四つほど見解があるという。倫理（道徳の判断、善悪の区別）の基礎は、哲学にあるといい、倫理は哲学的根拠から演繹したものでなければならぬ、という。

スピノザ、ヘーゲル、シヨペンハウエル、グリーンみな其れ

である。

『東洋哲学』（第一編・第八号、明治37・9）の「論説 心学を論ず」（北沢定吉）に、スピノザのことが出てくる。論者によると、ドイツ哲学を日本固有の哲学と考へてはならぬ、という。わが国にはとくべな哲学も思想もなく、あるのは、インド思想や中国思想を日本化した「折衷学」だけだという。心学（心の本体を究め、修養につとめる学問）の中心は、良心先天論という。性善説は、天人一致論の異名にすぎず、心学の立脚地からすると、悪というものが無い理屈である。

だからわれわれは、奥田頼杖（？）一八四九、江戸後期の心学者が、つぎのようにいったことをもつともだともみとめる。

スピノザのそれと同じく、「世界は丸で善ばかり」といひ、「悪も亦性と言はずんばあるべからず」、善悪は二つにして、基本は一なり、といへることの、よく心学の立脚地に合するを見る。

『警世新報』（第一〇三号、明治39・11）の「講談 宗教学概論」（芝田徹心）に、近代哲学者の「宗教」に関する定義や概念が紹介されている。フィヒテ、ヘーゲル、フォイエルバッハ、カントなどと並んで、スピノザの宗教観が説かれている。

（二）スピノザー氏——真の宗教とは人が智力によりて案出したる完全無極の者に対する智的の愛なり。されば其の完全無極の者即ち神なる者は畢竟、吾人の精神の最上の産物にして、之を愛し之を信ずるは哲学的知識を備ふる人にあらずむば能はず。

岡島 誘著『西洋哲学史』（博文館、明治39・11）は、主に十九世紀の英独仏の哲学について論じたものであるが、ヘーゲル以前における近代哲学思想を概観したものの中に、スピノザの名がみられる。

此の両派（デカルト、ベーコン）は カント以前の哲学に両々（二つとも）相對峙せし哲学上の一大戦史を形作る。総理論の流を吸むものに、スピノザの精神と物体とを唯一実体の兩属性となす抽象一元論あり（一～二頁）。



金子馬治

北沢定吉 宮地猛男 共編 『哲学汎論』 (弘道館、明治40・5) は、哲学の入門書である。が、同書の附属——「(一) カント以後の近世哲学——楽天観 (Optimism)」に、スピノザの名が二度ばかり出てくる。

彼等に従へば、世界に実存する部分的の醜悪しゆああくは、全体の完全の為め全体の善美も為めに欠くべからざるものなり。ストア派、ライブニッツ、スピノザ、ヘーゲルの如きこの立脚地の代表者なり。

ハルトマン (一八四二〜一九〇六、ドイツの哲学者) は、「人生は醜悪しゆああくのあつまるところ、不幸の巷ちよまたである」といったから、厭世論者のいうことばに真理がふくまれているという。これに反して、世界は苦痛の巷ちよまた、苦楽はわれわれの世界にあたえられた色彩であり、世界そのものは苦楽を無視する、と説く人びとがいるという。

仏教大乘家だいいじようか (仏法をとく人) の説く所、ジオルダノ・ブルノー、スピノザ等の教ふる所はこれなり。

金子馬治うまじ (一八七〇〜一九三七、明治から昭和期にかけての哲学者・文芸評論家。家まらずしく、少年のころから辛苦をなめ、傳くろままでひいて苦学した。のち早大教授) は、「理想化文芸と人生発展の観念」(『早稲田文学』第二四号、明治40・11) において、こんなことをいっている。

自然の進化

人生の発展

宇宙の進歩

といったたぐいの思想は、十八世紀末から十九世紀のはじめに起ったドイツの理想派文芸の産物だという。ことに凡神的宇宙観は、ルネッサンス

の時代に芽ざしているが、それを整然たる哲学系統に組みたてたのはスピノザであり、スピノザ哲学を再興したのは十九世紀の理想派文芸だとい
う。

スピノザ哲学は、理想派文芸の流れ出た源と評しても差支ない。

スピノザが生きた時代――

――スピノザ哲学は一概に（ひっくり返して）異端邪説として、其の名を口にするだに世間に憚（は）かられてゐた。然るに深く其の凡神観に私淑（ししよく）して所詮（ゆゑ）神は宇宙に内在するもの、人生はすなはち靈妙な神靈の発現と公言したのはレッシングである。

『東洋哲学』（第一四編・第一号、明治40・12）の「雑録 スピノザの生涯」（S・S生）は、この哲学者の薄命の生涯をつづった小文である（二〇〇～二二三頁）。論者によると、西洋哲学史上、宗教的色彩をおび、莊嚴にして深い哲理をかたり、かたい信仰と典雅なる品性をもち、その学説を尊重されたのは、十七世紀の聖スピノザだといふ。

スピノザの学説は、死後一世紀ほど口ぎたなくのしられ、理解と評価をうけることなく、死んだ犬とおなじように遇された。かれは信仰の自由をとえ、旧約聖書を歴史的に批評しようとし、神学者から嫌われた。かれが心身をかたむけて脱稿した『エティカ』は、当代の思潮に容れられぬことを知り、その出版を中止した。スピノザの遺托をうけて、その遺稿を出版したのは、友人たちであった。

『哲学雑誌』（第二四七号、明治40・？）の「哲学と時代」（朝永三十郎）は、明治四十年（一九〇七）六月に開催された哲学会公開講演のさいの筆記を活字にしたものである。論者は、このなかでたびたびスピノザに言及した。十七世紀の大物哲学者のひとりにスピノザがおり、その後の十八世紀の哲学にくらべると、その学説はひじょうに独断的、総合的であり、統一というものを重視しているという。そしてスピノザ哲学の特徴は、つぎのように約言できそうだ。

実に数理的決定論の一語はスピノーザ哲学の全体を表示する言葉であると云へるのである。

『東洋哲学』（第一五編・第九号、明治41・9）の「ヘーゲルの哲学」（戸水寛人）に、スピノーザの名がみられる。

ヘーゲルの所謂絶対はスピノーザの謂へる如き無限の本体と異り、

またフィヒテのいう無限の主観ともことなり、はじめもおわりもない弁証的過程だという。

綱島政治著『欧州倫理思想史』（杉本梁江堂、明治42・10）は、先に刊行した『春秋倫理思想史』（早稲田出版部、明治40・12）を装いをあらたにし、出版したものである。

本書のなかの「近代倫理 其一 形而上学派倫理」の第二章は、スピノーザの章節（一八三〜一九二頁）である。いうまでもなく、この章はスピノーザの倫理思想を説いたものだが、約言すると、

デカルトより来たれる唯知的要素とホッブス（二五八〜一六七九、イギリスの哲学者・政治学者）より来たれる自然論的要素と及び彼れが深奥なる一己（じぶんひとりの）の経験に基づける宗教的神秘的要素とを結びつけて無縫の一体となせるもの、

という。

わが国においては、久しくスピノーザの研究書などは刊行されることはなかったが、明治の末になって、ついに宗教哲学者・波多野精一（一八七七〜一九五〇、明治から昭和期にかけての哲学者。東京専門学校講師をへて京大教授）の『スピノーザ研究』（原文はドイツ文、警醒社書店、明治43・4）が公になった。訳者は安倍能成である。同書には――

第一 スピノーザの汎神論に於ける内在の思想……一〜九〇頁。



波多野精一

1928.6.26
Keiichi Yamamoto

東京

啓誠社書店

スピノザ研究

文學博士 波多野精一 著



波多野精一著『スピノザ研究』。〔筆者蔵〕

第二 スピノザが性の平行論及び其の認識論……九一〜一三五頁。

など、二篇の論文がおさめてある。

明治三十七年（一九〇四）——東京帝国大学大学院において、近代哲学史の研究に従事し、五年後に、博士論文としてドイツ語で提出したものである。ドイツ語の原題は、不明であるが、第一（章）は、*Der Immanenzgedanke im Pantheismus Spinoza's* であることがわかる。

著者によると、本稿はスピノザ哲学の特殊な点について、論理的分析をほどこしたものであるという。スピノザ哲学の全体系について、心理的または歴史的解釈をあたえることができず、これは準備的研究にすぎないという。これを書きおえ、歳月を経るにしたがって、「その研究のいかにも幼稚（未熟）なるを覚え、これを公にするのあまりに厚顔ならむかを恐る（あつかましいとおもわれるのではないか）」といった懸念があり、本書の刊行にためらいがあったようである。

しかし、当時西洋の哲学者についての比較的精細なる研究成果がすくなかったことを思い、わが国の幼稚なる哲学界には、このような幼稚な研究でも、多少貢献できるのではないかと考え、出版に踏みきったという（「序」）。

著者は、じぶんの研究書について控えめにいつているが、当時このような着実な哲学史の原典研究はめずらしく、ことにドイツ語で書いた論文は空前絶後であった。著者は大学ではフォン・ケーベル博士に師事し、哲学史を専攻し、原典と参考文献とをひろくあさった。東大を出た翌年

● 投ッ放しにされた論文

—スピノーザ哲學で賣出した

◇波多野博士京大教授になる

過般の早大紛擾事件を概して同校教授を職したる文學博士波多野精一氏は四日附を以て京都大學教授に任命せられた博士は信州の九極めて

△地味な

眞面目な純學者肌の人であつて餘り社會に周知されて居ないが博士は今より十餘年前「スピノーザ哲學の研究」と題する博士論文を東大文科大學に提出し

△困難

されて居るスピノーザの哲學を如何にも精細周到



△持て餘

して了つて仕様事なしに三四年の間其儘放置り放しにして置いたが結局その論文を衛達兼 府 かの大學へ送つて考査を依頼してやつた處が何が倍自負心の

に研究してあるので「是は實に容易ならざる偉い學者だ」と孰も今更の如く驚嘆して其論文を王立哲學者の機關雜誌に掲載し是に對し各國の學者教授等が盛んに批評を加へて以て其の辭を呈し遂に世界の學界に聲名を走せたので我文科大學でも今は捨て置き、唯大周章で文學博士の學位を與へる事になつたと云ふ談話がある

京大教授に転任する波多野と「スピノーザ研究」のことを報じた記事。
（『東京朝日新聞』大正6・12・5付）

—明治三十三年（一九〇〇、当時二十三歳）—東京専門學校（現・早稲田大學）の講師となり、大正六年（一九一七）の「早稲田騒動」のさい、京都帝國大學教授に転任し、宗教学講座を担当した。

著者が書いた二つの論文は、純粹に理論的考証的研究だという。両論文は密接不離の關係がある研究であるという。汎神論はたんに抽象的実体にならずして、無限の性様を包容合体できるか。また精神と広がりとを二様の性としたら、いかに平行してかつ本体（本質）に合一できるか。その間の認識はどのようにしたら可能か。著者の両論文は、これらの間に答をあたえたものという（『スピノーザ研究』の書評

—『哲学雜誌』第二五卷・第二七九号所収、明治43・？。

波多野の「スピノーザ研究」と同人の京大転任について、『東京朝日新聞』（大正6・12・5付）は、なかなかおもしろい記事をのせている。うそかまことか、十余年以上もまえに書いた博士論文「スピノーザ研究」は、ぜんぶドイツ語で書いてあり、また内容も複雑であつたので、時の文科大學某大學博士ももて余してしまい、三、四年ほどほったらかしておいた。が、のちにライプチヒ大學に送り、考査を依頼した。ドイツ側は、（なアに日本人の研究なんか、高がしれている。どうせろくでもないものであろう……）

と、いった調子で、さらに三、四年ほったらかしにした。

研究であることがわかり、いまさらのごとく驚嘆した。

やがてその論文は王立哲學會の機關誌に掲載され、批評や賞賛をうけるようになるや、東大のほうでもそのままにしておけなくなり、あわてて文學博士の學位をあたえることになった、という奇談である。

朝永三十郎（一八七〇―一九五一、明治から昭和期の哲学者。大谷大学教授をへて京大教授）の「シヨールペンハウエルの哲学」（『倫理講演集』第一〇二号、明治44・2）に、スピノザが引きあいに出されている。

スピノザによると、空中に投げだされた石に、意識というものがあるとすれば、石のなかで活動する重力は、人間が意志とみとめるものと異なるところがないという。もし石に認識力があるとすれば、人はその重力を意志として認識すべきである。石の落下もまた意志の表現でもある、という。

スピノザの目的は 人間の行動を石の運動と同視せんと欲するにあり、

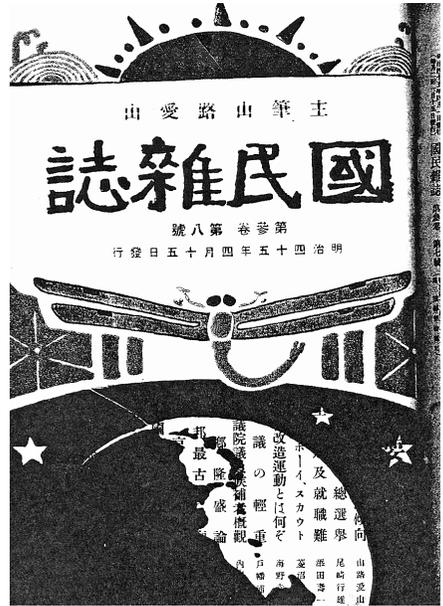
という。

『東洋哲学』（第一八編・第六号、明治44・6）の「スピノーザ」（得能文）は、スピノザの性向と思想の由来を説いたものであり、単独のスピノザ論（七〇―一六頁）である。論者によると、スピノザの性向（性質の傾向）の一端をうかがうことは、かれの思想を会得するよすがとなるといえる。

スピノザは当時の宗教界の狂熱をきらい、つねに沈思冥想をこらし、人間の本質と位地について独特の思考をねりあげた。かれの生活は、寒儒（貧しい学者）のそれであった。ひじょうに質素にくらし、談話は温和であり、くらいところなく、また快活なところもなかった。金銭にはきわめて淡泊であった。かれの生活は、その思想の通りであった。

デカルトの思想を發展せしめたるのみでは無く、種々雑多の要素がスピノーザに這入って居るのである。

加藤弘之著『自然と倫理』（実業之日本社、明治45・3）の「第二章 自然的宇宙本体及び自然的宇宙観と自然的倫理観」に、スピノザの名が散見する。著者によると、余が採るところの宇宙観は、スピノザが唱道したものを継承したエルンスト・ハインリヒ・ヘッケル（一八三四―一九一九、ドイツの医学者・生物学者・哲学者）の一種の宇宙本体主義という。スピノザは、宇宙本体を物の心の合一体であると説いた。物は拡張し、



『國民雜誌』（明治45・4）

といふようなものになるのである。

『國民雜誌』（第三卷・第八号、明治45・4）の「たみのこえ民之聲——あたらし新しければ真理なりと思ふ迷信」に、スピノザの名が引いてある。論者によると、宗教や哲学の新説といっても、旧説のむし返しが多いという。ショーペンハウアーやハルトマンの哲学は、いつとき人心をさわがせたが、奇説ではないという。

哲学歴史の上より言へばカント。スピノザ。ヘーゲルより お人間思想の発展したる順序に於て 自然に達すべき一種の結論にして 実まは古典の中にも そのよう其様な考の輪郭だけは存在したるものなり。

『東洋哲学』（第一九編・第五号、明治45・5）の「真理の問題に関するオイケン教授の説」（いづ得能文）に、スピノザの名がちらほら見られる。論者によると、思惟（思考）は、人間を世界の生活に關与せしめて、真理に到達せんとする自由な創造的努力だという。

心は思惟する本性を有していると考えた。

ヘッケルはスピノザがいう心を高等動物や人間の心神を指すのではなく、唯無意識感覚と説いた、という。

デカルトもスピノザとおなじように本体説をと考えたが、デカルトの場合、ままず神というものが存在し、その神が心物合一体を創造したと考えた。だからスピノザの本体説とはまったくちがうという。

換言すれば、スピノザ氏の所謂本体は 真実絶対的の本体であるけれども、デカルド氏の所謂本体は それではなくして 全く第二次の本体、即ち所造的しよぞう本体

スピノザは内在的に考へて、宇宙精神（思惟）は、直接吾人の精神中に現れてゐると考へてゐた。

という。

『哲学雑誌』（第二七巻・第三〇〇号、明治45・12）の「プラグマチズムの後」（田中喜一）に、スピノザ哲学のことが少し出てくる。

スピノザの哲学には系統があつたが、ロックにはそれがない。ロックにはたゞ批判の方法があつただけである。カントの努力は哲学を批判の方法としようとするにあつたが、ヘーゲルは再び哲学を系統の様式（じきもど）に引戻した。

〔大正期〕

桑木厳翼著『哲学綱要』（早稲田大学出版部、大正元・12）の「後編 現代の哲学 五 哲学方法論断片 三 一と多」において、著者はスピノザの本体と属性との関係にすこしふれている。

近世哲学史上、一多の關係に就（い）ての難問を最もよく表示したものは、スピノザの原体と属性との關係の説明である。而して上（じようき）來の所説は、結局スピノザ説がカントの批評哲学とならねばならない、といふことを示したのである。

久保良英
宇井伯壽 共訳『哲学概論』（弘道館、大正2・1）は、ウィーン大学教授ウィルヘルム・イエルザレム（一八五四～一九二三、ドイツの哲学者）が著わした『哲学入門』*Einführung in die Philosophie*（一九〇九年、第四版）を訳したものである。同書にスピノザの名がみられる。

要するに実体一元論は、エレア学派とスピノザとに於てのみ最も厳密に論ぜられ、シェリングとヘーゲルとは之に發展に思想を加へ、而かもシェリングは實際的變化の意味に於てし、ヘーゲルは寧ろ發展を以て概念の自己發展と解したり。

『倫理講演集』(第一二八号、大正2・4)の「噫 スピノザ!」(鷲尾正五郎)は、スピノザの人と思想についてのエッセイであり、論者によると、スピノザ哲学の批評や紹介ではなく、この絶倫の哲学者にたいするわたし個人の感想だという。これは講演を活字にしたものであるから、読みやすく、理解しやすい。ともかくこれは長編論文である(一六〇三七頁)。

スピノザの一生は、自然にたいする敬虔な精神と社会にたいする超然たる態度とを二つの特色にしているという。スピノザ哲学は、かれの性格そのものの発表である。スピノザが「神」といっているものは、大自然の因果律のことであり、かれが「愛する」というとき、それは理解するとか観するほどの意という。

人生は自然の一部であり、自然の理法の圏内にある。人間は各天賦の性癖と境遇をうけて、喜怒哀楽の現世において、露のような一生をおくる。その一生は、さまざまな葛藤(あらしい)の道であるが、人や世をうらまず、避けがたい運命としてうけ入れるのが達人(ものの道理に通じた人)の道という。また――、

スピノザは己れの知識や独創や人格を誇るやうな人ではなかった。哲学者たる自分も農夫たる匹夫(ひつぶ)身分のいやしい男もおなじ、自然の産物で、大自然の目から見れば等しく大海の一滴である。

論者はほかに、人道主義・因果説・道德観・靈魂不滅説などについても語っているが、人の一生は真理の一面をしめすほどのものでなければ、後世に伝える価値がないという。

『哲学雑誌』(第三一五号、大正2・?)の「雑誌 スピノザ哲学に於ける統一の觀念に就いて(承前)」(小尾範治)は、単独のスピノザに関する小論(未完)である。本稿の論旨はつかまえていくいが、スピノザが神と自然との統一を立証するために持ちだした他の証明のことか……。

鹿子木貞信(かこぎのぶ) (一八八四〜一九四九、明治から昭和期の哲学者。海軍機関学校出身の元海軍中尉。のち哲学を専攻し、慶大・九大教授を歴任。ナチスドイツに招かれて「皇学」を講じた。太平洋戦争中は、「言論報国会」の事務理事。A級戦犯)の講演筆記(「哲学の使命」)が『倫理講演集』(第一三七号、大正3・1)に掲載された。

論者はこの小論のなかで、世界の潮流――民主主義について説いたほか、人生さいごの価値を確立する哲学的精神をどこに求めるかについて語

っている。それは換言すれば、絶対的信仰でもあるが、プラトンもソクラテスもデカルトも、神にたいする信念に置かざるをえなかったという。

而してSubstantia（実体）とはスピノザが凡ての哲学的思想を築いた形而上学的土台であります。

従来、哲学史を著わした者の多くはドイツ人であり、英米の学者の手になるものはひじょうに少なかった。

ロージャース原著
藤井健治郎 合訳
北 吟吉 合訳
『西洋哲学史』（富山房、大正3・2）は、アメリカのロージャース教授（不詳）の *Student's History of Philosophy* を訳したものである（「訳者序文」）。

同書の「第三編 近世哲学」の第二十九章は、スピノザの章節である。「スピノザの純理哲学」と「解脱説」について論じられている。

『倫理講演集』（第一三八号、大正3・2）の「近世に於ける我の自覚史（一）」（朝永三十郎）に、スピノザの名が三度ほど出てくる。論者によると、理性の権威とか知性の上位は、カント以前の代表的哲学者が共通してもっていた信条だという。

ベーコンに取ては、知は自然を克服利用する力を人類に与へるといふ意味に於て「知は力」であつた。スピノザに取ては、知は世界及び人生の本性を明かにして、情念の繫縛よりして吾々を解脱せしめるといふ意味で「知は力」であつた。

またわれわれの生活において、もっとも正確に、もっともはっきり指導規正できる部分は、純粹思考であるという。もっとも困難なものは、感情生活である。

此主知的の傾向は、スピノザ哲学に於て、明確な形を取て現はれて居る。スピノザによれば、吾々の情念は凡て不徳である。単に増悪嫉妬憤怒等のみならず、恋愛も恐怖及び希望も憐愍及び懺悔も不徳の中に数へらるゝ。人間唯一の徳は知である。此知の力に依て初めて吾々は、是等の情念即ち不徳の繫縛を脱して真の自由又は解脱を得る。

論者は同誌の第一三八号（大正3・3）に、続き「近世に於ける『我』の自覚史（九）」をのせているが、このなかにふたたびスピノザが出てくる。スピノザの神秘説や解脱説にふれている。

スピノザ哲学は猶太教徒に通用する（共通してもっている）神の愛慕神性の憧憬を以て終始一貫して居るといふ点に於て最も神秘的精神に富める哲学の一である。殊に其結末たる解脱観は神人冥合の妙境、忘我の法悦を説いて全哲学体の局（おわり）を結んで居る。併しスピノザは神秘説の他の契機、即ち只管（ひたすら）自己に還没沈潜して真理を自己内に求むるといふ契機を閑却して居る。彼の直接の考察の対象は自己に非ずして世界であつた。

桑木巖翼著の『五大哲学者』（金尾文淵堂、大正3・3）は、デカルト・スピノザ・カント・フィヒテ・ニーチェなど五名の著名哲学者をえらび、その人物と学説、自我問題などについて叙説したものである。「第三回 スピノザ」（一〇七―一四九頁）は、長編論文である。この章節において、理性主義の難点——和蘭の猶太人——スピノザ——自我の客観化——理性主義と情緒などについて論じられている。デカルトは自我をみとめ、スピノザは自己と他者との関係を説き、そこに自我の理由をみとめた。

「和蘭の猶太人」において、著者はスピノザの生涯のおもな点——そのユダヤ人気質や学校教育、エピソードなどについて語っている。著者によると、スピノザの一生を通じて現われているものは、

宗教的情緒

理性主義（感情に走らず、道理にもとずいて考えたり判断したりする立場）

であるという。そして――、

スピノザの性格にも学説にも此和蘭気質と猶太人の宗教心との二者が能く現れて居ります。スピノザの学説は総てを理から説かうと云ふので純粹

の理性主義であります。然し又一方から言へば其の学説は宗教上の情熱に富んだ、自己の告白のやうなものである。或人が之を名づけて神に酔へる無神論者と云つて居るのも至当であります。

宮地猛男著『哲学とは何んぞや』（応来社書房、大正3・7）は、やさしいことばで書いた哲学入門書といえる。従来、哲学書といえ、形而上学にかぎられていたが、本書では心理・論理・倫理・美学・社会学など、精神科学のすべてを加え、さらに哲学史の概要をも記述したという（『本書の特色』）。

同書の「九 哲学史の概要」の「4 近世哲学」に、スピノザの名がみられる。著者によると、近世哲学の特色というのは、新旧の両観念がいりまじっていることである。

近世哲学の標榜する所のものは、その自由討議と簡人性の發揮であつた。デカルト。スピノザ。ライプニッツ等は悉くこの簡人的理性の上に、其学説を建てたものだ。この種の学説を称して 吾人は合理派と云ふ。 (一一三―一二四頁)

『東洋哲学』（第二編・第八号、大正3・8）の小論「スピノザよりヘーゲル」（紀平正美）において、論者は哲学的發展と系譜にふれ、

スピノザよりヘーゲルに至る間には、ライプニッツを要し カントによって転回せしめられ（方向をかえられ）、フィヒテ及びセリングを経なければならなかつた

という。

『倫理講演集』（第一四四号、大正3・8）の「近世に於ける『我』の自覚史（二六）」（朝永三十郎）に、スピノザの名がみられる。

デカルト、スピノーザ、ライブニッツ等の形而上学説は皆な、物体界より類推して宇宙をば考察したといふ点に於て相一致する。

伊達源一郎編輯『代現叢書 オイケン』（民友社、大正3・9）に、スピノーザのことが出てくる。ルドルフ・オイケン（一八四六〜一九二六、ドイツの哲学者）は、スピノーザの汎神論の影響をうけたといい、オイケンもスピノーザも――、

そのた其他種々の点は於て（……）互にけいじょう契合せる（ぴったり一致する）ところ多し。

という。

大西 祝の遺稿をまとめて編纂したものは『大西博士 全集』であるが、その第三・四巻は『西洋哲学史』（警醒社書店、大正3・10）である。同書の「近世哲学」の第三十三章は「スピノーザ」（三八四〜四一三頁）である。この章節のなかに、スピノーザの生涯・著者・性行、かれの哲学の淵源、本体（神）、心物の関係、感覚の性質、善悪や美醜の論、個性と意志との関係、国家論、スピノーザ哲学の三要素など――人と哲学の全体像が描かれている。

著者の観るところ、スピノーザという哲学者は、ヨーロッパ近世の哲学史上、“異様な光彩を放てる思想家”であった。かれはながい間神学者たちに嫌われ、名高き無神論者のレッテルをちょうだいした。

スピノーザ哲学の立脚地は、デカルトにあり、その後だんだんじぶんの見地（論断の立脚点）をひらくようになった。著者によると、スピノーザ哲学には、三つの異なる要素がみとめられるという。

第一……自然論風思想であり、ホッブス（一五八八〜一六七九、イギリスの哲学者）から学んだところが大きい。

第二……デカルトを源泉とする主知論（経験や感情的なものよりも、知性的、合理的なものを重視する立場）の要素。おもに知識論や形而上学においてみとめられる。

第三……神秘的である。スピノーザの元来の宗教的傾向。

日本思想史を学問として定着させた篤学の士——村岡典嗣（一八八四～一九四六、明治から昭和期にかけての歴史学者。開成中学より、早大文学部（哲学専攻）に進む。広島高師をへて、東北大学教授）は、日本思想史研究でその名を知られているが、ドイツ語からの訳書もある。題して『ヴィンデルバント 近世哲学史 第壹 近世初期の部』（内田老鶴圃、大正3・11）という。

これはヴィルヘルム・ヴィンデルバント（一八四八～一九一五、ドイツの哲学者。一九〇三年以来、ハイデルベルク大教授）が著わした *Die Geschichte der neueren Philosophie in ihrem Zusammenhang mit der allgemeinen Kultur und der besonderen Wissenschaften*（『近世哲学史——一般文化および初級特殊科学との関係においての』一八九九年——ライプチヒ刊 第二版）を反訳したものである。

同書の「第四章 仏蘭西及び和蘭に於ける主理説」の第二十六節は、バルッフ・スピノザである（四四八～五二四頁）。ヴィンデルバントのこの章節は、スピノザの生涯とその思想の概略をのべたものと解される。著者はスピノザの学系の特徴をしめくくって、つぎのように述べている。

その思想、即ち、神の愛てふ神秘的思想に於いて、その結末を得た。幾何学的方法の全装置と、純理論的演繹の重々しい歩みとは彼にとつてはたゞ完全なる神の認識に対する、かの宗教的思索の念を、静める為めの方法であつた。即ち、彼の学系の唯一の特質は、主理説を、神秘主義の為に採り用ゐたこと、宗教的感情の聖なる衝動を、思想の極めて峻厳な明晰と判明とによつて、満足させようと欲したこと、存する。

『哲学雑誌』（第三二九号、大正3・？）に、鹿子木員信の「哲学的精神——スピノザ」（三七七～七二頁）がのっている。スピノザに関する単独の長編論文である。これは大正三年（一九一四）五月十七日におこなわれた「哲学会春季大会」における講演筆記を活字にしたものである。論者がこのなかで語っているのは、孤独寂寥の思想家——スピノザの人と思想である。論者の観るところ、スピノザの哲学は、生命の哲学——肯定の哲学——自由断行の哲学であつた。論者はスピノザの生いたち、破門、心霊とのたたかい、哲学的思索の生涯、遺作について語り、さいごはつぎのようなことばで講演をむすんだ。

此の崇高にして雄大、恰も玲瓏たる水晶の山の如きスピノザの思想の峯を攀ぢんと試み、試み終つて之を顧み、私は衷心忸怩たらざるを得ないので

あります。併しひか仮令よし私は之を攀よづるに失敗いたしましたにせよ、スピノザの思想は依然としてその朗ほらかなる姿を我等の心の地平線に起して我等の精神的健脚を之れに試まむるを待つて居るのであります。

嘗かつてゲーテ、スピノザの『倫理』を読み、その感想を述べて申しますには、此の書を熟読し、自ら顧みて、余は嘗てか程まで明かに此の世界を見し事はかりしを覚へた、と。

『倫理講演集』（第二五〇号、大正4・2）の「独逸思想と軍国主義」（朝永三十郎）に、ヘーゲルやスピノザが引きあいだされている。論者によると、超個人主義的国家主義・軍国主義を、その哲学体系の内容としたのは、ヘーゲルだという。スピノザは、約一世紀のあいだ異端邪説の汚名をうけ、迫害の的になっていたのだが、十八世紀の末になって――、

独乙詩人の間に復興されたスピノーザ哲学と結付いた結果、絶対的唯心論に発展して、国家に超個人的意義を与ふべき基礎を供給したことである。

鹿子木貞信は、大正二年（一九一三）の秋十月中旬より翌年春一月のすえまで、慶応義塾大学において、「文明と哲学」の題のもとに、十回講演したが、そのときの講演原稿に手を入れたのが、鹿子木貞信著『文明と哲学的精神』（慶応義塾出版局、大正4・12）である。

第六回目の演題は、「スピノザ」であったが、本書においては「孤高のスピノザ」（一九一―二四〇頁）となっている。これは長編論文である。著者はこのなかでスピノザの生いたち、育った環境、その哲学的精神、述作とその特色について述べているが、スピノザの思想の峰みねをよじのぼろうとしたものであった。

朝永三十郎著『近世に於ける『我』の自覚史——新理想主義と其背景』（宝文館、大正5・1）は、講習会における講演のメモ、『倫理講演集』『哲学雑誌』などに発表したものを修正増補して、一書としたものようである。このなかにスピノザのことがたびたび引きあいに出されている。スピノザ哲学の特色については、つぎのようである。

スピノーザ哲学は猶太教徒に通有なる神の愛慕、神性の憧憬を以て終始一貫して居るといふ点に於て最も神秘的精神に富める哲学の一である。殊に

其結末たる解脱観は、神人^{めいじう}冥合の妙境、忘我の法悦を説いて、全哲学体系の局を結んで居る。併しスピノザは神秘説の主要契機、即ち唯々^{ただただ}自己に還没沈潜して、真理を自己の内に求むるといふ契機を閑却して居る。彼の直接の考察の対象は、自己に非ずして世界であつた。

『哲学研究』（第一巻・第六号、大正5・9）の「フィヒテの宗教哲学の発展」（朝永三十郎）に、スピノザの名がちらほらみられる。フィヒテ（一七六二〜一八一四、ドイツの哲学者）は、その宗教観においてスピノザ学徒ではなく、ライブニッツ（一六四六〜一七一七、ドイツの哲学者、数学者）のそれに近いものであった。

神の原的思考が各の変化の第一原因であるといはば、明かに神に人格を否定して、実体の一元論を説くスピノザの思想でなくしてライブニッツ説に近い。

『哲学研究』（第一巻・第八号、大正5・11）の「フィヒテの宗教哲学の発展（完結）」（朝永三十郎）に、スピノザのことが出てくる。論者によると、デカルトやマルブランシュ（一六三八〜一七一五、フランスの修道僧、哲学者）の神の観念は、

スピノザの神観、汎神論的世界観に発展したが、フィヒテの神の観念も亦、全然同様の経路を取って発展した。フィヒテが伯林期に於て、スピノザに近ずいたと称せらるゝ、重要点の一はこれである、唯スピノザが永遠の秩序を自然論的に考へ、フィヒテは之を道德的に考へた点に顕著なる対照がある。

『東洋哲学』（第二四篇・第一号、大正6・1）の「材能態度の類型差異を論じ 生命終息曲線に及ぶ（一）」（下沢瑞世）に、内外の著名な哲学者十数名の人物的特徴をみるが、そこにスピノザが登場する。

スピノザ (一) 中脊多病にして特に肺を患ふ。(二) 節食なり。(三) 眼鏡の玉磨き巧みなり。(四) 一室に閉居し 三ヶ月も屋外に出でざるとあ

り。(五) 知覚は過敏なり。(六) 冥想直覚を主とし 神秘なる啓示を以て思弁の法とす。(七) 遠慮勝ちなり。(八) 孤立的なり。(九) 宗教的感情強し。(一〇) 絵画の趣味を有す。(一一) 蜘蛛の戦闘を悦ぶ。(一二) 克己心強く禁欲的なり。(一三) 意志強固なり。

出 隆(二八九二〜一九八〇、昭和期の哲学者。アリストテレス哲学の研究者。青山学院大・東洋大学教授をへて、東大教授。戦後、日本共産党に入党)の「スピノザ哲学に於ける認識問題」『哲学会雑誌』第三六八号、三六九号、三七〇号、三七二号、大正6・?〜大正7・2)まで四回にわたって連載した。当時のわが国におけるスピノザ関連の長編単独論文としては、古今無類のものである。

論者が本稿において論じようとしたものは、本体(神または自然)と現象(感覚や経験の世界)——他面からみれば超越性や内在性の問題であるという。論者はまずスピノザに独特なる方法を検討し、スピノザ哲学の真意をみつ、本体と現象の諸相、神と個物(感覚で認識される一つの対象)の二元的対立をみ、さいごにこの対立するゆえんを考察したものである。

ヘフディング著 北 吟吉訳 『近世哲学史 上巻』(早稲田大学出版部、大正6・12)の「第三編 大組織」の第五章は、スピノザの章節である(三八二〜四三四頁)。著者はこの章で——スピノザの伝記と特性——認識論——体系の基本概念——宗教哲学——自然科学と心理学——倫理学と国家学について論じている。

このうち宗教哲学についていえば、スピノザの哲学が当時の宗教観とどのような関係があったのか。

スピノザに従へば 神と物質とは同一であると云つてゐる。即ち石も泥も鉛も霧も皆物質であるから、それ等はすべて神である。故にスピノザは「不潔な汚穢な無神論者」であると。これが実に十七世紀の論難文(非難し攻撃する文章)の一小標本である。

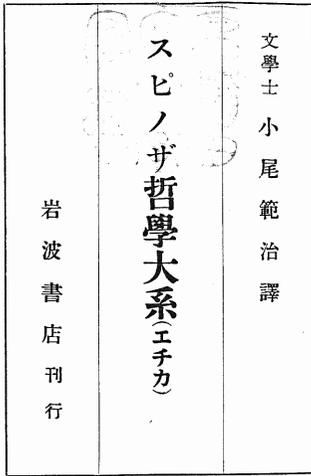
『哲学雑誌』(第三三卷・第三七二号、大正7・2)に、「スピノザ哲学に於ける認識問題(完)」(出 隆)がのっている。論者によると、神は要求され、体験されるものだという。しかし、スピノザによると、神は一種の知力をもってすれば、認識されうる実在だという。論者は本稿において、この知力とか認識とはいかなるものなのか、またいかにしてわれわれに可能かを論じようとした。

スピノザの名著である『哲学体系（エチカ）』の反訳が刊行され、岩波文庫に入った。訳者は小尾範治（一八八五～一九六四、の小樽高等商業学校教授）である。題して『スピノザ 哲学体系（原名 倫理学）』（岩波書店、大正7・3）という。明治期以来、スピノザの述作の翻訳はまだ刊行されなかったが、これはその嚆矢となるものであった。

本書は Otto Baensch のドイツ訳（この版本は、エティカへのすぐれた序論と注解で知られている）を序本とし、本文のほか「スピノザの生涯及び思想発展」の一篇をそえた。

訳者は 同年四月、同書の菊版（たて22センチ、よこ15センチ）を刊行した。『スピノザ哲学体系（エチカ）』（岩波書店、大正7・4）がそれである。これは五〇〇頁もある大著である。訳者は前半部において、スピノザの生涯とその思想的発展をしるし、後半部をスピノザの名著「哲学体系（エチカ）」の反訳にあてた。伝記の部分の材料は、ドゥーニン・ボルコヴスキの『若きデ・スピノザ』（Duin-Borkowski: *Der junge De Spinoza*）と、クローノー・フィシャーの近世哲学史第二巻（Kuno Fisher: *Geschichte der neuern Philosophie 2*）および、その他数種の哲学史を参考にしたという。

スピノザの生涯については、「確実なる記録に乏しく」、われわれがかれの生涯について何かしるすとき、何に依拠してよいかこまるばかりか、かれの思想的展開についても学者のあいだで議論がうまくまとまらずにいる。『エティカ』の反訳のほうは、オット・ベンシュとシュテルン・スタインによるドイツ語訳を底本とし、疑義あるときはラテン語の原本と英訳を参考にし、まちがいのないようにしたという（「序」）。本書の内容は、つぎのようになっている。



本邦初のスピノザの翻訳。
[早稲田大学中央図書館蔵]

スピノザの生涯及び思想発展

- 第一章 家庭及び学堂時代……………
 - 第二章 研究及び葛藤の時代……………
 - 第三章 孤独及び述作の時代……………
- 哲学大系（エチカ）
- 第一部 神に就て
- 一～一三三頁

第二部	精神の性質及び起原に就て……………	
第三部	感情の起原及び性質に就て……………	
第四部	人間の屈従、或は感情の力に就て……………	一三五～五一〇頁
第五部	悟性の力、或は人間の自由 <small>に就て……………</small>	

明治から大正のこの時期にかけて、わが国の哲学徒は、スピノザについていろいろ講じ、諸雑誌や自著のなかでふれ、ときに公衆にむかって人と哲学について話をしてきたが、スピノザの著作の翻訳は、皆無であった。しかし、小尾は難解なエティカの反訳に挑戦し、ぶじその業をおえた最初のひとといえる。

『六合雑誌』（第四五五号、大正7・7）の「宗教と人格」（帆足理一郎）に、スピノザのことが出てくる。論者によると、プラトンの至上善、スピノザの実体、ヘーゲルの絶対観念——かれらが考えた宇宙の至高者（神）は、人格的なものより、仏教でいうところの真如（万物の本体であり、絶対不変の真理）のように、非人格的のものという方がちかいかいという。

柴田安正
綾川武治
香原一勢
『スピノザの考えによると、万物は神のほかに独立して存在せず、神が万物の内在的原因、能産的自然であるという（二二〇頁）。

帆足理一郎（一八八一～一九六三、大正・昭和期の哲学者、早大教授）が執筆した『哲学概論』（洛陽堂、大正10・3）は、著者の人生哲学をのべたものでなく、哲学研究を志す若者のための入門書であるという（「序」）。本書の核となったのは、ワセダにおける講義であった。

同書の「第四章 形而上学 第二節 実体論」に、実体一元論の歴史やスピノザの一元論のことが出てくる。スピノザは宇宙すなわち神の思想に達し、神を唯一の実体（不変の本質的存在）とみなしたのである。

スピノツァの一元論。スピノツァは此種の一元論の代表的哲学者である。彼はデカアトの所謂延長（物体）及び思想なる二元論を押し、此二者を単に

属性として持つてゐる神を唯一の実体であると主張した。人間及び其他の森羅万象は、皆此唯一実体の現象的表現の一樣相に過ぎない。

『哲学雑誌』（第四一九号、大正11・1）の「近世哲学に於ける自然主義対理想主義の抗争」（小尾範治）に、スピノザのことが出てくる。論者がここでいう「自然主義」とは、存在を第一義とし、価値（精神行為の目標とみなされるもの）をそれより導びこうとする見地である。「理想主義」とは、価値をもって根本原理あるいは基本要要求となし、存在をこれより説明しようとする意のようである。

論者によると、自然対理想の対立は、自然対価値の対立となる。

スピノザの汎神論的自然主義の承継者の一人は、人の知る如く、ゲーテであつた。エテイカに接すれば、駘蕩たる（のどかな）微風の身辺をそそぐを覚えると云つたゲーテは、其の自然主義的思想、汎神論的神観に於てスピノザ哲学の精神を体得せるものである。たゞスピノザが厳密なる論理的過程に於て展開したものを、ゲーテは詩に由て表現したのである。

『倫理講演集』（第二三四号、大正11・2）の「カント以前の道徳的感情論」（島本愛之助）に、スピノザの名が散見する。論者はカントの倫理説——その道徳感情説にスピノザの影響があることを無視できないという。

就中カントの道徳感情説は、デカルト、スピノツア、ライブニッツ乃至はヤコビの思想の影響と共に、之の自然神学の一般的に力強い影響を閑却することは出来ないと思ふのである。

高木八太郎著『東西思潮講話』（共益社、大正14・2）は、大別すると、「上 東洋思潮」と「下 西洋思潮」からなるが、「下 西洋思潮」の「三 近代の思潮」に、「スピノザの哲学」の章節がある（五一六〜六五四頁）。

本稿は——スピノザ哲学の淵源——スピノザ哲学の出発的本体の觀念——本体即神——本体の性、心と物——心物の關係——物理学——心理説——国家論——倫理説——要約——などから成る。論者によると、スピノザの哲学は、まずデカルトに刺戟され、自家独特の新見地をひらいてい

ったものと見るが至当であろうという。

しかし、スピノザの思想には説明を要する難点が多く、またその学説には反対をとなえる者が多かった。

基督教徒もデカルト学派も彼を憎み、凡ゆる迫害を加へたに拘らず一世紀をへだて、ドイツの哲学界芸術界に復活し、レッシング、ゲーテ、シェーリング、ンユライエルマツヘル等の人々の魂を動かしたのであつた。そしてこの点から考へて見ても、兎に角彼が偉大な哲学者であつたといふことが知られるのである。

橋本文書著『哲学の要領』（宝文館、大正14・3）は、第一篇 哲学の概念 第二篇 本体論 第三篇 認識論 第四篇 価値論綜収結などについてすべてある。

本書の「第二篇 本体論」の「具体的絶対論（汎神論）」において、シェリングの哲学について論じたとき、スピノザを引きあいに出している。彼れ（シェリング）の哲学はスピノザの哲学の如くであるが、スピノザが心を物に従属せしめたるに對し、彼は寧ろ自然を精神に従属せしめ又彼れはスピノザにない發展の思想を有して居た。兎に角彼れの哲学は絶対を現象の中に見出したのであるから 具体的絶対論である。

鈴木龍司著^{『代』}『哲学概説』（右文書院、大正15・5）の第六章は、「スピノザの哲学」（五四〜六八頁）である。論者がこの章節のなかで述べていることは、スピノザの生い立ち、ユダヤ社会における教育、宗教的思想家としての特質、スピノザの宗教の本質と学説の性質などである。しかし、スピノザの哲学の方法には、欠点があることを指摘している。

スピノザの哲学はいふまでもなく偉大なものである。特にその宗教的なることに於てわれらに感化を与へることが多大である。けれども一層精密に觀察すると、その根底に於て甚だ重大なることが見のがされてあることもまた否むことは出来ない。例へば、彼は一切の存在及び出来事が 実体の概念からひき出すことの出来ること、空間といふ概念の上に幾何学上の定理が やすやすと引き出すことの出来ると同様であるとし、幾何学の方法によつ

て証明された彼の哲学は幾何その定理と同様に確実なる論証力を持つてゐるものであると考へた。けれども、幾何学といふやうな自ら与へた定義を基として打立てられる学問と、哲学のやうな絶対的な学問とは之を同一の方法に於て取扱ふことは出来ない。これたしかにその当時に流行した数学的唯理論の弊をうけてゐるところである。

加藤玄智著『東西思想の比較研究』（京文社、大正15・9）は、世界人類の思想史、全人類の精神生活史、古今東西における人類生活の内面史といった性質の書物のようだ（「序」）。同書の「第二編 欧州思潮の主要素と其史的研究法」に、スピノザのことがすこしふれてある。著者によると、スピノザの哲学方法は、合理論すなわち唯理論のさいたるものという。

しかし、デカルトやスピノザの立場をもつてしても、われわれが物を認識するという認識の事實は、真に説明されていないという。またスピノザの一元哲学にしても、一元である本体とそれが現われて来ている現象世界との関係を考えることがきわめて抽象的であるという（いわゆる「抽象的一元論」がこれである）。

現象と本体との関係上スピノザの立場からすれば現象は寧ろ現象といふよりも仮象といはなければならず、現象とは實在の大海中に生滅し出没する泡沫に過ぎないものになつてしまふのであつて、其処にもスピノザ哲学の欠陥は存して居るのである。

浜尾俊治著『通 哲学講話』（大盛堂書店、大正15・10）は、やさしく説いた哲学論である。本書の「第三章 近世哲学」や「第四章 経験的認識論」に、スピノザのことがすこし出てくる。その生まれと哲学の一斑についてはつぎのようにある。

スピノザ

スピノザは、一千六百三十二年、和蘭に生れた人で、物心の二者は、もともと相独立せる実体ではなくして、一実体の二属性に過ぎない。実体は、唯一でそして無限である。それであるから原因を有つてゐない。しかも一切事物の原因であるから、これを神と名づける。そこでどうして万物は神から発生するかと云ふに、創造にも將た流出するのでもなくして万物が神の必然性質なること、三角形の三角の和が二直角に等しいのは、三角形そのも

の、が必然的性質であるやうに、万物は、神の外のものではなくして、その内にあるものだといふ一元的世界観を建設したのである。(五五〜五六頁)
またスピノザの哲学的観点については、つぎのようにいつている。

スピノザの見方

スピノザは、一面抽象的絶対論者とも見られるが、また他面具体的絶対論者とも見るべき点がある。即ち彼は、自足、円満、無限、唯一、絶対なるものを本体と見、これを神と名づけたが、さう云ふ点から抽象的絶対論者と見られる。

併し一方に於て、彼はかう説いてゐる。

本体は、吾人に対する場合、全くその性質を異にする二つの方面で知られる。それは即ち物と心とである。そしてこの二つの性に於て起る雑多の事柄を本体の様状と名づける。即ちそれは本体の差別相であるが、本体とこの差別相とは、互に相即不離(一つにとけあっている)の関係を有つてゐる。譬へていへば、本体とこの差別相との関係は、なほ線と線に於ける点との関係のやうなもの、一体たる線は、決して個々の点と相離れたものではなく、また個々の点もその線を離れたものでない。両者は相即不離である。そして本体と万物との関係もまたさうである。

〔昭和期——前期(昭和初期から終戦まで)〕

『哲学雑誌』(第四八〇号、昭和2・1)の「スピノザ哲学に於ける徳論の構成に就いて(完)」(隆高鑑)は、スピノザがかいた徳の概念の形式を一べつし、それを批評した長編論文(四三〜七五頁)である。

金子馬治著『哲学概論』(早稲田大学出版部、昭和2・11)は、哲学をはじめて学ぼうとする者の便利な手引書として公刊されたものである。

著者によると、『哲学概論』といったものは、書き手の全哲学的識見の略図のやうなものという。本書の「第六 一元論」に、「スピノザの一元論(一五九〜一六二頁)のことが出てくる。

著者によると、もっとも単純な一元論は——歴史的にはもっとも古い実体論であるという。すなわち、唯物論よりも先にあらわれた物活論(hylozoism)(物質は、生命と不可分であるという説)が、それである。厳密にいう一元論は、物心二元の統一論を意味するという。

スピノザの一元論とは——、

最も代表的な又最も顕著な意味に於ける一元論であつたに相違ない。即ち彼れの本体 (Substantz) —— 唯一絶対の本体は、絶対独立何ものにも依存しない自己原因 (causa sui) であつて、一切存在の根本因を成す純形而上学的実体である。

松原 實 共訳 『アス 近世哲学史』 (日本大学出版部、昭和4・4) は、エルンスト・フォン・アスター (一八八〇〜?)、ギーセン大学教授) の述作を反訳したものである。同書の「第二篇 十七、十八世紀の哲学」の第三節は、スピノザである (九〇〜一〇五頁)。著者によると、スピノザの学的興味は、倫理的哲学的な問題にあつたということである。しかもかれの研究対象は、人類と人類社会とにあつた。かれは生命の意義と価値 (精神行為の目標) から、宇宙にたいする人類の位地をさぐるうとした。

スピノザの名著『エティカ』は、哲学上もつとも危険な迷路の一つである、といい、それをつぎのように要約している。

第一章では神を描き、第二章では、精神の自然と夫の起原といふ表現を冠り、第三章では、感情の起原と本質を説き、第四章では、人間の不自由さ、換言すれば、激情の力をとき、第五章では認識力、つまり、人間の自由を論じてゐる。

『哲学研究』 (第一五巻・第一六六号、昭和5・1) の「スピノザ哲学の方法に就て」 (島芳夫) は、スピノザ哲学の方法 (著者は實在論的世界観を基礎として立てていると考えている) が、いかなる生の体験を基礎として成長し、またその体験によって規定されたその方法の特性は、どのようなものであつたかについて論じたものである。

小尾範治訳の『スピノザ 哲学体系 (原名 倫理学)』 (岩波書店、大正7・3) が、本邦初のスピノザ訳であり、岩波文庫に入った第一号だとすると、第二号は畠中尚志訳『スピノザ 知性改善論』 (岩波書店、昭和6・4) である。

訳者は第二高等学校の学生のところから、いろいろ病魔にとりつかれ、果ては脊椎カリエスにかかり、東京帝大の法学部学生であつた大正十四年 (一九二五)、ついに大学に退学届をだした。昭和三、四年ごろ (一九二八、一九二九) 福岡の病院で治療ちゅう、スピノザの『知性改善論』 (Tractatus de intellectus emendatione) を大学ノートに訳しはじめたが、いつしかそれは三冊になった。訳しおえると、「采 (さいころ) 投ずる氣

持」で、岩波の編集部に送った。一、二ヵ月後、返事がきた。

——店に関係ある先生（東大教授・出 隆）にみていただいたら、珍しいものだから出すように。

といわれたので、文庫の一冊として出させてもらいたい、といった返事であった（畠中尚志「スピノザを訳した日々のこと」『図書』所収、岩波書店、昭和52・2）。

訳者は、訳書が出る昭和六年（一九三二）早春——東京のある病院で右腎臓の摘出手術をうけた。印税はすぐ手術料の支払いの一部に使われた。翌年の暮からまた福岡生活がはじまった。

このように岩波の『知性改善論』は、病苦に悩む体にムチうってなされたしごとである。

底本としてはゲプハルトが編んだスピノザ全集第二巻ちゅうの同書を用い、参考としてゲプハルトのドイツ語訳、ウィレム・メイエルのおランダ語訳、ほかにフランス語訳などを利用したという（「凡例」）。

内容は——凡例——読者に告ぐ——本文——註——知性改善論について（訳者）——からなる。

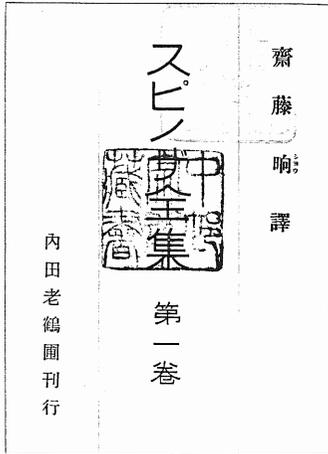
大正七年（一九一八）三月に、小尾範治訳のスピノザの『哲学体系（エチカ）』の反訳が刊行されて十四年後、こんどは「スピノザ全集」の表題をもつ訳書が刊行された。

齋藤 响 訳

『スピノザ全集 第一巻』……内田老鶴圃刊行（昭和7・4）

『 〃 第二巻』…… 〃 （昭和8・11）

訳者・齋藤响（一八九八〜一九八九）は、愛媛県のひとである。大正十三年（一九二四）東京帝国大学文学部哲学科を卒業後、東洋大学・大東文化学院・明治大学などで教鞭をとり、昭和十八年（一九四三）日本出版会常務理事などを歴任し、戦後公職追放になった。晩年、東洋大学文学部長となり、定年退任した。著訳書も多数ある。



本邦初の「スピノザ全集」となるはずであった齋藤訳。[早稲田大学中央図書館蔵]

『スピノザ全集』は、第四巻まで出る予定であったものようだが、じっさい刊行されたのは、第一巻と第二巻だけである。第一、二巻は、四六判（たて19センチ、よこ13センチ）、天金緑色のブロード表装であり、定価は二円五〇銭。なかなかこった作りである。第一巻に収録されているのは、つぎのような述作であるが、ラテン語から直接訳したものである。翻訳の底本は、カール・ゲブハルトが編んだ *SPINOZA OPERA im Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften herausgegeben von Carl Gebhardt* という。

『スピノザ全集 第一巻』の内容（全四八二頁）は、――

スピノザ全集解題（一～三六頁）

第一巻序説（三七～六五頁）

『神、人間及び人間の幸福に関する短論文』

『ルネ・デカルトの哲学原理』

附 形而上学的思想

訳者略註

『スピノザ全集 第二巻』の内容（全五八八頁）は、――

序説（三～一五頁）

『悟性改善論』

『倫理学』

訳者略註（四八九～五二二頁）

索引（一～六〇頁）

『スピノザとヘーゲル』（岩波書店、昭和7・7）は、昭和七年（一九三二）がスピノザが生まれて三百年になることから、ハーグにおける国際ヘーゲル連盟の支部たる日本のヘーゲル連盟は、このスピノザ研究を公刊した。ヘーゲルとスピノザとのあいだに密接な内的連けいがあることから、スピノザの思想体系を分析すれば、ヘーゲル哲学を解明するカギがえられるという（J・B・クラウス）。

ヘーゲルにとって、スピノザ哲学はかれみずからの哲学の出発点でもあった。国際ヘーゲル連盟の日本版の第二巻にあたる本書には、内外の八名の哲学者が寄稿している。

宗教としてのスピノザ哲学……………ドゥーニン・ボルコヴスキー……………一	
スピノザとヘーゲル……………桑 木 敏 翼……………四五	
個体的本質の弁証論……………田 辺 元……………八三	
スピノザに於ける思惟の位置……………高 坂 正 顕……………一二七	
スピノザに於ける国家的倫理性……………ク ラ ウ ス……………一六九	
スピノザに於ける人間と国家……………三 木 清……………一九七	
ゲーテのスピノザ研究……………木 村 謹 治……………二三七	
批判的スピノザ文献史……………ドゥーニン・ボルコヴスキー……………二六九	

さいごの「批判的スピノザの文献史」（ドゥーニン・ボルコヴスキー）は、^{ぼんばい}膨大なスピノザ文献をふるいわけ、批判的に概観したきわめてユニークな論文といえる。

『哲学改造』（第一号、昭和7・8）の小論「スピノザの哲学」（広瀬文豪）は、スピノザの本体（存在）論、認識論、などについて論じたものである。論者によると、スピノザ哲学において問題とすべきものは、現象ではなくて、神の實在だという。さらに同誌（第二号、昭和7・9）は、前号において述べた——スピノザにおける神——実体なるものは、認識実践の意味であるが、こんどは神、実体、属性、様態にふれたい。

昭和七年（一九三二）十一月二十四日は、スピノザが生まれて三百年にあたる。スピノザの訳者・畠中尚志は、「スピノザ生誕記念日を迎えて

「上」「中」「下」を、三回にわたって『東京朝日新聞』に寄稿した（昭和7・11・12と11・24）。

記事の内容は——今後、各国においておこなわれるであろう祝賀の催しの予測。ハーグに本部をおく「スピノザ協会」の事業の紹介、この年の九月にハーグで開かれた「スピノザ週間」における各国研究者らの集まりの様子。日本にも同協会の支部を設けたい、といった協会理事ゲブハルの意向などを伝えている。

『Philosophia 哲学年誌』（早稲田大学文学部編、第二巻、昭和7・11）の「スピノザの自然権について」（渡利弥生）は、スピノザの政治論の根幹をなす自然権の思想について考察したものである。

昭和七年（一九三二）は、スピノザやジョン・ロックらの生誕三百年にあたったので、哲学会の秋季大会講演会を「スピノザ、ロック生誕三百年記念」とし、十一月十九日（土）午後一時から東京帝大の法文経二号館三十八番教室で、公開講演会がひらかれた。聴衆は約三百名。午後五時半閉会。当日の演題および講演者は、左記のとおりである。

挨拶……………井上哲次郎

無神論者スピノザ……………出 隆

スピノザ生誕記念日を 迎へて「上」 島 中 尚 志

今年の十一月二十四日はスピノザの生誕三百年の記念日に當る。各國におけるその祝賀の盛しは既に述べたものもあるし今後行はれるものもあるであらう。近年來特に歐洲諸國ではこの哲學者は對する關心が非常に盛になつてゐる。かゝる現象は、今世紀における新しい形に學問への要求熱と關聯しても考へられるであらうが、根本的にはやはりそれはスピノザ主義そのもの、深遠性を語るのに外ならぬのである。

△ 近代のスピノザ研究熱のふん

國氣から生れたものに「スピノザ協會」がある。これは一九二〇年利蘭のマイエルドイットのゲブハルト、英國のポロック、佛國のブランズウィック、デンマークのヘフティングを責任者として設立せられ、ハーグにその本部を置くスピノザリストの國際的集團であり、現在では世界の十ヶ國にその支部を有してゐる。今哲學者の生誕三百年を迎へるに當り、我國にはほとんど知られてゐない此協會について語るのも徒勞でないであらう。

スピノザ生誕300年にさいしての投稿記事。
（『東京朝日新聞』昭和7・11・24付）。

ロックの哲学……………大島正徳

危機の哲学とスピノザ及びロック……………桑木嚴翼

『哲学雜誌』（第四七巻・第五五〇号、昭和7・12）は、桑木の講演筆記（「危機の哲学」とスピノザ及びロック）をのせ、また十二月の例会（12・17、東京帝大山上會議所）でおこなわれた講演——「模写説の再吟味——スピノザを記念して」（斎藤昶）の原稿をかかげた。

『哲学研究』（第一八巻・第二〇二号、昭和8・1）の「スピノザに於けるアントロポロジーの要求」（篁 実）は、わかりにくい内容の論文である。筆者はその中味を論じ、

批評することに困難をおぼえる。論者によると、感情は単なる主観的感官かんかん（感覚器官）の奸計（わるたくみ）でも奇術でもなく、本体論的、形而上学的意味をもつべきものであるという。

感情の中にはアントロポロジー（人間学の意）——引用者の真理が隠されている。

ミーチン
ラリツェウイチ著
広島定吉訳

『スピノザと弁証法的唯物論』（ナウカ社、昭和8・9）は、つぎの四名のロシア人のスピノザ研究を反訳したものである。

スピノザ哲学概観……………ワンデク・チモスコ

スピノザと弁証法的唯物論……………ミーチン

スピノザ哲学の歴史的意義……………カンマリ・ユーゼン

第十七世紀における進歩的ブルジョアジーのイデオログ……………ラリツェウイチ

訳者の観るところ、スピノザは商業資本から産業資本への過渡期において、オランダの進歩的ブルジョアジー商工階級の利害と動向とを、その哲学のなかに表現した哲学者であった。右にかかげた四人の論文は、ながい間汎神論者、神秘的観念論者とみなされてきたスピノザを、唯物論者として復活させようとしたものか。

ちなみに、戸坂潤（一九〇〇～四五、昭和期の哲学者。のち法大講師、軍国主義に抵抗し、治安維持法により検挙され獄死）は、同書を赤エンピツで線をひきながら精読していた。その勉強のあとは、こんにち法政大学附属図書館の「戸坂文庫」の蔵本によって知ることができる。

東北帝国大学法文学部の機関誌『文化』（第一巻・第五号、昭和9・1）の「スピノザに於ける個物の認識に就て」（高橋ふみ）は、いわゆるスピノザが『エティカ』においていっているところの第三種の認識——個物（感覚で認識される一つ一つの対象。あのもの、このものと一つ一つ区別されるもの）についての認識について論じたものである。論者によると、この第三種の認識は、かならずしも神の認識に関するばかりか、むしろ個物の認識に關してであることに注意を要するという。

昭和九年（一九三四）二月——ロシアにおけるスピノザ研究の一端をしめすものとして——スピノザの哲学体系と唯物論史におけるその地位も明らかにしようとした研究の反訳が刊行された。鈴木謙彰訳編『スピノザ哲学批判』（隆章閣、昭和9・2）がそれである。

内容は、——スピノザ哲学の概要——生涯と活動——十七世紀のブルジョア・イデオロギーとしてのスピノザ哲学——唯物論と無神論——形而上学的唯物論——認識論——スピノザの誤れる評価にたいする批判——スピノザ三百年記念祭論文集——からなる。

スピノザは哲学史上、いかなる地位をしめているのか。スピノザ哲学の歴史的意思を考察したのが、「スピノザ哲学の歴史的意思」（イー・ルツポール）の論文である。論者によると、スピノザは十七世紀の先進的ブルジョアジー（資本家階級）の思想の代表者として、直接に封建制度、中世、スコラ哲学に対置されているという。

スピノザの体系の一般的性質は、当時のブルジョアジーの気分を形而上学的な形において表現した最も大きなものであった。

といい、哲学者としてのスピノザの特殊性と同時にその難点もこの点にあったという。

従来、スピノザ研究者は、スピノザ哲学の体系を分析するとき、実体と属性だけを問題にし、他のすべての問題をないがしろにしてきた。スピノザの唯物論は、弁証法的唯物論において、その歴史のおよび論理的結果をみいだしたという。

『理想』（第五〇号、昭和9・10）の「スピノザの人間観」（安倍能成）は、文字どおりスピノザが人間をどのように見ていたかについて論じたものである。論者によると、スピノザは人間に興味をもち、人間生活や社会生活を大いに肯定したという。

スピノザの人間観に就て 今一つ著しい特色は、初にもちょっと触れた人間中心の考え方である。

安倍能成著『スピノザ 倫理学』（岩波書店、昭和10・8）は、「大思想文庫」の一冊である。書店より、スピノザの『倫理学』について書くよう委嘱をうけて、筆をとったものらしい。著者とスピノザとのつきあいは、学生時代にさかのぼり、波多野精一教授からシュテルンの独訳でスピノザの『倫理学』の演習をうけ、さらに卒論にスピノザをかいたことにはじまる。渡欧のおり、スピノザ文献をすこしあつめはしたが、眼前のし

ごとに追われ、それらの文献をよむことなく時は経過した。

著者は大正十四年（一九二五）十二月九日——ハグを出発するわずかの時間をぬすんで、パヴィリオン運河通りの「スピノザの家」（「スピノザ協会」の前にたたずみ、またその家のまえにある、露にぬれたま、朝日をあびている銅像をながめた。このとき学友に撮ってもらった銅像の写真が巻頭にそえられている。

本書の内容は、——総叙——第一部 神に就て——第二部 精神の性質及び起源に就て——第三部 感情の起原及び性質に就て——第四部 人間の屈従あひ或は感情の力に就て——第五部 知性の力或は人間の自由に就て——である。執筆にさいしては、なるべく著者じしんに語らしめることにし、座右の文献はあまり利用しなかったという。

この本は、読者にスピノザの名著『倫理学』を紹介する意図のもとに書かれたものようである。

『倫理学』は、スピノザの著述中最も原理的、体系的なる名著であつた。その分量に於ても彼の著述中『神学政治論』が少しくこれにまさるのみである。この書の計画は既に一六六二年から一六六五年に互つて、先づ三部から成るものとして書かれ、次に一六七〇年から一六七五年に互つて現存せる五部から成るものとして完成されたのであつて、この経過だけから見ても、彼がこの書を彼の生涯の著作として、如何に重きを置いて居たかが判る。

けっきょくこの書がスピノザの遺著として世に出たのは、かれが死んだ年の一六七七年十二月のことであつた。すなわち同書をかいてから二年余の歳月がたつていた。

桑木殿翼著『哲学及哲学史研究』（岩波書店、昭和11・2）は、著者がこの十数年のあいだに書いた論文ちゅう、いくぶんか学術的研究の意義を有するものを編んで一書としたものである（「序」）。このなかに「危機の哲学とスピノザ及びロック」と題する章節が入っている。

著者によると、スピノザの無宇宙論と結合する観念論的思想は、中世思想に抵抗して新機運をひらこうとしたものという。スピノザは気分態度のうえにおいて、自然科学的没価値観を有し、その時代の中世思想の残りかすに反抗した点において、かれが「一種の危機哲学を説いたもの」と称するを得る」という。

斎藤响著『哲学概論』（内田老鶴圃、昭和11・7）は、職業的哲学者を対象とせず、一般読者のために筆をとった哲学入門書である。十七の論

文をあつめて一書としたものである。各節がひとつの表題のもとに、ひとつの独立した読物になっている。だからどこからよんでもよいという。同書の「第三章 世界問題 一五 無我の自覚」に、スピノザの『ホモ・コギタット』の章節がそれである。著者は我とはいったい何人であるのか。人は我があるということを疑うことができない。スピノザはデカルトを研究して、そこから大いに学ぶところあり、あえて、我おもうゆえに我あり」を採用しなかった。スピノザは、*homo cogitant*（ひとは思う）といった公理を立てているが、このことはわれわれに一つの示唆をあたえているという。

「我思ふ」(cogito)の「我」(ego)が駆逐せられ、客観的な「人」(homo)が姿を現してくると、「われ思ふ」が「人は思ふ」の一契機として止揚せられる(相殺する)。そして我々の一人例へば私は単に我々の一人即ち人間として待遇せられる。

なお、この本がわりと評判がよかったために、改訂版にちかい『哲学読本』(内田老鶴圃、昭和13・4)が刊行されたが、同書の「第三篇 世界観及び自覚の問題 無我の自覚」に、「デカルトのコギト」の章節があり、スピノザの「ホモ・コギタット」のことが再び出てくる。

『京城帝国大学創立十周年 記念論文集 哲学篇』(京城帝国大学文学会論纂 第四号、昭和11・11)の「スピノザ哲学に於ける直観知の問題」(安倍能成)は、スピノザの直観知がいかなる性質のものか。またそれと他の認識階段との関係はどのようなものか。これらの点についてスピノザが述べているところは明らかでないという。そこで論者はこれらの問題について、いささか考究を試みたという。

権 俊雄著『哲学史提要』(同文館、昭和11・12)は、一般むきに西洋哲学の歴史をかいたものという。「第四編 近世哲学」に、スピノザの章節がある(一八〇〜一八六頁)。スピノザの簡単な生いたちにはじまり、かれの主なる述作について説き、さらにその精神的活動の特徴などについて語っている。

篁 実著『スピノザ』(弘文堂書房、昭和12・2)は、専門的なスピノザの研究書の印象をあたえる。同書は版元の「西哲叢書」の一冊である。内容は——第一部 スピノザ伝——第二部 スピノザの学説——第三部 スピノザ哲学の Wahrheit——附註 索引——からなる。本書はけっこう平易な読物ではなく、中味もむずかしい。著者によると、スピノザが生前、没後において、無知と狂信とにより、「死せる犬」として迫害され、かつ恥ずかしめられたのは、故なきことではないという。かれが無神論者のレッテルを張られたのは、——

神を単に自然科学的自然と同一視したるが故に無神論者であり、又不敬の徒として遇せらるべきである等と考へるのは、スピノザの思弁的精神を解すること浅いものといはねばならぬ（二八〇頁）。

という。

桑木巖翼著『プラトン講話』（春秋社、昭和13・4）は、著者がここ数年のあいだにおこなったラジオ講演を集録したものである。同書の「附録」に、『エティカ』解説覚書」が収めてある（二二三〜二四二頁）。これは昭和十年（一九三五）十二月九日——三〇分間、「ラジオ名著解説放送」のさいに用いた草稿がもとになっている。

内容は、文字どおりスピノザの原著『エティカ』（遺稿）——哲学、心理学、宗教などにわたる——哲学大系を一般聴衆にわかりやすく説いたものである。この本は無味乾燥な幾何学的論理的形式をとっているが、熟読翫味すれば、つねに興味しんしんたるものが存することをみるといえる。広島文理科大学教授・稲富栄治郎が著わした『スピノザの哲学——神の認識の問題を中心として』（理想社出版部、昭和14・1）の初版は、昭和五年（一九三〇）という。今回初版に若干の改訂をくわえ、巻末に「スピノザの生涯」（二二五〜二八二頁）を附加したという（「新版の序」）。この稿の筆者が所属するものは、この新版である。この書物の母体になったものは、東北帝大の学士論文であった。

本書の内容は——一 序論 二 属性に関する種々の解釈——思性の優位——四 認識の意味——五 実体——六 延長の意味と平行論——七 認識の三段階——八 弁証法と方法論——九 直観知——一〇 結論——註——スピノザの生涯——からなる。

スピノザは独断論（理論的根拠のない仮定的主張）をなしたにすぎず、したがってかれは哲学史上の一頁に葬りさられてもしかたがない、といった考えもなりしたが、著者は、「万有を静観しつ、悠悠々思索の境涯に遊んだスピノザに」、哲学する者の理想郷をみいだしたようである。

なお本文の文章は、概して重苦しいものであるが、「スピノザの生涯」は平易にかかれていて、おもしろく読めるものである。

『哲学雑誌』（第五四卷・第六三二号、昭和14・10）の「Conatus の概念とスピノザ哲学」（桂 壽一）は、スピノザ哲学でいうところの Conatus（ラテン語——自己保存の努力の意）の意味内容と、かれの哲学について論じたものである。この「自存力」の概念そのものの出発点は、

自然主義（自然を唯一の実在として、これを科学的方法で説明しようとする）の裡に根ざしていることを否定できないという。

ウィル・デュラント『哲学夜話』（第一書房、昭和15・5）は、西洋哲学史上の古今の著名な哲学者——たとえばプラトン、アリストテレス、ベーコン、スピノザ、ヴォルテール、カント、ショーペンハウアー、スペインサー、ニイチェなどを取りあげたものである。第四章はスピノザの章節である（一〇五―一五一頁）。同書はアメリカで大ベストセラーとなったもので、哲学を大衆のものにすべく、平易にかかれている。

スピノザの項目は——Ⅰ 歴史と伝記——スピノザの教育——破門——隠退と死——Ⅱ 宗教と国家とに関する論文——Ⅲ 知性改善論——Ⅳ 倫理学——Ⅴ 政治論——Ⅵ スピノザの影響——からなる。

著者はスピノザの人とその哲学をつぎのように記した。

スピノザは学齢期に達すると、聖書の研究からユダヤの法律、神秘哲学などを学び、やがて旧約聖書の矛盾やでたらめさに気づくようになった。神も肉体や物質の世界をもっているかもしれない。霊魂は単なる生命であるかもしれない。旧約聖書は、不死について何も説いていない。かれはこのようなことを友人にもらしたために、やがて破門されるに至った。

スピノザは命がみじかいことを自覚していた。生存中に出版しなかった述作の原稿が、死後にうしなわれたり、損じたりすることを恐れ、それを小さなテーブルのなかにしまいかぎをかけた。そしてそのカギを家主にあずけ、さいごのときがきたら、アムステルダムの出版者ヤン・リユーウエルツにそれをわたすようにたのんでおいた。

スピノザにとって、知識だけが力であり、自由である。永遠なるしあわせとは、知識の追求であり、理解のよろこびである。哲学者は、人間であると同時に市民でなければならぬ。ひとは実生活をどう生きたらよいのか。

一 民衆が理解できるように語ること。かれらがわれわれの目的を阻害しないかぎり、かれらのために行動すること。

二 健康をたもつに必要な娯楽だけをたのしむこと。

三 必要な金だけを求めること。すなわち、生活と健康の保持にとって必要な金だけをもとめること。

（「知性改善論」）

著者によると、いまの学生は、スピノザのことば使いにまごつくだろうという。たとえば、かれはつぎのような独特なことを使った。



スピノザは、よむべきものではなく、研究すべきものという。そしてスピノザの後世への影響とはなにか。

屍体をムチで打つように、ひとはスピノザを語るのに「死せる犬」について語るようであった、といったのは、レッシング（二七二九〜八一、ドイツの劇作家・評論家）であった。かれは哲学者ヤコービ（一七四三〜一八一九）との対話において、じぶんがスピノザ学徒であったといったスピノザを識ったのは文豪ゲーテにとどまらず、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルなどもスピノザに注目し、独自の汎神論を把握した。

スピノザ 畠中尚志訳 『国家論』（岩波書店、昭和15・12）は、昭和十年（一九三五）ごろ、岩波書店からの勧めにより訳業に手をつけたものである。これは未完のままにおわり、スピノザの生前には発表されなかった。死後の出版の『遺稿集』のなかの一篇として世に出たものである。内容は——自然権——国家の権利と目的——君主国家——貴族国家——民主国家などについて述べてある。

九鬼周造著『西洋近世哲学史稿 上』（岩波書店、昭和19・11）は、京大文学部哲学科における講義用の草稿を没後に本にしたものである。同書の「第二部 カント以前」に、「バルフ・デ・スピノザ」の章節がある（二五七〜一八〇頁）。おそらく諸書の記事をてきぎ抜きとり、それらをはぎ合わせて草案をつくったものであろう（『九鬼周造文庫目録』（甲南大学哲学研究室、昭和51・2）から推定）。

内容は——Ⅰ・形而上学——Ⅱ・人間学——Ⅲ・実践哲学——の三つにわけられる。形而上学の項では、実体・属性・様態などについて説かれ、人間学の項では、認識・感情論などについて解説し、実践哲学の項では、完全性と実在性と能動性は、同一のものとみられるとのべている。

さいごにスピノザ哲学の特色にふれている。一言でいえば、——

合理主義 (Rationalismus)

汎神論 (Pantheismus)

同一哲学 (Identitätsphilosophie——精神物体は同一物である)

徹底的機械論 (Mechanismus——決定論)

であるという (二七九頁)。

〔昭和期——後期 (戦後)〕

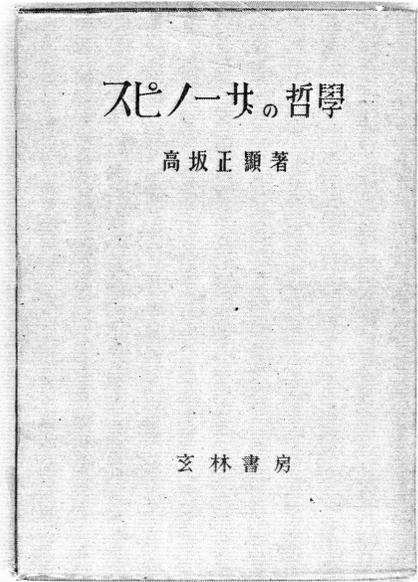
わが国は、連合国相手の無謀な戦争 (太平洋戦争) に突入したために、やがて泥にまみれ、火に焼かれる苦しみを味わい、あげくの果てに無条件降伏した。さんたんたる敗北を喫した日本は、興亡の岐路にあった。国土はどこも焼跡だらけ、国民生活は貧乏のどん底にあった。国家再建は連合国の指導のもとに着々とすすめられる一方で、出版面の立直りは早かった。民主主義国家の標榜のもとに、雨後のたけのこのようにおびただしい数の雑誌や訳本が発刊し、同時に旧著や新書や訳本が刊行された。

終戦後の混乱期のさなかに、東京文理科大学哲学会の機関誌『哲学論叢 第10輯』(河出書房、昭和20・10)は、アンナ・ツマルキン
新福敬二訳『スピノザ』を掲載した(二七一〜一九二頁)。本稿は主としてスピノザの『エティカ』を中心として、実体・属性・様態などについての諸概念についてのべたものである。

また終戦の翌年、文庫として刊行されたものに、ロマン・ロラン著
宮本正清訳『エムベドクレスとスピノーザ』(岩波書店、昭和21・9)がある。この小冊に収められた二篇は、伝記でもなければ研究でもないという。ロマン・ロラン(一八六六〜一九四四)、フランスの作家・思想家が古典の明星たちに献じた讃歌ともいえるものという(「序」)。

低本は *Empédocle d'Agrigente, l'Eclair de Spinoza*, Edition du Sablier, Paris, 1931 である。

「スピノーザの閃光」(六七〜八五頁)において、著者はスピノーザの焔ほのおのことばについて語るにとどめよう、といっている。著者がリセのルイールグラン校の哲学級に通っていたころ、オデオン座のアーケードの書店でエミール・セエセ訳『スピノーザ集』(シャパンティ版三冊、一八七二年)



戦後初のスピノーザ研究——高坂正顕著『スピノーザの哲学』(昭和22・10)。

を求めた。かれはこのスピノーザ全集のなかに、じぶんの隠れ家をみつけた。外はミシュレ街。人通りなく、北風が吹いている。時候は冬。空は灰色である。午後四時。ロランはかべぎわの机にむかい、寒さにちぢこまりながら、スピノーザの本(第一巻)をよんでいる。最初の一ページでじゅうぶんだった。四つの定義と「エティカ」の火打ち石が、いくつかの火を出したが、それだけでじゅうぶんだった……。

戦後まもなく刊行された『哲学評論』(第二巻・第4号、昭和22・9)の小論「古典解説スピノーザの『エチカ』」(渡辺義晴)は、スピノーザの名著「エティカ」を中心に、かれの思想を大づかみに紹介しようとしたものである。紹介者

は、スピノーザの実体・属性・様態の三つの概念について説いている。

さらに研究書として、終戦の二年後に刊行されたのが、高坂正顕^{まさひら}著『スピノーザの哲学』(玄林書房、昭和22・10)である。同書(全一五七頁)は、京大における講義の草稿に多少の補訂をくわえたものという。哲学の専門家にしめすために書いたものではなかった。「しかし、スピノーザの概略を知るうえに、一般の人々には多少の手引になるであろう」(「序」)とのべている。要するに一般むきのスピノーザ入門書と考えてよいであろう。小さくまとまった好書である。

内容は大きくわけて——序論(スピノーザの性格と生涯)——本論——スピノーザの問題とその発展——神について——属性について——様態について——精神について——スピノーザとその影響からなる。

著者によると、スピノーザ哲学の中心問題は何かというと、つぎのようなものという。

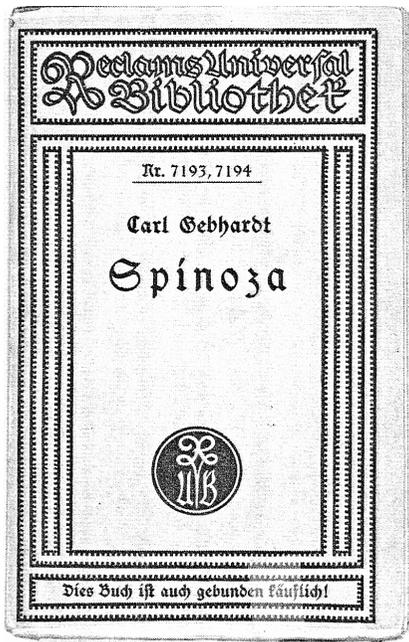
第一は神について。第二は精神について。

第三は道徳さらに解脱について。

スピノーザが、いまのわれわれにいかなる示唆をあたえているかという問題に関して、著者はこう答えている。



カール・ゲブハルトの『スピノザ』(昭和23・10)の訳本。下はその原書。



カール・ゲブハルトの『スピノザ』(1932)の原本。

私はスピノーザの「生を思ひ、死を思はず」が、再び絶望の底から現はれるであらうことを思ふものである。その時、キエルケゴールに代つて、再びスピノーザが想起されるであらう(一五七頁)。

帆足理一郎は、さきに平明をむねとする『哲学概論』(洛陽堂、大正10・3)といった哲学入門書を著わした。が、戦後、こんどは簡明をむねとする『文化思想史』的『西洋哲学史』(野口書店、昭和23・8)を刊行した。同書の「第三篇 近代哲学」の「第二章 唯理論 第二節」に、スピノーザの章節がある(一九四〜二〇六頁)。

このなかで著者は、スピノーザの生いたち、哲学の方法と目的、一元論や汎神論、実体論、属性論、様相論、靈魂論、認識論、智能と意志、倫理および宗教などについて語った。

ゲブハルト著 『スピノザ概説』(創元社、昭和23・10)は、ドイツの著名なスピノザ学者カール・ゲブハルト(二八八一〜一九三四、ハイデルベルク大学で法学を学んだ。博士論文は『知性改善論』の研究『一九〇五年』。スピノザに関する論著のほか、ドイツ語版スピノザ全集を編んだ)が、一九三三年(昭和八年)にスピノーザ生誕三百年記念のために執筆した *Spinoza* (1932) をドイツ語から反訳したものである。

本書(全二二三頁)の内容は――、第一章から第四章までは、スピノザ伝であり、第五章はスピノザ説の歴史的地位、第六章はスピノザ説の四

等式、第七章はスピノザ語録となっている。これは著者の遺著となったもので、訳者によると「短い紙幅に盛った好箇のスピノザ入門である」という（「訳者序」）。筆者も訳者とおなじように感じるし、好書であると思われる。初版は昭和十三年（一九三八）二月——『改造文庫』のなかに入れたものであるが、今回創元社の「哲学叢書」の一冊とするにあたり、訳文に多少手を入れ、訳註をくわしく、新たに主要文献目録と索引をそえ、読者に便宜をそえることにしたという。

『哲学雑誌』（第六三巻・第七〇一号、昭和23・11）の「スピノザ哲学における情念の問題」（竹内良知）は、スピノザにおける「情念」*affectus*（論者にしたがえば、人間の根源的な存在規定としての気分^{システインスタング}ほどの意という）の思想をあきらかにしようとした長編論文（二一〜四七頁）である。戸頃重基著『宗教と唯物弁証法』（白揚社、昭和23・11）の「第七章 仏教汎神論とスピノザ主義」において、著者は、スピノザ汎神論の後景、神すなわち即自然、仏教における決定論、汎神論と汎心論の対照などについて論じている。

著者によると、スピノザは「神人間性同形説」を否定したという。すなわち、神に人格の概念がないといったという。

しかし、救済を目的とする仏教の汎神論は、おんじん 応身しゅうせいの思想（衆生しゅうじやう「すべての生命あるもの」を救うために、姿をかえて現あらわれる仏ぼつ）を生んだのである（二九四頁）。

もっとも古いスピノザ伝として知られているものとして、ルーカスとコレルスのものがある。

ジャン・マクシミリアン・ルーカス……一六三六年か一六四六年に、出版業者の子としてフランスのルーアンで生まれた。出版をなりわいとし、一六九七年にハーグで死去。コレルスのスピノザ伝におくれること十四年——一七一九年にスピノザ伝をまず『ヌーヴェル・リテレル』誌（第五巻）に発表し、ついで単行本として『ベノワ・ド・スピノザ氏の人生と精神』を刊行した。が、匿名であり、出版社名も刊行された場所も明記されていないかった。

ヨハン・コレルス……一六四七年にドイツのデュッセルドルフで生まれた。一六七九年ルーテル教会の牧師としてアムステルダムにやってきた。一六九三年、ハーグの教会に移り、一七〇七年に死去。一六七〇年から翌七一年に



スピノザ伝をかいたジャン・マクスマリアン・ルーカス。A.Wolf の *The Oldest Biography of Spinoza* (1927) より。

かけて、スピノザが滞在したステイレフェアカデーの下宿家にいた。一七〇五年——スピノザが亡くなって二十八年後、『スピノザ伝』を発表。翌年、仏訳が出、さらに英訳があらわれる。一七三三年には、フランクフルトとライプチヒでも、『スピノザ伝』が刊行された。

注・A. Wolf 編 *The Oldest Biography of Spinoza*, George Allen & Unwin Ltd, London, 1927 を参照。

ルカス、コレルス 山元一郎訳編 『スピノザの生涯』(弘文堂、昭和24・6)は、アテネ文庫のうちの一冊である。訳者によると、本書はJ・フロイデンタールが編んだ『スピノザの生活史』(J. Freudenthal: *Die Lebensgeschichte Spinoza's*, Verlag von Veit & Comp, Leipzig, 1899)から、ルカスとコレルスのスピノザ伝を抜きとって邦訳したものである。前者は全訳、後者は抄訳したものという。これらの二つの伝記は、その信びよう性のある、なしを別にしても、スピノザ伝の根本資料を形づくっている。ともあれ、この小冊子に収録されているものは、——

ベネディクトゥス・デ・スピノザ氏の生涯と精神 (ルカス)

ベネディクトゥス・デ・スピノザの生伝 抄 (コレルス)

である。これは好書である。

昭和二十年代のスピノザ関連の論述はひじょうに少ないが、渡辺義晴著『資本主義黎明期の哲学——スピノザの社会思想』(刀江書院、昭和25・9)は好書である。著者は、スピノザの哲学的思索に内容をあたえている、当時の社会を考察することによって、スピノザの哲学を歴史的、客観的に解釈できるのではないかと考えた。

ついでスピノザの社会思想または社会哲学を考えると、かれの哲学一般を理解するのに有益でないかとおもった。このような考えのもとに執筆したのがこの書物である。大きく分けて、内容は——序論 スピノザへの道 哲学の正しいつかみ方——十七世紀のオランダ



哲學古典解説

スピノザ

(二六三二—一六七七)

高峯 一愚

共和国の政治経済的性格——哲学者スピノザの評伝——「神学政治論」を中心としてみたスピノザの社会国家観——スピノザ社会思想の歴史的理論的評価の諸問題——からなる。

著者がスピノザの社会思想について研究してみた結果、かれが十七世紀のオランダにおける進歩的なブルジョア・イデオロク（有産階級の理論家）であったという印象である。しかし、この小さい研究では、概略的な見取図をえがいたにすぎなかったようである。

一、「その生涯」 一五八一年ネーデルランドがスペインの壓政に抗して獨立を宣言して以來、この地は大陸における唯一の自由の天地となり、ポルトガルから信教の自由を求めてこの地に移住するユダヤ人の數は年とともに多く、アムステルダムは「新しきエルサレム」と呼ばれた。哲学者スピノザはこうしたポルトガル系ユダヤ人の商家の子として一六三二年十一月二十四日アムステルダムに生れた。デカルトのオランダ定住時代（一六二八—四九）にあたり、また同年八月二十九日にはイギリスにジョン・ロックが生れていた。名前はポルトガル語で *Bento*、ヘブライ語で *Ba-ruch*（と）に「祝福された者」の義）といったが、ユダヤ教團から破門されて後は同じ義のラテン名 *Benedictus* と名のつた。

『理想』（第二五五号、昭和29・8）の「スピノザ」「西洋古典解説」（高峯一愚）は、スピノザの生涯と著作について、一般むけにやさしく解説したものである。

スピノザ
島中尚志訳 『神・人間及び人間の幸福に関する短論文』（岩波書店、昭和30・1）

は、スピノザが二十七、八歳ごろ執筆したものであり、かれの思想発展の経路をたどるうえで不可欠の書という。原文が十七世紀のオランダの古文であるが、訳者はドイツ語訳（ハイデルベルヒ版『スピノザ全集』第一巻ちゅうの同書）から反訳したという。

和洋女子大学教授・大田黒作次郎述『哲学大観』（非売品、出版社不詳、昭和30・？）は、大学における哲学講義の稿本を本にしたものであるが、「第三章 一元論的考察」に、スピノザのことがすこし出てくる。著者は、スピノザのことを「屋根裏の哲学者」とよんでいる。著者によると、スピノザはデカルトが物的、心的の二元的な本体（現象界のうしろにあって、思惟「思考」によってのみとらえることができる実体）をうちたてたのを否定し、本体は唯一無二の絶対である、と主張したという。

彼は此絶対を神と呼んで居る。已に神と云ふ名をつける以上は、矢張り精神的の存在であることは自づから了解されるのである。

桂壽一著『スピノザの哲学』（東京大学出版会、昭和31・3）は、東大文学部における講義の手控えをもとに一書としたようである。本書は歴史的なスピノザの叙述や紹介にとどまらず、モノグラフ学術論文としてかれの哲学の諸問題を公平に取りあつかうことに努め、その思想を位置づけ、かつスピノザを哲学することの1つの問題をみいだそうと試みたものである。

内容は——序説（スピノザ哲学の性格、運命、先駆思想の問題、スピノザとデカルト）——「短論文」について——スピノザ哲学の方法——神と属性——無限様態——個物の世界——精神と認識——感情と人間生活——政治思想——道徳の問題——結語——からなる。

畠中尚志訳『スピノザ往復書簡集』（岩波書店、昭和33・12）は、スピノザが友人や知己十九人とかわしたすべての手紙（計八四通）を収録したものである。このあと同じ訳者による『デカルトの哲学原理 附 形而上学的思想』（岩波書店、昭和34・9）が刊行された。これはスピノザが一六六〇年から六三年にかけて、ライデン郊外の村——レインスブルフにいたときに、「短論文」「知性改善論」についてまとめた第三作にあたる（「解説」）。

岩下壮一（そういち一八八七—一九四〇、大正・昭和期のカトリック神学者）によると、汎神論者は、自我すなわち神である、絶対である、といっているという。かれのみるところ、人間の口から出ることばとして、これほど悲惨、これほどこっけいなことばはないのである。かれらはしばしば宗教をもてあそび、あまつさえその責任を回避しようとする高慢で卑怯な態度を持っているという。

著者は『神学入門 1』（中央出版社、昭和36・12）のなかでいっている。

専門学校の哲学概論の講義でさえ、修了しないうちから、臆面もなくわかりもしないスピノザとか、ヘーゲルとかふり回すこの種の青年が今の世に多いことは実に唾棄すべきことではないか。

ルカス、コレルス『スピノザの生涯と精神』（理想社、昭和37・12）は、いまに伝わるスピノザの人と哲学を知るもっとも古い伝記資料を反訳したものである。ルカス、コレルス以外にヤーリフ・イエレスの「スピノザについて」、セバステイアン・コルトホルトの「三人の欺瞞者論 序文」、ピエール・ベールの「批判的歴史事典より」その他が収められている。底本はFreudentalが編んだ*Die Lebensgeschichte Spinoza's*, Verlag von

『哲学』(第一四号、日本哲学会編、昭和39・3)に、「スピノザの直観知思想の発展について」(工藤喜作)と「スピノザに於ける自由と自己認識」(斎藤博)の論文二篇がのっている。前者はスピノザにおける神の認識(「直観知」)の発展をながめ、後者はスピノザにおける自由の問題(自己自身と神の認識)を考察したものである。

『理想』(第三七八号、昭和39・11)の「スピノザの『短論文』について」(清水礼子)は、スピノザのもっとも初期の著述『短論文』と後年の作品『知性改善論』や『エティカ』とを比べたときにみられる異質の哲学態度について論及したものである。

『スピノザ 倫理学(エティカ)他』(河出書房新社、昭和41・11)は、河出書房新社の「世界の大思想 9」にあたる。このなかにスピノザ没後に刊行された代表作三つの邦訳がおさめてある。すなわち――、

倫理学へエティカ)……………高桑純夫訳

知性改善論……………森 啓訳

政治論……………井上庄七訳

同書には、訳者らによる解題と桂寿一による「解説——時代と人 十七世紀とオランダ」が収録されている。これら三つの作品は、すでに畠中の既訳があるが、今回改訳するにあたり、訳者たちは英・独・仏の最上の版を用いて訳したようである。

『思想』(第五一四号、昭和42・4)の「スピノザの『知性改善論』について——方法と『与えられた』もの」(清水礼子)は、『知性改善論』における、神の観念について「与えられた」といった何気ないことばについて明らかにしようとしたものである。

カール・ヤスパース(一八八三〜一九六九、ドイツの哲学者。ハイデルベルクやスイスのバーゼル大学教授を歴任)が著わした「偉大な哲学者」*Die groBen Philosophen*の中におさめられている「スピノザ」*Spinoza*を反訳したものが、工藤喜作訳『スピノザ』(理想社、昭和42・9)である。これは同社の「ヤスパース選集 23」にあたる。訳者によると、本書は戦後現われたスピノザ研究書のなかでもすぐれたものの一つに数えられるという。スピノザの思想をよく消化したうえで、独自の解釈と批判をくだしているという。

下村寅太郎編『世界の名著 スピノザ ライプニッツ』（中央公論社、昭和44・8）は、合本である。スピノザの部分には、「スピノザとライプニッツ——『天才の世紀』の哲学と社会」（下村寅太郎による解説「七〇七―七四頁」）とスピノザ「エティカ」の翻訳（七七―三七二頁）が収録されている。中央公論社が新しい時代のために、「やさしく読める古典」を読者に全六十六巻提供したが、そのうちの一冊が同書である。

『理想』（第四三六号、昭和44・9）の「スピノザの倫理学」（石沢要）は、非人格的個物の倫理学に着眼して、スピノザの倫理学を概観したもので、神の認識を出発点として、スピノザの倫理学の核心があるという。

高坂正顕著『西洋哲学史』（創文社、昭和46・6）は、未完の著述として残されたものを、知友が他の著述の文章をうまく配置して、つまり補填して成った書物である。同書の「第七部 啓蒙主義の哲学」の第四十章は、スピノザの章節である（二四七―二六六頁）。このなかに見られるものは——、悟性改善論——神について——属性としての延長と精神——様態としての個物——情念と徳と淨福について——である。

「第一節 悟性改善論」に、こんな文章がみられる。

スピノザは、いかに生くべきか悩み、その故に何にもまして神を求めた。（中略）スピノザは、名誉も富も、感性的な快樂もいずれも眞の幸福を与えないことを説き、……

『思想』（第五七〇号、昭和46・12）の「スピノザ哲学における政治理論の位置」（加藤節）は、伝統的なスピノザ解釈——汎神論形而上学をめぐるものに反して——、政治思想の側から光をあてたものである。論者が本稿において狙いとしたのは、ひとつはスピノザの政治理論を倫理学との相互関連のもとに説明すること。二つはスピノザの倫理学と政治理論との一体的な解釈をくだすことにあったようだ。

工藤喜作著『スピノザ哲学研究』（東海大学出版会、昭和47・3）は、もともと学位論文として書かれたものに、その後の研究論文をつけくわえて成ったものである。全五二四頁もある大著である。本書の内容を大別すると——序論 第一部 汎神論的根源直観の形成 第二部 体系の合理化 第三部 神の認識と宗教——などからなる。

『思想』（第五七五号、昭和47・5）の「破門と哲学——スピノザ研究」（清水礼子）は、スピノザのユダヤ協会からの破門をテーマに論じたものだが、論旨がはっきりしない。スピノザ伝や研究書を抜粋点綴して論評している印象をうける。

ジョゼフ・モロー『スピノザ哲学』（白水社、昭和48・3）は、「クセジュ文庫」のうちの一冊である。著者はボルドー大学の名誉教授であり、古代哲学や十七世紀哲学にかんする研究で知られた学者であるらしい。本書の内容は——序論 第一章 スピノザ（生涯と著作）——第二章 エチカ

あるいはスピノザ主義——第三章 歴史におけるスピノザ主義——などからなる。

カルル・レーヴィット『神と人間と世界』（岩波書店・昭和48・11）の第九章は、スピノザ論「スピノーザ、神すなわち自然」である。著者によると、スピノザはじぶんが考えたことのすべてをいわなかったという。スピノザの真意は——およそ神は存在しない。信ずるに足る神、考えるに足る神、

現存する神、不在の神も存在しない——ということにあったという。だから神は、ほとんど考えるにも、言及するにも値しないのである。

齋藤博著『スピノチスムスの研究』（創文社、昭和49・3）は、学位請求論文として東京教育大学に提出されたものが母体になっている。本書は、ヨーロッパ世界における学説史的な理解から、さらに一足ふみ込んで、ヨーロッパに精神史の深層、スピノザ主義の歴史的運命をさぐることによって、スピノザ哲学の本質を照射しようとしたものである（「序」を参照）。

石沢要著『スピノザ研究』（創文社、昭和52・4）は、著者の多年の研究を世に問うたものであり、本書の内容は——知的直観——スピノザにおける *Deus quatenus*（固有思想とカバラ）、『エチカ』と弁証法——定義とスピノザ哲学——大乘仏教とスピノザの解脱論（『華嚴経』と『エチカ』）——田辺哲学におけるスピノザ——神に対する知的愛の定理——などからなる。

『思想』（第六三七号、昭和52・7）の「スピノザと自然——ヘルダーと関連して」（工藤喜作）は、スピノザの思想に親んだヨハン・ゴットフリート・フォン・ヘルダー（一七四四〜一八〇三、ドイツの哲学者・文学者）の自然観を、スピノザとの対比においてながめたものか、論旨がいまいである。論者によると、ヘルダーにおいては、自然と歴史とは、神としての「自然」の両面であったという。自然において神があるとすれば、歴史においても神があるという。

『現代哲学研究』（名古屋哲学研究会編、昭和52・12）は、研究会の会員の研究成果を十点ばかり掲載したのだが、「特別寄稿」として、^{H・ザイデル}「カール・マルクスとバルフ・スピノザ」が掲載されている。訳者によると、わが国においては、マルクス主義の観点からするスピノザ研究はすくなくばかりか、貧弱であるという。

本稿は、マルクスやエンゲルスのスピノザ言及をとりあげ、スピノザ主義とマルクス主義の関係をあきらかにしたものという（「訳者あとがき」）。

^{レオ・パレット}『レムブラントとスピノザ』（法政大学出版局、昭和53・1）の第六章は、「スピノザの哲学」（二三八〜一八六頁）である。この章

は、レムブラントとスピノザの内的関係、両者とオランダ十七世紀の生活とのあいだの相互関係などをあきらかにしようとしたものである。たとえば、レムブラントの現実主義とスピノザの唯物主義、レムブラントの無宗教性とスピノザの無神論、両人の自由への渴望などを。また著者によると、スピノザ哲学の内容と形式を理解するうえで忘れてはならぬ点は、かれが商人の出身であったということであるという。

ジル・ドゥルーズ「スピノザ」(『現代思潮』昭和53・6)は、スピノザの生涯と著述の概要をしるした記事である。
竹内良知訳

清水礼子著『破門の哲学』(みすず書房、昭和53・6)は、東京大学に提出された学位請求論文を本にしたものである。著者のスピノザ研究歴はながいが、ふつうの有機体としてのスピノザを描こうとしたという。著者はスピノザのユダヤ教会からの破門の意義と、その後のかれの生活と思想とに及ぼしたその影響をこの本のなかで説こうとしたようである。

本書の内容は——Ⅰ 破門とスピノザ——Ⅱ 開かれた円環——Ⅲ 閉された円環——Ⅳ 「与えられた」ものと哲学——註——後記——文献目録である。

著者は研究の必要上、たびたびオランダを訪れた。はじめての渡蘭は、昭和四十一年(一九六六)の夏、ついで昭和五〇年(一九七五)の夏と昭和五十二年(一九七七)の冬にも訪れた。そのつどハーグのスピノザ終えの地——パヴィリオン運河フランド通り七十二／七十四番地の「スピノザの家」と、その前にある「スピノザ像」をながめた。さらに足をのばして、近くの「新教会」(二六五六年完成)の裏庭にある「スピノザの墓」をおとずれ、花束と黙とうを捧げた。

しかし、やがてこの墓は空であり、遺骨はないことを知った。

著者は、「古い伝記は、スピノザの遺体が、死後五日目の一六七七年二月二十五日に新教会の裏庭に葬られ、永遠の憩いそいの床とこを得たと語っている」(後記)。が、この記述は、誤りである。スピノザ伝の記述をうのみにしたものである。スピノザが最初に葬られたのは、史料によると教会内の賃貸墓地一六二の区画である。

中野幸次著『エチカの形成と哲学的世界』(東京堂、昭和54・3)は、「エティカ」の形成の構造と「エティカ」が果たした哲学的役割を本書において説明しようとしたもののようなのだ。

本書の内容は——序——序説——Ⅰ エチカの前史——Ⅱ エチカの成立——Ⅲ エチカと哲学——Ⅳ 分限の花吹く丘——からなる。

中村為治訳『スピノザ倫理学（羅和対訳）』（山本書店、昭和54・8）は、六三八頁もある大著である。訳者はカール・ゲブハルト編 *Spinoza Opera* のなかの *Ethica* の原文をすべてノートに書き写し、ついで原文の一字一字に訳語をつけ、さらにその訳語をつづり合わせて日本語にしたという（「訳者はしがき」）。その労を多とせねばならない。

竹内良知著『スピノザの方法について』（第三文明社、昭和54・10）は、戦前から戦後の激動の時代のなかで、こつこつと書きためた多くの論文——著者がスピノザについて書いたものすべてを、この中に収めたものである。本書の内容は——、スピノヂスムの論理（これは昭和十六年「一九四二」京大の哲学科を出たときの卒論）——スピノザにおける「自己」の問題——スピノザ哲学における情念の問題——スピノザ哲学の方法——デカルトとスピノザ——スピノザ研究序説——からなる。

工藤喜作著『スピノザ』（講談社、昭和54・10）は、講談社の「人類の知的遺産」³⁵にあたる。本書は、三九三頁もある大著である。著者によると、本書は四部から構成されているという。この本の内容は、つぎのようになっている。

- I スピノザの思想……………スピノザ哲学の特徴と、その思想ぜんたいを概観した。
- II スピノザの生涯と思想形成……………スピノザ生誕の地オランダ、かれの生い立ちと生活とを伝記のかたちでまとめた。
- III スピノザの著作……………スピノザの著述の解題とかれの代表作を紹介した。
- IV スピノザ哲学の影響……………スピノザの同時代人によるスピノザ観やかれの哲学が後世におよぼした影響などについてのべた。

本書はスピノザ哲学の入門書としては、恰好のものである。良書である。

著者は、同書を著わした翌年『スピノザ』（清水書院 昭和55・10）を刊行した。清水書院の「人と思想」シリーズのうちの一冊である。このシリーズは、世界の有名な大思想家の生涯とその思想を、当時の社会的背景にふれながら、立体的に解明した思想の入門書という。

本書の内容は——まえがき——スピノザの時代——スピノザの生涯——スピノザの思想——あとがき（スピノザの影響）——からなる。本書はひろく一般むきに、やさしく、わかりやすく書かれている。先に著わした『スピノザ』（講談社、昭和54・10）よりも平易な印象をうける。

J・フロイデンタール『スピノザの生涯』（哲書房、昭和57・2）は、ヤーコブ・フロイデンタールの『スピノザ・生涯と教説（Jacob Freudenthal: 工藤喜作訳）』

Spinoza. Leben und Lehre. 1927, Heidelberg, Carl Winter) の第一部『スピノザの生涯』を翻訳したものである。スピノザの伝記としては、古くはルーカス、コレルス、コルトホルト、ペイルなどのものであるが、少なからず事実やスピノザの精神をゆがめている。しかし、フロイデンタールのこの本は、スピノザの生涯を明らかにする根本史料として、こんにちにおいてもその第一級の価値をうしなわないという〔あとがき〕。

この稿では明治初年から昭和五十年代あたりまでのおもなるスピノザ文献について解説してきたが、これ以後のものは、体裁や内容にふれることを控え、著者、訳者名・書名・出版社だけを掲げる。

- ビエール・マシユレ 鈴木一策、桑田禮彰訳 『ヘーゲルかスピノザか』(新評論、昭和61・1)
- 鷺田小弥太著 『スピノザの方へ 人間と人間の自然をもとめて』(三一書房、昭和62・3)
- エドウィン・カリー著 開館美、福田喜一郎訳 『スピノザ『エチカ』を読む』(文化書房博文社、平成5・9)
- 河井徳治著 『スピノザ哲学論攷——自然の生命的統一について』(創文社、平成6・6)
- 山岸昭著 『マラーノの系譜』(みすず書房、平成6・9)
- 今野健著 『スピノザ哲学考究——普遍数学の樹立と哲学の終焉』(東銀座出版社、平成6・10)
- 工藤喜作、桜井直文編 『スピノザと政治的なもの』(平凡社、平成7・5)
- イルミヤフ・ヨベル著 小野昭、E・ヨリッセン、細見和之訳 『スピノザ異端の系譜』(人文書院、平成10・5)
- 藤本吉蔵著 『スピノザ思想の原画分析』(政光ブリプラン、平成11・12)
- 柴田寿子著 『スピノザの政治思想』(未来社、平成12・2)
- 田島正樹著 『スピノザという暗号』(青弓社、平成13・6)
- 福居純著 『スピノザ『エチカ』の研究——『エチカ』読解入門』(知泉書館、平成14・9)
- 佐藤一郎著 『個と無限 スピノザ雑考』(風行社、平成16・11)
- ジル・ドゥルーズ 工藤喜作、小柴庸子、小谷晴勇訳 『スピノザと表現の問題』(知泉書館、平成14・9)。注・同書は法政大学出版局から再刊〔平成18・10〕
- 浅野俊哉著 『スピノザ共同性のポリティクス』(洛北出版、平成18・3)

- ベネディクトゥス・デ・スピノザ 『スピノザ エチカ抄』(みず書房、平成19・3)
 伊藤一郎編訳
- 渡辺義明著 『スピノザの社会思想——多数者の哲学を求めて』(かりばね書房、平成19・3)
- 福岡安都子著 『国家・教会・自由 スピノザとホッブズの旧約テキスト解釈を巡って対抗』(東信堂、平成19・12)
- 松田克進著 『スピノザの形而上学』(昭和堂、平成21・6)
- 福居純著 『スピノザ「共通概念」試論』(知泉書房、平成22・9)
- 国分功一郎著 『スピノザの方法』(みず書房、平成23・1)
- エティエンヌ・バリバル著 『スピノザと政治』(水声社、平成23・2)
 水崎一憲訳
- 河井徳治著 『スピノザ エチカ』(晃洋書房、平成23・6)
- アントニオ・ネグリ 『スピノザとわたしたち』(水声社、平成23・11)
 信友建志訳
- ジャン・クレール・マルタン 『フェルメールとスピノザ』(以文社、平成23・12)
 杉村昌昭訳
- 朝倉友海著 『概念と個別 スピノザ哲学研究』(水声社、平成24・3)
- 大津真作著 『思考の自由とはなにか——スピノザとシモン・ランゲにおける自由』(晃洋書房、平成24・11)
- 河村厚著 『存在・感情・政治——スピノザへの政治心理学的接近』(関西大学出版部、平成25・3)
- アルフォンソ・カロオラート、ジャン・リュック・ナンシー著 『神の身振り スピノザ『エチカ』における場について』(水声社、平成25・5)
 藤井千佳世訳
- 塩田冬彦著 『スピノザから仏陀へ 修行としてのスピノチズム』(ブイツーソリューション、平成26・5)
- 上野修著 『スピノザ「神学政治論」を読む』(筑摩書房、平成26・6)

一 本稿で取りあげたスピノザ関連文献資料名一覧表

〔明治期〕

西 周

特別講義「百学連還 第二篇」(明治三年十一月ごろ、西はこのなかでスピノザの人と著作に簡単にふれた)(『西周全集 第一巻』所収、日本評論社、昭和20・2)

〃	百学連還の覚書（メモ）、前掲全集、第一巻所収。
〃	「生性発蘊 第一巻」ちゅう「第一篇 源二派リ宗ヲ開ク」に、スピノザのことが出てくる。麻生義輝編『西 学著作集』所収、岩波書店、昭和8・10）
西村茂樹	「心学 畧伝 上」（『東京学士会院雑誌 第五編』、明治16・4）
ジョージ・ヘンリー・ルイス 和田瀧次郎訳	『哲学通鑑』（石川書房、明治17・1）
加藤弘之	「自由史 草稿 第四」〔明治17・4ごろのもの〕（『加藤弘之文書 第一巻』所収、同明舎出版、平成2・8）
〃	ブリュンティエール（一八四九〜一九〇六、フランスの文学史家、批評家）の独訳 <i>Der Freiheit und Gewalt</i> の摘要 （スピノザ論を筆写）
	『改訂 増補 哲学学彙 全』（東洋館発兌、明治17・5）
アルフレッド・ジュール・エミ ール・フイエ著 中江兆民訳	『理学沿革史 上下』（文部省編輯局、明治19・2〜4）
中江兆民著	『理学鈞玄 全』（集成社、明治19・6）
井上円了著	『哲学要領 前編』（四聖堂蔵版、明治19・9）
三宅雄次郎 ^{（雷嶺）}	「近世哲学（接前々号）」（『中央學術雑誌』四六号、明治20・2）
小崎弘道	「論説 有神哲学」（『哲学会雑誌』第八号、明治20・9）
西堂居士	「批評論」（『国民之友』第二二号、明治21・5）
	「理学宗の駁撃」（『日本人』第八号、明治21・8）
尺振八訳 ^{（せきしんぼち）}	『明治 英和字典』（六合館蔵版、明治22・3）
和田維四郎	「職工ノ保護」（『学林』第二号、明治22・11）

三宅雪嶺著	『哲学涓滴 全』（文海堂、明治22・11）
山口虎太郎	「アリストテレスと忍月居士」〔『文学評論』 志からみ草紙』第一〇号、明治23・7）
	「莊学発蘊」〔『城南評論』 第一号、明治25・3）
井上哲次郎	「欧州哲学の近況（前号の続）」〔『東洋学芸雑誌』 第二一七号、明治24・5）
藤村居士	「理学 哲学——一元論と二元論」〔『教育時論』 第二五四号、明治25・5）
藤島了穩	「学淵 比較宗教学 講義第五回」〔『反省会雑誌』 第七年・第五号、明治25・6）
中島力造	「自由意志ト必至論」〔『哲学雑誌』 第六八号、明治25・10）
大西祝	「先哲スピノザの性行」〔『六合雑誌』 第一三一号、明治25・?）
中島力造	「哲学史上カントの位置」〔『六合雑誌』 第一四四号、明治25・?）
	「雑録 テーラの死去（仏国文学界復一明星を失ふ）」〔『国民之友』 第一八五号・第二二卷、明治26・3）
北村透谷	「人生の意義」〔『文学界』 第五号、明治26・5）
新井虎南訳	「和蘭の美学」〔『文学評論』 志からみ草紙』 第四五号、明治26・6）
高島平三郎	「理科 哲学 庶遍波哲学大概」〔『教育時論』 第二九三号、明治26・6）
久津見藤村	「理科 哲学 ヘーゲル後の哲学」〔『教育時論』 第三一〇号、明治26・11）
井上円了述	「論説 哲学祭演説「カント略伝」」〔『天則』 第六編・第六号、明治26・12）
久津見息忠	「ヘーゲル後ノ哲学（第三シヨペンハワーノ続）」〔『教育時論』 第三二五号、明治27・1）
森田久万人	「論説 哲学の勧め」〔『同志社文学』 第七四号、明治27・2）
渋江保著	『哲学大意 全』（博文館、明治27・2）

鈴木大拙稿	「妄想録（其二）」『日本人』第六一号、明治31・2
	「天才に就て」『女学雑誌』第四五〇号、明治30・9
	「天才と人種及階級」米国学士会報告クローリー氏」『月刊世界之日本』第一九号、明治30・9
シエゲ太郎	「天才修業」『反省雑誌』第一二年・第八号、明治30・8
	「見真似聞真似」天才修業」『反省雑誌』第一二年・第八号、明治30・8
	『新撰百種 哲学問答 全 第一号』（普及舎、明治30・7）
フォン、コエーベル講 下田次郎訳	『哲学要領 全』（南江堂書店、明治30・6）
かにえよじまる 蟹江義丸	「カリエールが美学の立脚地」『帝国文学』第三卷・第一号、明治30・1
〃	「厭世家としての『シヨツペンハウエル本論』」『反省会雑誌』第一二年・第一〇号、明治29・11
広田一乗	「厭世家としての『シヨツペンハウエル』」『反省会雑誌』第一二年・第九号、明治29・10
	「文学 第六——進化学の哲学に及せる影響」『太陽』第一八号、明治29・8
	「経験論者と『カント』との関係」『六合雑誌』第一八四号、明治29・4
中島徳蔵	「宗教の定義を論ず」『六合雑誌』第一七〇号、明治28・2
原田 助	「学海 東洋哲学研究の必要を論ず（承前）」『青山評論』第四八号、明治27・6
浅井豊久	「論説 有神哲学上の三大観念（第七号の続）」『心海』第一〇号、明治27・6
石川喜三郎	「フ井ヒテ (Fichte) Ⅱ 学者の天職」『六合雑誌』第一六二号、明治27・6
高橋五郎	「雑記 歴史の価値と厭世思想」『六合雑誌』第一六一号、明治27・5
U・K	「カント前の美論の大勢」『早稲田文学』第六一号、明治27・4

藤井健治郎	「論説——湖上詩人を憶ふ」(『帝国文学』第四卷・第二号、明治31・2)
綱島栄一郎 <small>(栄川)</small>	『倫理問題の発達』(明治31～32)ごろの稿? 東京専門学校文学科講義録
中島力造著	「病中囁語」◎スピノザの気魄 <small>(きはく)</small> 」(『日本人』第六四号、明治31・4)
蟹江義丸	『列伝体西洋哲学小史』(富山房、明治31・6)
井上円了講述	「論説 韓圖 <small>(カント)</small> の哲学」(『哲学雑誌』(第一三卷・第一三七号、明治31・7)
蟹江義丸著	「海外彙報——風景と文学」(『太陽』第四卷・第一八号、明治31・9)
井上円了講述	『通俗講談 言文一致 哲学早わかり』(開発社、明治32・2)
蟹江義丸著	『西洋哲学史』(博文館、明治32・8)
	「問答」(『教育時論』第五四〇号、明治33・4)
	「問答」(『教育時論』第五五九号、明治33・10)
波多野精一	「雑録 スピノザに関する一新著」(『哲学雑誌』第一五卷・第一六四号、明治33・10)
〃	「倫理法の必然的基礎 (一) 哲学的証明」(『哲学叢書』第一卷・第一集、明治33・11)
三宅雪嶺述	『近世哲学史』(哲学館第十二学年度 高等教育学科講義録 明治33・?)
成富正義述	「カントの教育説(上)」(『教育時論』第五六五号、明治34・1)
波多野精一著	『西洋 哲学史要』(大日本図書株式会社、明治34・11)
井上哲次郎	「無神無靈魂説の是非如何 <small>(ぜひいかん)</small> 」(『太陽』第八卷・第二号、明治35・1)
在キール 姉崎正治 <small>(まさはる)</small>	「海外通信 高山君に贈る(承前)」(『太陽』第八卷・第四号、明治35・4)
元良勇次郎 <small>(もとら)</small>	「哲学の変遷と新系統」(『東洋哲学』第九編・第七号、明治35・7)

朝永三十郎編 <small>ともなが</small>	『哲学綱要』（宝文館、明治35・11）
後藤宙外	「答梁川兄書」（『新小説』（第七年・第一一巻、明治35・11） <small>こたえるりょうせんけいしよ</small>
綱島梁川著	『西洋倫理学史』（『早稲田叢書』ちゅうの一篇、明治35年末刊行？
高橋五郎著	『最近一元哲学』（前川文栄閣、明治36・9） <small>最近 いちげん</small>
大西祝著	「彙報 時報——独断主義」（『東洋哲学』第一〇編・第一二号、明治36・12）
犁牛 <small>りぎゅう</small>	『西洋哲学史（下巻）』（警醒社書店、明治37・1） 「時評 輓近の思想界を論じて、吾人の態度を明かにす」（『時代思潮』第一号、明治37・2） <small>ばんきん</small> <small>ごじん</small> <small>あきざら</small>
北沢定吉	「応問——哲学と倫理学との関係」（『東洋哲学』第一一編・第四号、明治37・4）
芝田徹心	「論説 心学を論ず」（『東洋哲学』第一一編・第八号、明治37・9）
岡田誘著	「講談 宗教学概論」（『警世新報』第一〇三号、明治39・11）
北沢定吉 宮地猛男 共編	『最近 西洋哲学史』（博文館、明治39・11） <small>最近</small>
金子馬治 <small>うまじ</small>	『哲学汎論』（弘道館、明治40・5）
S・S生	「理想化文芸と人生発展の観念」（『早稲田文学』第二四号、明治40・11）
朝永三十郎	「雑録 スピノザの生涯」（『東洋哲学』第一四編・第一一号、明治40・12）
戸水寛人	「哲学と時代」（『哲学雑誌』第二四七号、明治40・？）
綱島政治著	「ヘーゲルの哲学」（『東洋哲学』第一五編・第九号、明治41・9）
波多野精一著 安倍能成訳	『欧州倫理思想史』（杉本梁江堂、明治42・10） <small>りょうこう</small> 『スピノザ研究』（警醒社書店、明治43・4）。注・ドイツ文からの邦訳。

朝永三十郎	「シヨーペンハウエルの哲学」(『倫理講演集』第一〇二号、明治44・2)
得能文 <small>とくのうぶん</small>	「スピノーザ」(『東洋哲学』第一八編・第六号、明治44・6)
加藤弘之著	『自然と倫理』(実業之日本社、明治45・3)
得能文	「民之声——新しければ真理なりと思ふ迷信」(『国民雑誌』第三卷・第八号、明治45・4)
田中喜一	「真理の問題に関するオイケン教授の説」(『東洋哲学』第一九編・第五号、明治45・5)
〔大正期〕	「プラグマチズムの後」(『哲学雑誌』第二七卷・第三〇〇号、明治45・12)
桑木敞翼著	『哲学綱要』(早稲田大学出版部、大正元・12)
久保良英 宇井伯壽 共訳	『哲学概論』(弘道館、大正2・1)
鷲尾正五郎	「噫 スピノーザ！」(『倫理講演集』第二二八号、大正2・4)
小尾範治	「雑録 スピノーザ哲学に於ける統一の觀念に就いて(承前)」(『哲学雑誌』第三一五号、大正2・?)
かのこきかずのぶ 鹿子木員信	「哲学の使命」(『倫理講演集』第一三七号、大正3・1)
ロージャリス原著 藤井健治郎 合訳 北吟吉訳	『西洋哲学史』(富山房、大正3・2)
朝永三十郎	「近世に於ける我の自覚史(一)」(『倫理講演集』第一三八号、大正3・2)
〃	「近世に於ける『我』の自覚史(九)」(『倫理講演集』第一三八号、大正3・3)
桑木巖翼著	『五大哲学者』(金尾文淵堂、大正3・3)
宮地猛男著	『哲学とは何ぞや』(応来社書房、大正3・7)

紀平正美 <small>きひらただよし</small>	「スピノーザよりヘーゲル」(『東洋哲学』第二一編・第八号、大正3・8)
朝永三十郎	「近世に於ける『我』の自覚史(一六)」(『倫理講演集』第一四四号、大正3・8)
伊達源一郎編輯	『代現書叢』 「オイケン」(民友社、大3・9)
大西祝著	『西洋哲学史』(警醒社書店、大正3・10)
村岡典嗣訳 <small>つねつぐ</small>	『ウインデルバント 近世哲学 第壹巻 近世初期の部』(内田老鶴圃、大正3・11)
鹿子木貞信	「哲学的精神——スピノーザ」(『哲学雑誌』第三二十九号、大3・?)
朝永三十郎	「独逸思想と軍国主義」(『倫理講演集』第二五〇号、大正4・2)
鹿子木貞信	「孤高のスピノーザ」(『文明と哲学的精神』慶応義塾出版局、大正4・12)
朝永三十郎著	『近世に於ける『我』の自覚史——新理想主義と其背景』宝文館、大正5・1)
朝永三十郎	「フィヒテの宗教哲学の発展」(『哲学研究』第一巻・第六号、大正5・9)
〃	「フィヒテの宗教哲学の発展「完結」」(『哲学研究』第一巻・第八号、大正5・11)
下沢瑞世	「材能態度の類型差異を論じ 生命終息曲線に及ぶ(一)」(『東洋哲学』第二四篇・第一号、大正6・1)
出隆 <small>いで たかし</small>	「スピノーザ哲学に於ける認識問題」(『哲学会雑誌』第三六八号、三六九号、三七〇号、三七二号、大正6・?〜大正7・2)
ヘフディング著 北吟吉訳	『近世哲学史 上巻』(早稲田大学出版部、大正6・12)
出隆	「スピノーザ哲学に於ける認識問題(完)」(『哲学雑誌』第三三卷・第三七二号、大正7・2)
小尾範治訳	『スピノーザ 哲学体系(原名 倫理学)』(岩波書店、大正7・3)。注・これは岩波文庫本。

〃	『スピノザ哲学体系（エチカ）』（岩波書店、大正7・4）。注・これは菊版、五〇〇頁もある大著。
帆足理一郎 <small>ほあし</small>	「宗教と人格」〔『六合雑誌』第四五五号、大正7・7〕
柴田安正 綾川武治 香原一勢 共著	『哲学総論』（東京刊行社、大正8・7）
小尾範治	「近世哲学に於ける自然主義対理想主義の抗争」〔『哲学雑誌』第四一九号、大正11・1〕
島本愛之助	「カント以前の道徳的感情論」〔『倫理講演集』第二三四号、大正11・2〕
高木八太郎著	『東西思潮講話』（共益社、大正14・2）
橋本文壽著	『哲学の要領』（宝文館、大正14・3）
鈴木龍司著	『近 代 哲学概論』（右文書院、大正15・5）
加藤玄智著	『東西思想の比較研究』（京文社、大正15・9）
浜尾俊治著	『通 俗 哲学講話』（大盛堂書店、大正15・10）
〔昭和期——前期（昭和初期から終戦まで）〕	
隆高鑑	「スピノザ哲学 <small>に於ける</small> 徳論の構成 <small>に就いて</small> （完）」〔『哲学雑誌』第四八〇号、昭和2・1〕
金子馬治著	『哲学概論』（早稲田大学出版部、昭和2・11）
松原 寛 西野錦治 共訳	『アス ター 近世哲学史』（日本大学出版部、昭和4・4）
島 芳夫	「スピノザ哲学の方法に就て」〔『哲学研究』第一五卷・第一六六号、昭和5・1〕
畠中尚志訳 <small>なおし</small>	『スピノザ 知性改善論』（岩波書店、昭和6・4）
斎藤 响訳 <small>しょう</small>	『スピノザ全集 第一卷』（内田老鶴圃、昭和7・4）

〃	『スピノザ全集 第二巻』(内田老鶴圃、昭和8・11)
廣瀬文豪	『スピノザとヘーゲル』(岩波書店、昭和7・7)
島中尚志	『スピノザの哲学』(『哲学改造』第一号、昭和7・8)
渡利弥生	「スピノザ生誕記念日を迎えて」[上][中][下] (『東京朝日新聞』昭和7・11・12) 11・24
桑木巖翼	「スピノザの自然権について」(『Philosophia 哲学年誌』早稲田大学文学部編・第二巻、昭和7・11)
篁 実 <small>たかむら</small>	「危機の哲学とスピノザ及びロック」(『哲学雑誌』第四七巻・第五〇号、昭和7・12)
ミリーチン ラリツェウィチ著 広島定吉訳	「スピノザと弁証法的唯物論」(ナウカ社、昭和8・9)
高橋ふみ	「スピノザに於ける個物の認識に就て」(『文化』第一巻・第五号、昭和9・1)
鈴木謙彰訳編	『スピノザ哲学批判』隆章閣、昭和9・2)
安倍能成	「スピノザの人間観」(『理想』第五〇号、昭和9・10)
安倍能成著	『スピノザ 倫理学』(岩波書店、昭和10・8)
桑木巖翼著	『哲学及哲学史研究』(岩波書店、昭和11・2)
斎藤响著	『哲学概論』(内田老鶴圃、昭和11・7)
樺 <small>かんば</small> 俊雄著	『京城帝国大学創立十周年 記念論文集 哲学篇』(第四号、昭和11・11)
篁 実著	『哲学史提要』(同文館、昭和11・12)
	『スピノザ』(弘文堂書房、昭和12・2)

斎藤 响著	『哲学読本』(内田老鶴圃、昭和13・4)
桑木巖翼著	『プラトン講話』(春秋社、昭和13・4)
稲富栄次郎著	『スピノザの哲学——神の認識の問題を中心として』(理想社出版部、昭和14・1)
桂 壽一 <small>かつら じゅいち</small>	『Comatusの概念とスピノーザ哲学』(『哲学雑誌』第五四卷・第六三二号、昭和14・10)
ウイル・デュラント 陶山 務訳	『哲学夜話』(第一書房、昭和15・5)
スピノザ 島中尚志訳	『国家論』(岩波書店、昭和15・12)
九鬼周造著 <small>くきしゅうぞう</small>	『西洋近世哲学史稿 上』(岩波書店、昭和19・11)
〔昭和期——後期(戦後)〕	
アンナ・ツマルキン 新福敏二訳	『スピノザ』(『哲学叢書 第10輯』河出書房、昭和20・10)
ロマン・ロラン著 宮本正清訳	『エムピドクレスとスピノザ』(岩波書店、昭和21・9)
渡辺義晴	『古典解説スピノザの『エチカ』』(『哲学評論』第二卷・第四号、昭和22・9)
高坂正顕著 <small>たかさき まさあき</small>	『スピノーザの哲学』(玄林書房、昭和22・10)
帆足理一郎	『西洋哲学史』(野口書房、昭和23・8)
ゲプハルト著 豊川昇訳	『スピノザ概説』(創元社、昭和23・10)
竹内良知	『スピノザ哲学における情念の問題』(『哲学雑誌』第六三卷・第七〇一号、昭和23・11)
戸頃重基著	『宗教と唯物弁証法』(白揚社、昭和23・11)
ルカス、コレルス 山元一郎訳編	『スピノザの生涯』(弘文堂、昭和24・6)。注・これは「アテネ文庫」のうちの一冊。

渡辺義晴著	『資本主義黎明期の哲学——スピノザの社会思想』（刀江書院、昭和25・9）
高峯一愚 スピノザ 畠中尚志訳	「スピノザ」『哲学古典解説』（『理想』第二五五号、昭和29・8）
大田黒作次郎著	『神・人間及び人間の幸福に関する短論文』（岩波書店、昭和30・1）
桂 壽一著	『哲学大観』（非売品、出版社不詳、昭和30・？）
畠中尚志訳 スピノザ	『スピノザの哲学』（東京大学出版会、昭和31・3）
岩下壮一 そういち	『スピノザ往復書簡集』（岩波書店、昭和33・12）
ルカス、コレルス 渡辺義雄訳	『デカルトの哲学原理 附 形而上学的思想』（岩波書店、昭和34・9）
工藤喜作	『神学入門 1』（中央出版社、昭和36・12）
斎藤 博	『スピノザの生涯と精神』（理想社、昭和37・12）
清水礼子	「スピノザの直観知思想の発展について」（『哲学』、第二四号、日本哲学会編、昭和39・3）
スピノザ 高桑純夫 森 啓共訳 井上庄七	「スピノザに於ける自由と自己認識」（同右）
清水礼子	「スピノザの『短論文』について」（『理想』第三七八号、昭和39・11）
カール・ヤスパース 工藤喜作訳	『スピノザ 倫理学（エティカ）他』（河出書房新社、昭和41・11）
下村寅太郎編	「スピノザの『知性改善論』について——方法と『与えられた』もの」（『思想』第五一四号、昭和42・4）
石沢 要	『スピノザ』（理想社、昭和42・9）
	『世界の名著 スピノザ ライブニッツ』（中央公論社、昭和44・8）
	「スピノザの倫理学」（『理想』第四三六号、昭和44・9）

高坂正顕著	『西洋哲学史』（創文社、昭和46・6）
加藤 節	「スピノザ哲学における政治理論の位置」（『思想』第五七〇号、昭和46・12）
工藤喜作著	『スピノザ哲学研究』（東海大学出版会、昭和47・3）
清水礼子	「破門と哲学——スピノザ研究」（『思想』第五七五号、昭和47・5）
ジョゼフ・モロー 竹内良知訳	『スピノザ哲学』（白水社、昭和48・3）。注・これは「クセジュ文庫」のうちの一冊。
カルル・レーヴィット 柴田治三郎訳	『神と人間と世界』（岩波書店、昭和48・11）
斎藤 博著	『スピノチスムスの研究』（創文社、昭和49・3）
石沢要著	『スピノザ研究』（創文社、昭和52・4）
工藤喜作	「スピノザと自然——ヘルダーと関連して」（『思想』第六三七号、昭和52・7）
H・ザイデル 吉田千秋訳	「カール・マルクスとバルフ・スピノザ」（『現代哲学研究』名古屋哲学研究会編、昭和52・12）
レオ・パレット 奥山秀美訳	『レムブラントとスピノザ』（法政大学出版局、昭和53・1）
ジル・ドゥルーズ 竹内良知訳	「スピノザ」（『現代思潮』、昭和53・6）
清水礼子著	『破門の哲学』（みすず書房、昭和53・6）
中野幸次著	『エチカの形成と哲学的世界』（東京堂、昭和54・3）
スピノザ原著 中村為治訳	『スピノザ倫理学（羅和対訳）』（山本書店、昭和54・8）
竹内良知著	『スピノザの方法について』（第三文明社、昭和54・10）
工藤喜作著	『スピノザ』（講談社、昭和54・10）
〃	『スピノザ』（清水書院、昭和55・10）

	J・フロイデントール 工藤喜作訳	『スピノザの生涯』(哲書房、昭和57・2)
	ピエール・マシユレ 鈴木一策、桑田禮彰訳	『ヘーゲルかスピノザか』(新評論、昭和61・1)
	鷲田小弥太著	『スピノザの方へ 人間と人間の自然をもとめて』(三一書房、昭和62・3)
	〔平成期〕	
	エドウィン・カーリー著 開龍美、福田喜二郎訳	『スピノザ 『エチカ』を読む』(文化書房博文社、平成5・9)
	河井徳治著	『スピノザ哲学論攷——自然の生命的統一について』(創文社、平成6・6)
	山岸昭著	『マラーノの系譜』(みすず書房、平成6・9)
	今野建著	『スピノザ哲学考究——普遍数学の樹立と哲学の終焉』(東銀座出版社、平成6・10)
	工藤豊作、桜井直文編	『スピノザと政治的なもの』(平凡社、平成7・5)
	イルミヤフ・ヨベル著 小野昭、E・ヨリッセン、 細見和之訳	『スピノザ異端の系譜』(人文書院、平成10・5)
	藤本吉蔵著	『スピノザ思想の原画分析』(政光プリプラン、平成11・12)
	柴田寿子著	『スピノザの政治思想』(未来社、平成12・2)
	田島正樹著	『スピノザという暗号』(青弓社、平成13・6)
	福居純著	『スピノザ 『エチカ』の研究——『エチカ』読解入門』(知泉書館、平成14・9)
	佐藤一郎著	『個と無限 スピノザ雑考』(風行社、平成16・11)
	ジル・ドゥルーズ 工藤喜作、小柴庸子、小谷晴勇訳	『スピノザと表現の問題』(知泉書館、平成14・9)。注・同書は法政大学出版局から再刊〔平成18・10〕
	浅野俊哉著	『スピノザ共同性のポリティクス』(洛北出版、平成18・3)

ベネディクトゥス・デ・スピノザ 伊藤一郎編訳	『スピノザ エチカ抄』（みすず書房、平成19・3）
渡辺義明著	『スピノザの社会思想―多数者の哲学を求めて』（かりばね書房、平成19・3）
福岡安都子著	『国家・教会・自由 スピノザとホッブズの旧約テキスト解釈を巡って対抗』（東信堂、平成19・12）
松田克進著	『スピノザの形而上学』（昭和堂、平成21・6）
福居純著	『スピノザ「共通概念」試論』（知泉書房、平成22・9）
国分功一郎著	『スピノザの方法』（みすず書房、平成23・1）
エティエンヌ・バリバール著 水崎一憲訳	『スピノザと政治』（水声社、平成23年・2）
河井徳治著	『スピノザ エチカ』（晃洋書房、平成23・6）
アントニオ・ネグリ 信友健志訳	『スピノザとわたしたち』（水声社、平成23・11）
ジャンロクレールマルタン 杉村昌昭訳	『フェルメールとスピノザ』（以文社、平成23・12）
朝倉友海著	『概念と個別 スピノザ哲学研究』（水声社、平成24・3）
大津真作著	『思考の自由とはなにか―スピノザとシモン・ランゲにおける自由』（晃洋書房、平成24・11）
河村厚著	『存在・感情・政治―スピノザへの政治心理学的接近』（関西大学出版部、平成25・3）
アルフォンソ・カリオライト、 ジャンリュック・ナンシー、 藤井千佳世、の場寿光訳	『神の身振り スピノザ「エチカ」における場について』（水声社、平成25・5）
塩田冬彦著	『スピノザから仏陀へ 修行としてのスピノチズム』（ブイツーソリューション、平成26・5）
上野修著	『スピノザ「神学政治論」を読む』（筑摩書房、平成26・6）

注・わが国にはまだくわしい「スピノザ文献書誌」はないようである。筆者は「日本におけるスピノザ文献」を執筆するにあたり、じっさい手にとり、目にふれたものだけを取りあげたが、遺漏なくすべての文献資料にふれたわけではない。もれこぼれたものもたくさんあるはずである。

本稿がより完全な書誌が生れるまでの足場材料になれば幸いである。

なお大まかな邦語文献を紹介したものに、つぎのようなものがある。

- 参考文献 邦訳書 参考書(二二二～二二三頁) …………… 工藤喜作著『スピノザ』(清水書院、昭和54・10)
- 文献案内 邦訳書 日本の参考文献(三九一～三九三頁) …………… 工藤喜作『スピノザ』(講談社、昭和54・10)
- 邦語文献紹介(二一九～二二〇頁) …………… 中尾隆司著『スピノザ』(行路社、昭和54・11)

一 スピノザと日本

日本人がはじめて西洋哲学(スコラ、ギリシャ哲学)と接触したのは、文禄三年(一五九四)のことであり、天草の学院^{コレジオ}においてであった。日本人神学生は、このときゴメス神父が編んだ『神学綱要』^{コンベンツアム}をテキストとして教わった。が、家康が禁教令を全国に公布するにおよび、哲学教育はついでに。

江戸時代、高野長英(一八〇四～五〇、江戸後期の蘭学者)は、「聞見漫録」^{ぶんけんまんろく}(ヨーロッパ哲学史の概略のようなもの)において、ギリシャのタレス、デカルト、ライブニッツ、ジョン・ロックあたりまで、簡単にその学説にふれたが、スピノザの名は出てこない。しかし、純然たる西洋哲学の萌芽がわが国の思想史にすがたをみせはじめるのは、文久二年(一八六二)ごろのことである。当時、蕃書調所に出仕していた西周助(一八二九～九七)と津田真道(一八二九～一九〇三)は、哲学の講義案(ギリシャ哲学史)¹のようなものを企てた。が、両人はオランダ留学の途にのぼることになり、この計画は断ち切れとなった。

両人はオランダ滞在中に、カント、コント、ミル、オプゾマーその他の諸学説にふれた可能性があるが、西洋哲学がわが国に本格的に移入されたのは、二人が帰国した慶応元年(一八六五)以後のことであった。日本における哲学の発達史をながめると、それは外国哲学の輸入と移植のそれであったような観がある。

日本における西洋哲学移植史の変遷を理解しやすくするために、時代的に区分して叙述するのが得策であろう。筆者は明治期の哲学を便宜上四期にわけ、大正期は一期に、昭和期は戦前・戦後の二期に、平成期は一つに、それぞれわけることにした。そのような哲学史の流れのなかで、本稿の中心的存在であるスピノザは、どのような地位を占めるのか考えてみたい。

ある人は、明治維新から大正にいたる時代の日本の思想史を評してこんな風にいっている。第一は粗放な模倣時代——なんでもかんでも外国の文物ならうのみにした。くわしく調査研究することなく、皮層的に学んだだけの時代。西洋哲学に眩惑し、それを翻訳したり、その内容について解説した時代。⁽²⁾

またある人は、こうもいっている。明治の四十五年間および大正の数年間を西洋哲学輸入時代という、と。

〔明治期〕

第一期（明治初年から同二十年代ごろまで）……明治初年は旧習や伝統を一洗し、あたらしい時代にみあった革新を旨とした時期ともいえる。この時期、福沢諭吉の实利主義（現実の利益を重視する精神的傾向）や実利主義の主張をもってはじまり、明治十年前後に西 周や中江兆民らは、英仏の実証主義（形而上学的思弁を排して、事実を根拠として、観察や実験により理論をたしかめてゆく立場、自然の利用を主眼とする）を輸入し、また外山正一らは英米の進化論的哲学を普及させた。⁽³⁾

明治初年は、徳川時代の残滓^{ざんじ}である儒教がまだ勢力を張っていた。当時の西洋哲学は、実用的な政治思想としてあるいは生活をよくするための手段として輸入された。たとえば、英仏思想としては、ミルやスペンサーの政治論やベンサム功利説（最大多数の最大幸福をとく）、ルソーの民約説や天賦人權論、モンテスキューの法理論、加藤弘之のドイツ書をより所とする政治的啓蒙運動の時期であった。

第一期の西洋哲学の輸入と紹介は、純粹哲学というより啓蒙活動や実用主義の一環としておこなわれたように思われる。この二十年ほどの間に、じつにたくさんの政治思想文献が刊行されているが、純正哲学関連の著訳書がさかんに刊行されるようになるのは、明治十六年（一八八三）以降のことである。

スピノザについていえば、江戸時代オランダの書物を通じて同人について識った蘭学者は、おそらく皆無であったろう。が、明治になってスピノザに目をとめ、その人と学説について語る日本人が現われた。西 周である。かれは明治三年十一月（一八七〇）〜七二、一二）ごろ、浅草の私塾（育英舎）の特別講義において、英書によってスピノザの生いたちとその学説について簡単にふれた。おそらく、西こそスピノザを紹介した最初のひとであったと思われる。しかし、かれは原典から直かに研究したわけではなく、主として欧米の哲学史によったのである。西につづいたのは西村茂樹である。かれはヨーロッパにおける哲学の沿革にふれ、この中で「士畢諾撤^{スピノザ}」に言及した。

明治十七年（一八八四）一月——西の哲学講義のタネ本のひとつ、ジョージ・ヘンリー・ルイスが著わした『列伝哲学史』（一八五七年）の邦訳、『哲学通鑑』（石川書房）が刊行された。同書の「第二編 近代哲学」に、スピノザ伝とスピノザの学説に関する叙述があるようだが、筆者はまた見ていない。

同年四月から翌年六月にかけて、——加藤弘之はブリュンティエールの独訳本をよみ、そこにみられるスピノザの天賦人權説についての要点を書きぬいた。

明治期、スピノザの名がはじめて活字となったのは、西村茂樹の哲学的叙述「心学畧伝」（『東京学士会院雑誌 第五編』所収、明治16・4）においてであろうが、明治十七年五月——『改訂 増補 哲学学彙 全』（東洋館発兌）に、Spinozism（英・「スピノザの哲学説」「スピノザ主義」「スピノザ哲学信奉者」の意）の語がみられ、その訳語は「スピノザ士邊撤学派」となっている。

明治二十年代——哲学者としてのスピノザの名は、ほとんど知られていなかったと思われるが、フランスの哲学者、社会学者であるアルフレッド・フィエの『哲学史』（二八七九）の翻訳『理学治革史』（上下二巻、文部省編輯局、明治19・3〜4）が刊行されるに及んで、スピノザの人物説の大意が世間に知られるようになったと思われる。本書には訳者名がしるされていないが、中江兆民が文部省からのまれて訳したしごとである。同年兆民はまた一種の哲学概論である『理学鉤玄（うげん） 全』（集成社、明治19・6）を公刊している。かれはこのなかで、スピノザの汎神論・神説・道徳などについて記している。井上円了は『哲学要領 前編』（四聖堂蔵版、明治19・9）において、三宅雄二郎は「近世哲学（接前々号）」（『中央学術雑誌』四六号所収、明治20・2）において、それぞれスピノザ思想の大意について簡単にふれている。

“有神哲学”（論）とは、宇宙は神が創造したものであると主張する説であるが、「有神哲学」（小崎弘道）（『哲学会雑誌』第八号所収、明治20・9）にみられる小記事は、ルナン（一八二三〜九二、フランスの思想家・宗教史家）が、スピノザ生誕二百年祭にさいして、ハーグでおこなった演述（一八七七年二月十二日）の内容を紹介したものである。ルナンは、スピノザはひじょうの敬神家であったという、シュライエルマハー（一七六八〜一八三四、ドイツのプロテスタント神学者）のスピノザ評を引用している。

第二期（明治二十年ころから同三十年ころまで）……わが国に「哲学会」というものが創立されたのは、明治十七年（一八八四）一月であり、つぎに日本哲学界唯一の学術雑誌『哲学会雑誌』（のち『哲学雑誌』と改題）が発刊されたのは、明治二十年（一八八七）二月であった。当時の



晩年のフォン・ケーベル教授



ケーベルの弟子・岩下壮一神父

会員数は、六十六名であった。

開成所の後身——東京大学が明治十年（一八七七）に創立されて以来、お雇い哲学教師として、フェノロサ（米）、クーパー（英）、ブッセ（独）などが招へいされ教鞭をとった。明治二十六年（一八九三）大学に講座制（教授の担当）がしかれ、井上哲次郎、フォン・ケーベル、桑木敬翼などが就任した。⁽⁴⁾ 東京大学においてはドイツ哲学が講じられ、ヘーゲル、カント、イェリング、ショーペンハウアー、ヒューム、ヴント、ハルトマン、パウルゼン、フィッシャー、ウィンデルバント、バークレー、ジェームズなどの学説が紹介された。

この間の大学や私立の学校におけるスピノザ講義についていえば、フォン・ケーベルは明治二十六年（一八九三）の秋から冬にかけて、東大においてスピノザに言及し、最大級の賛辞をよせ、明治四十年（一九〇七）にはスピノザを講義するとき、毎時間『エティカ』や手紙の抜粋を洋型紙三、四枚ずつもってきて、授業がおわると、それを学生の机のうえに置いていった（藤原正「先生の思出」『思想ケーベル先生追悼号』所収、岩波書店、大正12・8）。

さらに明治三十年代には、三宅雄二郎が哲学館（現・東洋大学）において、スピノザの略伝とその哲学体系について講じている。

また明治四十二年（一九〇九）九月に東京帝国大学に入学し、ケーベルからスピノザやハルトマン（一八四二〜一九〇六、ドイツの哲学者）の講義をきいた学生に、岩下壮一（一八八七〜一九四〇、大正・昭和期のカトリック神学者）がいる。岩下は最前列の席にすわると、ケーベルが話す英語やドイツ語を熱心にノートに書き写した。ケーベルはときどき受講生を自宅によんで、したしく閑談するという習慣があったが、岩下も何度か晩さんに招かれた。そのときのケーベルとの会話は、フランス語でなされた。かれは日本人には珍しいほどフランス語が達者であった。

卒論はアウグスチヌスの神国論をフランス語でかいた。その審査員のひとりケールであったが、よくととのった論文であると評された。大学院に進み、ギリシャ哲学を専攻するつもりであったが、だんだんカトリック教のほうにむかい、司祭のみちをえらんだ。希代の秀才であり、大
学教授になるよう囑望されたが、信仰の人となった（小林珍雄著『岩下神父の生涯』中央出版社、昭和36・11）。

雑誌記事としては、『国民之友』『日本人』『学林』^{『文学評論』}『文学志からみ草紙』『城南評論』『教育時論』『反省会雑誌』『文学界』『天則』『同志社文学』
『早稲田大学』『六合雑誌』『心海』『青山評論』『太陽』『帝国文学』『月刊世界之日本』『哲学雑誌』『東洋哲学』『時代思潮』『警世新報』などの諸
雑誌が、スピノザの人と学説にかるくふれたり、他との比較としてその名をかゝげたりしている。

この時期まだスピノザについての単行本はまだ生れていないが、啓蒙を目的としたり、学問的に一歩ふかくみ込んだ概説風の著作などが現れるようになった。

三宅雄二郎著『哲学涓滴 全』（文海堂、明治22・11）……………哲学史風にかゝれた哲学入門書。このなかでスピノザの生涯と哲学大系を略記した。

洪江保著『哲学大意 全』（博文館、明治27・2）……………初学者むきの哲学入門書。同書の附録において、スピノザの略伝をしるした。
フォン・ケール著『哲学要領 全』（南江堂書店、明治30・6）……………東大における講義草稿を本にしたもの。このなかでスピノザに言及した。
『新撰百種』哲学問答 全^{第4編}（普及舎、明治30・7）……………哲学入門書。このなかの問答で、スピノザの名とその哲学の断片についてふれ
ている。

中島力造編『列伝西洋哲学小史 下巻』（富山房、明治31・6）……………著者は本書において、スピノザの伝記とその学説についてくわしく語っている。
この時期のものとしては、特記すべき研究である。

井上円了講述^{『通俗講談 言文一致』}『哲学早わかり』（開発社、明治32・2）……………一般むけの哲学入門書である。同書の附録「西洋哲学者年表」に、スピノザ略
伝がのっている。

蟹江義丸著『西洋哲学史』（博文館、明治32・8）……………このなかでスピノザ小伝とその哲学の特徴がしるされている。

三宅雪嶺述『近世哲学史』（哲学館 第十二学年度 高等教育学科）……………スピノザの略伝とその哲学大系がしるされている。

講義録、明治33・？

波多野精一著『西洋哲学史要』（大日本図書株式会社、明治34・11）……哲学入門書である。このなかでスピノザ哲学の概要を述べている。

朝永三十郎編『哲学綱要』（宝文館、明治35・11）……哲学入門書である。スピノザの平行一元論についてふれている。

高橋五郎著『一元哲学』（前川文栄閣、明治36・9）……このなかで二十数頁にわたってスピノザの一元論について述べている。

大西悦著『西洋哲学史（下巻）』（警醒社書店、明治37・1）……スピノザの生いたちからその哲学大系について、百ページあまり叙述している。

中島のスピノザ研究とともに、この時期のもっともくわしい研究である。

この時期の雑誌にのったスピノザ関連記事の多くは、単純な紹介記事がほとんどであるが、三宅、中島、蟹江、波多野、朝永、高橋、大西らが著わした哲学的、哲学概論風の著作のなかには、専門的に攻究した跡がみられるものもある。

第四期（すなわち明治四十年代）：満州をめぐる日露戦争がはじまったのが明治三十七年（一九〇四）、翌年ポーツマスにおいて講和条約をむすんだ。ヨーロッパにおいては世紀末のおわりであり、二十世紀の新しい哲学が発生しつつあった。ドイツの哲学界においては、ドイツ観念論、カント研究その他の新理想主義哲学が主流になりつつあった。海外の哲学の動向をみるに敏であったわが国の哲学界は、ドイツなどに追随し、いちはやくカント、ヘーゲル、オイケン、ニーチェ、ショーペンハウアーなどを受け入れ、哲学界はみぞうの盛況を呈した。⁽³⁾

明治四十年代は、心理学・認識論・倫理学・論理学・西洋哲学史などの論著にくわえて、ショーペンハウアーやヘーゲルの哲学に関する訳本も刊行された。

スピノザについていえば、『倫理講演集』『東洋哲学』『国民雑誌』『哲学雑誌』などにおいて、小論がのったりその名が散見する。この時期の特筆すべきスピノザ研究といえば、波多野精一が学位請求論文（ドイツ文）として東京帝国大学に出したものの翻訳『スピノザ研究』（警醒社書店、明治43・4）が公刊されたことである。これこそ明治期のスピノザ受容史をかざる唯一の金字塔である。

〔大正期〕

明治四十五年（一九一二） Ⅱ 大正元年から大正十五年（一九二六） Ⅱ 昭和元年までをいう。

大正年間、学会の分化がおこなわれ、さらに雑誌や著作などの刊行が盛況を呈したが、これはこの時代の哲学研究が従来にない発展をとげつつあることを示すものであった。その盛観ぶりをみて、『哲学の世紀』とも呼べるほどであったが、残念ながら哲学研究といっても、その大半は西洋哲学を模倣し、焼き直したものであり、真にわが哲学界の独立と卓越とをしめす独創性に乏しいものであった。⁽⁷⁾ 独創的な哲学者と称すべきものは、講壇哲学界の西田幾多郎だけであった。

大正五年（一九一六）に「京都哲学会」が成立し、同年四月『哲学研究』が『哲学雑誌』と分離して発行された。哲学関連の雑誌としては、つぎのようなものが刊行された。

- 『岩波叢書』……………大正四年～六年（一九一五～一六）にかけて十二冊刊行。
- 『宗教研究』……………大正五年（一九一六）発刊。
- 『思潮』……………大正六、七年（一九一七～一八）発刊。
- 『思想』（岩波書店）……………大正十年（一九二一）創刊。
- 『講座』（大村書店）……………大正十二年（一九二三）創刊、大正十五年（一九二六）廃刊。

大正期にはおもな哲学の専門書が七、八十点、訳書（カント、リッケルト、ケルケゴール、ニーチエ、ベルグソン、デューイ、オイケン）だけでも四、五十点刊行されている。ほかに哲学辞典として、

- 『哲学大辞書』（同文館、大正元・6）
- 『岩波哲学辞典』（岩波書店、大正11・10）

が完成している。

大正期の哲学は、およそドイツ的な新理想主義哲学（十九世初頭のドイツ観念論の精神にもどり、それを発展させようとする傾向）の特徴をも

って発達した。⁽⁸⁾ わが国の学界はドイツ学会のうごきに同調して行動し、その特色は著しく新カント学派（カントの批判主義を復興しようとした哲学の学派）であった。⁽⁹⁾

研究方法の特徴として、これまでのように英語文献などをよみ、内容を概括し、一般論をのべていたのをやめ、原典主義に立ちかえり、原書を熟読玩味し、哲学的考察をふかめ、分析的研究や専門的紹介をおこなうようになったことである。そこには当然、先人の学説をあたかも自分の意見であるごとくのべることもあったであろう。

この時期、スピノザはどのように取りあげられたのか。まず従来のような特定のテーマに関する専門的な記事が、『倫理講演集』『哲学雑誌』『東洋哲学』などにみられる。単行論文として注目されるものは、――

「哲学的精神——スピノザ」……鹿子木員信が大正三年（一九一四）五月の「哲学会春季大会」において、スピノザの人と思想について語ったものを『哲学雑誌』（第三一九号、大正三・？）に発表した。これは長編論文である。同人は前年——大正二年（一九一三）秋から大正三年一月初ろまで、慶応義塾大学で「文明と哲学」と題する講演を十回おこなっている。第六回目の演題は「スピノザ」であった。のち「孤高のスピノザ」といったタイトルで自著『文明と哲学的精神』（慶応義塾出版局、大正四・12）に収録した。

それはスピノザの生いたちから述作の特色について語った、一四〇ページほどもある大論文である。

もう一つ特記すべき論文は、出隆が『哲学会雑誌』（大正六・？）大正七・？）に、四度にわけて連載した長編論文「スピノザ哲学に於ける認識問題」である。

大正期は哲学関連のいろいろな書物（概論、入門書など）が刊行されているが、「近代哲学」の章では、よくスピノザが取りあげられ、講義風にかつ総合的に論じられることが多かった。

スピノザは明治初年から大正にかけて、啓蒙学者や哲学徒によって、雑誌や講演会、論者のなかで紹介されてきたが、まだ本人の著述は、翻訳されたことはなかった。西がスピノザについて第一声を発してから約五十年ぶりで、ついに反訳が刊行された。大正七年（一九一八）三月、スピノザの主著『哲学大系』が小尾範治（一八八五〜一九六四、のち小樽高等商業学校教授）によって訳され、岩波文庫の一冊にくわえられた。同年四月、スピノザの生涯と思想の発展、およびエティカの翻訳を加えて一冊とした『スピノザ哲学大系（エチカ）』（菊版）が、同じく岩波書店から刊行された。

〔昭和期〕

前期——昭和元年（一九二六）から同二十年（一九四五）までの期間。

プラトン、アリストテレス、デカルト、スピノザ、カント、ヘーゲルといった古典派哲学の研究は、これまで通りつづけられていたが、大正の末ごろからドイツ・オーストリア学派、現象学派（物の本体は認識できないものとし、あたえられた現象を実在とみとめる立場）、マルクス主義（唯物史観的思想）などの思想が普及した。

昭和六年（一九三一）に満州事変がおこり、同十二年に日中戦争がはじまるや、日本は“非常時”（ファシズム反動時代）にはいり、国民を長期戦態勢にみちびいた。昭和十六年（一九四一）太平洋戦争がはじまり、愛国主義をうたい、国防国家体制強化にむかうにつれて、神がかり的な国粹哲学がおこり、京都学派の一部の教員のように侵略戦争に肩入れをする哲学者もふえた。

大正のおわりごろより、官私大学の哲学科の学生の数がふえるにつれて、哲学研究も生きいきとしてきた。昭和期に入ると、哲学の研究法は、特殊的、精密的傾向をすすめて行った。¹⁰⁾

スピノザについていえば、小さなテーマに関する研究は、『哲学雑誌』『哲学研究』『Philosophia 哲学年誌』（早大文学部編の哲学科の機関誌）『理想』などの諸雑誌のほか、外地にある帝国大学の紀要などに発表されている。また哲学概論、哲学史、倫理学のなかの一章として、スピノザが取りあげられ、さらにロシアにおけるスピノザ研究（弁証法的唯物論）の訳書が公刊された。

昭和前期には、スピノザ研究の顕著な業績がいくつか刊行されている。昭和七年（一九三二）は、スピノザやジョン・ロック（一六三二〜一七〇四、イギリスの哲学者）が生まれて三百年になることから、哲学会秋季大会において両人が講演のテーマとなり、十二月には「スピノザ、ロック生誕三百年記念号」が刊行された（『哲学雑誌』第四七号、昭和七・12）。

『スピノザとヘーゲル』（岩波書店、昭和七・七）

注・スピノザ生誕三百年記念号

ミーチン
ラリツェウィチ著 『スピノザと弁証法的唯物論』（ナウカ社、昭和8・9）
広島定吉訳

鈴木謙彰訳編 『スピノザ哲学批判』（隆章閣、昭和9・2）

安倍能成著 『スピノザ 倫理学』（岩波書店、昭和10・8）

篁 実著 『スピノザ』（弘文堂書房、昭和12・2）

稲富栄次郎著 『スピノザの哲学——神の認識の問題を中心として』（理想社出版部、昭和14・1）

注・これは昭和五年（一九三〇）刊行の初版の増強改訂版。

畠中尚志と斎藤响の誤訳論争。

本邦においてはじめてスピノザの著述を翻訳したのは、小尾範治であったとすると、二人目は畠中尚志であった。畠中は病苦にもめげずスピノザの『知性改善論』をすこしずつ訳し、それを岩波文庫に入れてもらうことができた（昭和6・4）。畠中はその後もうまずたゆまずスピノザの翻訳に従事し、めばしい作品をほとんど訳した。

昭和七年（一九三二）四月から翌年の十一月にかけて、斎藤响訳『スピノザ全集 全二巻』（内田老鶴圃^{うちだらうかくん}）が刊行された。当初、四巻まで出す予定であったようだが、なぜか二巻でとまっている。そのわけは昭和九年（一九三四）七月から十二月にかけて起った畠中と斎藤とのあいだの翻訳論争にあるのかも知れない。両人は雑誌『思想』を舞台に、何度か言いあそった。

畠中はいっている。古典哲学書の翻訳は、容易なわざではないこと。それゆえ、訳業に多少の不完全さがあっても、なるべくいたわりの心をもってこれに対すべきであろうと。しかし、その不完全さが学術書として許容できぬものであるとき、またその訳がじゅうぶんな学術的理解のうえに立ってなされた仕事であるかどうかについて疑問が生じたとき、これをそのまま、看過することは、学問にたいして忠実な所以でないという。

畠中は斎藤訳の第一巻に収めてある「神・人間及び人間の幸福に関する短論文」を検討した。なぜなら、この翻訳がとりわけずさんに見えたこと。原典はオランダ文であるため、訳文の正否を調べる人がわりにすくないと思われること。この訳書が刊行後、一年にして出た第二巻には正誤表がついているが、筆者（畠中）が指摘する誤まりが、ひとつも正されていないことによる。

畠中のみるところ、この翻訳の不完全な部分は百箇所以上もあり、そのなかから三十ほど問題点（誤解、誤訳、悪訳、脱落など）を指摘した。

そして同人の結論は、こんなずさんな哲学の訳書が世間にまかりとおっていることは、わが学界の名誉でないこと。もし訳者がスピノザの翻訳のしごとをまじめにやってゆく気持があるなら、もっと十分なスピノザの思想の理解と学的良心とを準備されんことを希望する、とむすんだ（「邦訳『スピノザ全集』の学的価値——斎藤响氏の業績を検討す」『思想』7月号所収、昭和9・7）。

誤訳の指摘にたいして、斎藤はすぐに反論し、つぎのようなことを述べた。スピノザの『短論文』の翻訳をここまかに精読していただき光栄であること。拙訳の不満点としてあげられている個条については、そうだとみとめられるものもあれば、かならずしも承認できないものもある。改訂のさいに参考として大いに役立つところがあるだろうと思われる、と。

貴兄は斎藤という恐るべき強敵を全力をかたむけて粉碎しようとあせっておられる。商売がたきを故意に中傷しているのではないかと誤解されてもしかたがない。貴兄の議論の調子を苦笑しながら追ってゆくうちに、「我々の自身」は「我々自身」でたくさんだろうという所に到ると、おもわず吹きだしてしまった。貴兄はきわめて悪しき「業績検討者」である。貴兄の訳書を見ると、「誤解、誤訳、悪訳」などを発見できるが、貴兄じしんの訳書のご業績を検討してもらいたい。

小生は貴兄の訳業にたいして、めちゃくちゃにケチをつけることが今までにできたし、いまでもできる。わが学界の文科方面において、これまで学者の信用をおとし、地位をうしなわせる意図のもとに、その著述のあげ足とりの攻撃記事を、雑誌に公然と発表させることが、たびたびおこなわれてきた。ヨーロッパの学界では、理論上の論争をべつにして、ひがごと（道理や事実にあわぬこと）はほとんど例がないそうである。ところが日本ではそれが往々にして成功し、それがために気のよわい、争いを好まぬ紳士らは、悄然として学界から退場するのをよく目撃する。

理論闘争でもないのに、再び小生にこんなくだらぬアポロギア（弁明書）をかかせないで欲しい。好漢（りっぱな男子）自重せられよ（「スピノザの翻訳に就て——畠中尚志といふお方へ」『思想』8月号所収、昭和9・8）。

この反論をよんだ畠中は、ふたたびペンをとり、いい返した。じぶんの論点にたいする回答になっておらず、遺憾の念を禁じえない。斎藤氏の回答は、学的にまったく無価値なものである。わたしは十数年来、病床に仰臥する身であり、いわゆる学界とは無縁の人間である。したがって人をおとしいたり、人を学界から退場せしめたりするひまも必要もない人間である。

貴殿はこれを機に、スピノザ研究者らしく、そのしごとにおいて慎重になり、またその態度において謙虚になり、りっぱな業績を示すことにひたすら努力せられるようになれば、わたしの本懐（本意）これにすぐるものがない、とむすんだ（「斎藤响氏の謬見を正す——スピノザの翻訳問

題を中心として」『思想』十一月号所収、昭和9、11)。

これをもって両者の翻訳論争は、終ぞくした。しよせんお互い、しごとのあら捜しをし、どろ試合を演じたかっこうになった。が、いうことはやさしいが、二百五十年以前の古いオランダ文を邦訳した苦労は察してあまりある。内容をとった大意であれば、申しのがれることができたかも知れないが、正訳(逐字訳)となれば、話はべつである。じぶんのしごとに自負心をもつ者は、他人のあらに我慢できなかったのであろう。翻って考えるに、他人の哲学的著作を日本語に訳しても、それは学問でもなければ、ましてや業績でも何でもないのである。もし翻訳を学問や業績だと考える者がいたら、それこそ謬見なのである。

後期——昭和二十年(一九四五)から同六十三年(一九八八)まで。

わが国は軍国主義を押しすすめた結果、連合国と無謀な太平洋戦争に突入し、三年八月ほど闘ったのち、原爆投下とソ連の参戦により、昭和二十年(一九四五)八月十五日ポツダム宣言を受諾し降伏した。このとき日本の国土の大半は、焼跡だらけであった。……

戦後、左翼思想が台頭し、マルクス主義、功利主義、実存主義、現象学、分析哲学などが活発化した。中世哲学、古典哲学、フランス哲学なども活況を呈した。昭和四十年代ごろから、日本はポスト工業社会にむかい、国際化の歌い文句のもとに、社会科や、哲学が発展し、数多くの研究成果がうまれた。

平成期(一九八九)

在野の若者や中高年層のあいだで、左派の近代思想や古典的な思想家——カント、ヘーゲル、スピノザなどの哲学が見直され、国内各地で「読書会」「哲学カフェ」「……の会」などが開かれ、活潑な勉強会を展開している。

スピノザ研究やその受け入れ方はどうであつたらうか。終戦の翌年(昭和二十一年「一九四六」)の秋——ロマン・ロラン(一八六六—一九四四、フランスの作家)のスピノザに関する読書体験をしるした「スピノザの閃光」(宮本正清訳『エム・ペドクレースとスピノザ』所収、岩波書店、昭和21・9)が公刊された。諸雑誌にのつたスピノザ関連の論文は、ひじょうに少ない。が、戦後、旧著や新書、訳本などの出版が活況を呈した。

そういった出版界の波にのって、スピノザ関連の著訳書が刊行された。

昭和二十二年（一九四七）から同五十七年（一九八二）までの三十五年間に、専門書が十三冊、訳書が十二冊ほど刊行されている。

高坂正顕著『スピノザの哲学』（玄林書房、昭和22・10）

注・戦後最初に刊行された、スピノザ入門書。

ゲブハルト著『スピノザ概説』（創元社、昭和23・10）

豊川昇訳
ルカス、コレルス『スピノザの生涯』（弘文堂、昭和24・6）
山元一郎訳編

注・アテネ文庫中の一冊。

渡辺義晴著『資本主義黎明期の哲学——スピノザの社会思想』（刀江書院、昭和25・9）

スピノザ
島中尚志訳『神・人間及び人間の幸福に関する短論文』（岩波書店、昭和30・1）

桂壽一著『スピノザの哲学』（東京大学出版会、昭和31・3）

島中尚志訳『スピノザ往復書簡集』（岩波書店、昭和33・12）

島中尚志訳『デカルトの哲学原理 附形而上学的思想』（岩波書店、昭和34・9）

ルカス、コレルス『スピノザの生涯と精神』（理想社、昭和37・12）
渡辺義晴訳

下村寅太郎編『世界の名著 スピノザ ライプニッツ』（中央公論社、昭和44・8）

工藤喜作著『スピノザ哲学研究』（東海大学出版社、昭和47・3）

ジヨゼフ・モロー
竹内良知訳『スピノザ哲学』（白水社、昭和48・3）

石沢要著『スピノザ研究』（創文社、昭和52・4）

清水礼子著『破門の哲学』（みすず書房、昭和53・6）

中野幸次著『エチカの形成と哲学的世界』（東京堂、昭和54・3）

スピノザ原著
中村為治訳『スピノザ倫理学（羅和对訳）』（山本書店、昭和54・8）

竹内良知著『スピノザの方法について』（第三文明社、昭和54・10）

工藤喜作著『スピノザ』（講談社、昭和54・10）

注・講談社の「人数の知的遺産」³⁵にあたる。

工藤喜作著『スピノザ』（清水書院、昭和55・10）

注・清水書院の「人と思想」シリーズのうちの一冊。

J・フロイデントール『スピノザの生涯』（哲書房、昭和57・2）
工藤喜作訳

平成期に入ってもスピノザ関連文献はさかんに公刊されており、平成六年（一九九六）から同二十六年（二〇一四）までの十八年間に、専門書が二十二冊、訳書が七冊刊行されている。我が国におけるスピノザは、明治期以来、平成のこんにちに至るまで、多くのファンを得たが、わが国のいかなる学徒に、いかなる決定的影響をあたえたかについての研究はまだないようだし、今後の課題であろう。

わが国の哲学研究はどうあるべきか。わが国における最近のスピノザ研究は、「戦後の最先端の研究を取り入れて、徐々に新しい研究がなされてきている」（工藤喜作著『スピノザ』清水書院）という。『取り入れる』とは、撰取する（じぶんのものにする）意と理解される。が、人の学説をありがたがり、わが意を得たりと利用し、論文の注を欧文でにぎにぎしく飾りたてるのは、日本人研究者の悪癖である。それは外国の研究者の所説の受け売りにすぎず、そこにはなんら独創のひらめきもみられないのである。

日本人のスピノザ研究は、世界に通用するものかどうか何ともいえない。われわれはただ自己流の解釈をし、放言を吐いているだけなのか。われわれの研究は、とても西洋の研究者のものにたち打ちできるものでなく、ただかれらの後塵を拝し、かれらの研究に沈酔しているだけのものかも知れない。が、いつの日か西洋の研究者の眼をひらかせるものが生れる日が訪れるかもしれない。またそうあらねばならない。

筆者は日本人のたちばからスピノザ研究をおこなう——日本的なスピノザ研究をめざしたい、とあって、日本におけるスピノザ伝来小史をかくはめに陥ったが、叙述が粗笨に流れてしまった。

注

（1）松本正夫「哲学」（『日本の人文科学——回顧と展望』所収、印刷庁、昭和24・7）、一二六頁。

（2）宮田修「講演 思想界の輸入超過」（『倫理講演集』第一四一号所収、大正3・5）

- (3) 金子筑水「明治大正の哲学」(『太陽』第三三卷・第八号所収、昭和2・6)
- (4) 注(1)の二二七頁。
- (5) 稲毛金七著『哲学教科書』(大同館蔵版、大正15・4)、四〇三頁。
- (6) 「哲学会史料」(『哲学雑誌』第五七四号、昭和9・12)、一二五五頁。
- (7) 注(5)の四〇五頁。
- (8) 注(3)の二〇〇頁。
- (9) 注(3)の二〇三頁。
- (10) 注(6)の一二五六頁。

Spinoza in Japan

Some 140 years have passed since Baruch [Benedictus] de Spinoza (1632~77), a Dutch philosopher, was introduced to Japan. Though he is a minor thinker in this country, he will attract many adherents and fans hereafter.

This essay is comprised of 5 chapters. (1) The short life of Spinoza (2) The Japanese literature of Spinoza with notes (3) The list of Japanese literature as cited in this paper (4) Spinoza and Japan (5) Spinoza in Japan (in English)

Lectures on Western philosophy (dogmatic theology) were first taught to the Japanese by Padre Pedro Gomez (1533~1600) at the Jesuit College in Amakusa (天草), Kyūshū Island, in the 3rd year of the Bunroku (i.e. 1594). The students then were taught *Compendia* compiled by this Spanish Jesuit as their textbook. Though Japanese Christians came in touch with Western ideas through Jesuit activities and books on Christianity, they newly started philosophical education broke down due to the ban of Christianity by the Tokugawa government. During the national isolation by the Tokugawa government in the Edo period, no Japanese knew about Spinoza's philosophy.

The Meiji period (1868~1912).

After the Meiji Restoration, however, some scholars of Western science showed their keen interest in learning Western philosophy. It was Nishi Amane (西 周, 1829~1898), a bureaucratic scholar, who first taught Spinoza's brief life and philosophy to his students at his private school in 1873, based upon *A Biographical History of Philosophy* by G.H.Lewes (1875) and other books.

Nishimura Shigeaki (西村茂樹, 1828~1902), a bureaucratic scholar, was also a pioneer who referred to Spinoza (士畢諾撒) in his short article titled "Shingakuryakuden" (心学略伝, i.e. a brief sketch of metaphysics) published in "Tokyo gakushi Kaimasshi" (東京学士会院雜誌, i.e. the

Magazine of University graduate's Society) in 1883.

Actually both of them did not study Spinoza from the original texts but from the Western history of philosophy. Another bureaucratic scholar named Katō Hiroyuki (加藤弘之, 1836~1916) also knew Spinoza, copying out some lines of natural rights of man by Spinoza from P. M. F. Brunetiere (1849~1906), s German translation.

In April, 1886, a book entitled "Rigakuenkakushū" (理学沿革史, i.e. A History of Philosophy) was published by the Editorial Office at the Ministry of Education. This was the Japanese translation of "*Histoire de la philosophie*" written by A. J. E. Fouillée (1872~79). Chapter 4 of this book showed Spinoza's way of argument, an outline of his philosophy, as well as his morals in detail.

In June, 1886, Nakae Chomin (中江兆民, 1847~1901), an advocate of civil rights, published "Rigakukōgen" (理学鉤玄, a kind of introduction to philosophy), which contained Spinoza's pantheism and his views on God and morals. Spinoza's name and his philosophy was not known well among the intellectuals then.

But from 1887 to 1906, the philosophical world in Japan developed remarkably thanks to the foundation of the Philosophical Society as well as to the "Tetsugakukaizasshi" (哲学会雑誌, i.e. the Magazine of Philosophical Society). Spinoza the Man and his philosophy were introduced to the general public through different magazines and technical books. Those interested in Spinoza were mainly academics, however. Lectures on Spinoza were conducted at Tokyo Imperial University (i.e. Tokyo University) and at "Tetsugakukan" (哲学館, i.e. the School for Philosophy, nowadays Toyō University) in Tokyo.

The Taisho Period (i.e. 1912~1926).

This period was called “the Century of Philosophy”, which presented a grand view of philosophy in Japan. Not only the new philosophical society (i.e. Kyōto Tetsugakukai [京都哲学会]) was established but many technical magazines, books, and Japanese translations were published. Our philosophical circles aligned themselves with the German neo-Kantianism. The traditional way of studying philosophy in Japan was founded on Western scholars. Instead of following suit, the Japanese scholars began to analyze and expound original texts.

In March 1918, fifty years after Spinoza was introduced to Japan by Nishi Amane, one of Spinoza’s major writings, “Ethica” (Ethics, 1677) was translated by. Obi Hanji (小尾範治, 1885～1964) from the German translation.

The first half year of the Shōwa period (1926～1945).

The study of classical philosophers like Plato, Aristotle, Descartes, Spinoza, Kant, and Hegel continued as usual though, phenomenology and Marxism gained ground. As the number of students majoring in philosophy at different universities increased markedly, the study of philosophy in Japan became active. The Manchurian Incident (1931) and the Sino-Japanese War (1937) caused by the militaristic government plunged Japan into a national crisis and finally led this country into the Pacific War (1941～1945).

But in the 1930s, some technical books on Spinoza were published and his major works (2 vols) were translated by Saito Sho (斎藤响) from 1932 to 1933. While celebrating victories, a kind of inspirational and nationalistic philosophy was dominant.

The second half year of the shōwa period (1945～1988).

In August 15th, 1945, the Pacific War ended with Japan’s unconditional surrender. After the war, out of the ruins, radicalism, Marxism, utilitarianism, and existentialism increased in power. The study of Spinoza proceeded slowly but steadily, producing lots of papers, technical books and translations. But such numbers are unremarkable today. What matters most is how far these Japanese studies pass the rest of the world.

Heisei period (1989~).

In March, 1989, Spinoza Kyōkai (Spinoza Society of Japan) was organized to promote and activate the study of Spinoza, and still more to understand him well across the nation.

Such classical philosophers as Kant, Hegel, Spinoza, and the left-wing thinkers became popular among the young as well as persons of middle or advanced age.

Thanks are due to the Spinoza House in Rijnsburg, the library of Rijksuniversiteit in Leyden, and the City Archives in Den Haag, Holland.

Sep. 1st 2014

Prof. *emeritus* Dr. Miyanaga Takashi

Hosei Univ, Tokyo, Japan